
純白の従者と漆黒の恩寵管理者

tomotomo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

純白の従者と漆黒の恩寵管理者

【Nコード】

N1107X

【作者名】

tomotomo

【あらすじ】

世界識別番号UN5000433、仮称アンダーワールド 魔粒子という不可思議な最小物質と恩寵技能というものがある世界。シークリッド大陸歴2001年3月、150年前に時の聖人であるエウルペペ王国国王によって滅せられたはずの魔王ティアナークが復活。拠点は新大陸の更に先で発見され、亜人や魔獣を大量に載せている浮遊島 アーク。時代は勇者を求めている……のか？

召喚された黒乃の異世界冒険譚、なのででしょうか。

ジャンルのには、従者、人形、スキル、建国、内政等。

0話 魔王復活

シークリッド大陸歴2001年、新しい世紀を迎え盛大なミレニアムカウントダウンが行われた翌々月に『それ』は起こった

世紀が変わる年であったこの年の祭りは毎年の年明けの祭りと比較にならないほど大きく、祭り自体に一月以上、そして終わってからも人々は集まり続け出店や露店が国の主要な街にあふれていた。そんな中にあつては通常業務に戻りつつあつた国を守護する警備隊も弛緩しており、大空から『何か』が雲に隠れながらやってきているのになかなか気づくことができなかつたのも仕方ないことであつたのだろう

しかしこの日の夕方、忘れることができない出来事が起こる

最初に空気が変わったことに気づいたのは王国の重犯罪者や政治犯罪者を収監する国营牢獄であるヴェストローウ牢獄　王国の西端、大陸から突き出た半島のような所にある　の警備兵だつた
ヴェストローウ牢獄は大陸の西端にあり、陸路だと王国の内部を、海路だと王国が南の海を越えたところにあるダークヌス大陸との販路を通らなければならないために長い歴史の中でもほとんど攻撃されず、またヴェストローウの東側にある城塞により難攻不落と知られており、一度も攻撃されたことのない西の海側の物見塔にまじめに務めているもの好きな輩　特に今は100年来の祭り後だ　など
いながつたのだ。

その警備兵は、近くの街には祭りの残滓が色濃く残る中で辛気臭い

牢獄エリアにいるのに耐えられず、せめて気分を変えようと城壁の方にでてきたのだった。

嗜好品として葉巻を取り出し一服して、息を疲れとともに吐き出そうと上を向いた。すると空にある雲の色が少しおかしいことに気づく。

そういえば先ほどから鳥や動物が騒いでいたので今夜は嵐にでもなるんだろうか、などのんきにしていたのだが、たしかにその雲は明らかに色がおかしく、雲の下に茶色の岩のようなものが見えた時に嫌な予感がして「これは何かの異変だ、本部に連絡しなくては」と電信兵に連絡しに行くために身を翻そうとしたその時

地を引き裂くような轟音と数瞬遅れて建築物が崩れた音が響き、大きな『島』が雲の下から現れた。

その島は横に20kmもあるような巨体であるにもかかわらずどのような術によつてなのか浮いており、浮遊島の中央の方には威容を讃える荘厳な黒い城が建っている。

こちらの方に向けられている前方にはこれまた大きな筒のようなものがいくつも見え、数瞬ごとに500mの距離を何かが飛来して破壊を振りまく。

警備兵をその異様な光景に暫しの間目を奪われ沈黙していたが、城壁の一部や牢獄付近にある建物が壊れたことによりやっと異常に気付いたほかの警備兵や収監されている囚人達が騒ぎ出したことによつて現実に引き戻される。

「敵襲う！！敵襲うー！！！！」

叫びながら牢獄に隣接している、電信兵が居る事務所に駆けっていく警備兵。

敵襲を知らせる鐘については、鐘がある塔に向かっていく同僚の警備兵が見えたため、電信兵に【通心】を使って王国の中枢部に知らせてもらおうと向かったのだ。

事務所がある通りに差し掛かると正面の事務所を視界に捉え、動転して空回りする足を向ける。

が、

先ほどと同じ地を裂くような轟音が聞こえ、同時に100m前にあった事務所が吹き飛びその余波の爆風で鍛えた身体が簡単に浮き上がり後ろに飛ばされ壁に背中から激突することになった。

この警備兵が気を失う前に最後に見たのは敵性浮遊島から幻獣と呼ばれるグリフォンや、存在するだけの空でも海でも山でもその場を支配してしまうことから根っからの支配者であるとおそれられるドラゴンが群を成して飛んできており、ローブを着こんで魔術師と推定できるダークエルフや鎧を背負った騎士のようにみえるオーガやゴブリンたちが騎乗している姿だった。

「神聖な幻獣と邪悪な巫人がなぜ……？」

『魔王ティアナークの復活!!!』

王都でも地方の街であっても街角でこの情報が叫ばれていることである。

片時も離れなかった純白の従者と共に150年前に亜人や魔獣を率い魔の国を建国し人族排斥を目指した、漆黒なる魔王。

短命種である人族では直接経験した者はおらず文献や吟遊詩人の詠う物語にのみでてくる、邪悪である魔王。

当時最も繁栄を誇っていたエウルーパー王国の長い歴史の中でも屈指の聖人であった。また国名をエウルーパー神聖王国に改号した

国王ジェラルド・アークライトの命令により滅せされた、悪の根源たる魔王。

災厄の化身の復活の報は国中に広がると共に、ヴァストーウ牢獄の重犯罪者の大部分が解放され、ヴァストーウの城塞までを占拠されたという不名誉の報が相次ぎ届き、歴史上一度も国土を侵されたことがないということに誇りをもつ神聖王国民を激怒させることにな

った。

今もなお世界最高の軍事力を持ち西の大海を超えた先にある新大陸の発見・開発や、魔獣や亜人が多い穢れた大陸であるダークヌス大陸の制圧の先駆けとなっている神聖王国にはプライドの高い民が多いのだ。

命からがらに逃げてこれた目撃者によると、魔王が乗った浮遊島は浮いているのが不思議なほどの巨体であり、海の上雲の下から現れ遠距離魔術での先制攻撃、その後には幻獣や魔獣に騎乗した亜人達がヴァストーウ牢獄に乗り込み、浮足立った且つ祭りの後で弛緩していた。あろうことに装備を点検していない者すらいた。警備兵を蹴散らし、後方からの長距離魔術砲撃の援護を受けながら白兵戦で易々と牢獄の本部や事務所を押さえてしまったとのこと。

また、牢獄には魔王の過去の仲間やその子孫が収監されていたように、牢獄を破壊して解放し、逆にヴァストーウ全体が占拠されてしまいい詰めていた警備兵達が多数牢獄に放り込まれることになったようだ。

魔王の復活だとすぐにわかって【通心】や【電心】で王国首都に伝えられた、のは牢獄に閉じ込められていた者がティアナーク様！と歡喜に叫んだことによる。

復活した魔王ティアナークからの声明は未だ届いていないが、ここ、王都から少し離れた街であるノルウーでも先ほどから老若男女さまざまな人々が外を走り回っていて、文献や歌物語で邪悪に語り継がれた魔王の現実での復活に対し何等かのアクションを起こしている。

恐怖し神聖王国が崇める神に祈る経験な老人、事態がわかっておらず大人が叫んだり慌てている状況に泣き出す子供、物語での話など誇張されたものだど嘯き隣にいる彼女に強がってみせる青年、この情報が神聖王国にどのような影響を与えるか、隣国との交易への影響を考えている恰幅のある女商人

まだまだ混乱は終わりそうもない

いや、まさに始まったばかりなのであろう、魔王の復活による動乱が。

願わくば物語のように勇者が現れて魔王を打倒してくれんことを。

ノルウーの知

識人グレンの日記より

ヴァストーウ牢獄を解放し東の城塞を占拠して兵士達が一息ついた頃、周りを圧倒する程輝く内装であるのにもかかわらず、静謐で厳

肅な雰囲気漂う空間に男と女だけがいた。

ここは浮遊島の中心にある城の最上階付近にある魔王ティアノークの私室で、広い空間の扉から奥には大きな事務机が置いてあり、その周りの壁には古今東西種々の本がきれいに整頓された本棚が並んでいる。また、本棚のない壁にもカラス張りの巨大な棚があり、魔王配下となっていたドアーフ達作り上げた武器や甲冑が並べ部屋に威圧感を出すのを促していた。

部屋の主　事務机に座ってティーカップを傾けていた　がコトツとカップをソーサーに戻す。するとすかさずに部屋の端で控えていた純白を主張する従者が紅茶のお替りを入れる。その時に従者は主である魔王が少し震えていることに気づく。

「ふ、ふ……ふふ……」

その震えは武者震いによるものか。もしくは自分に至らないところがあつて不興を買ったのだろうか。

「どうかいたしましたか」

従者は機嫌を損ねないように慮りつつ尋ねる。

「いや、どうかもなにも……とうとう、じゃないか」

万感胸に迫っているのが震えの理由のようだ、と従者は気づく。

「そう、ですね……」

いよいよ主の復讐が、解放が始まるのだ、ということは従者も重々理解していた。

しかし胸に去来する気持ちは、主が前を向いて願いを叶えようとし

それに手をかけていることへの喜びだけではなかったのだ。寂しさ、淋しさ。これは何に対して抱いているものなのか、まだ生まれて200年も経っていない彼女にはわからない。

いや、わかっているつもりでも無駄な感情として切り捨てようとする気持ちが理解を拒絶しているのだ。

この心は主のためだけにあり、この身体は主が歩む道を切り開くための剣(やいば)である盾。心の中で呟いて先ほどまでの思考を排除してまた主に目を向けた。

この城の主、この浮遊島の主である魔王ティアナークは全身を黒という色で統一している。

烏の濡れ羽とでもいうべき艶やかな髪は肩口まで流れており、すべてを吸い込んでしまうかのような瞳は今閉じて何かを思考しているようだった。

上半身は黒っぽい紫のシャツに赤色のラインが走る黒いジャケットを、下半身はこれまた漆黒という表現が似合う仕立てのいいパンツスタイル。手に持っている白磁のカップはその金細工の細やかさから高価であることが伺える。机の近くに立てかけてあるのは大きめの黒い剣で彼が持つ時は部下の前にてて士気を上げる時のみとなっており、その質の良さ 【拡声】 【守護】 【軽量化】 【威圧】などの恩寵技能 グレイススキル が刻まれている に対してもつたいたい使い方をしている。また、机の上には事務仕事をするための様々な小道具の中に優美とも無骨ともとれるような黒い鉄扇が置かれている。これも恩寵技能がいくつも刻まれた名品であり世界にただ一つしかなく彼のお気に入りである。

従者は主へのあふれんばかりの愛ゆえかいささか、いや、大幅に評

価しすぎるところがあり今もまた主の美しさ・かつこよさを目に刻まんばかりに主を凝視しているが、ほかの者たちが見ると、ほとんどの人物が従者を見るであろう美貌を従者は持っている。背中までまっすぐ伸びる純白の髪は透き通りすぎて周りの色を薄く映しているし、人形のように整いすぎた顔は白い肌と妖しく光る赤い瞳とで危うくも奇跡と言えるバランスを持っていて、その身に纏う、侍女服を発展させたような淡い桃色のエプロンドレスもシンプルながらも従者の完璧な容姿を美しく映えさせている。この従者だと、主を立てるために目立たないようにと選んだ服装でもそこまで効果がないようだった。

崇拜以外にも愛情やら性欲やらが混じっている熱い視線を主に送っていた従者だったが、主が目を開けたと同時に目を伏せ、のんびりしている暇はないのだと思いだした。

これまでも怒涛のような忙しさだったが、かつての仲間やその子孫を一部解放した今でも、解放した者たちの居住区への誘導や整理、神聖王国につかまっていた間に得た情報の聴収・分析など、仕事が溜まっているのだ。

こうしてはいられないと、扉の方へ向かい扉を出る前に主に向かい礼をして背を向ける。

その時だった、敬愛する主から言葉がかけられたのは。

「この150年間、俺が封印されている間ご苦労だった。まだまだ迷惑をかけることもあると思うが、これからもずっと、仲間の解放と新たな理想国家の建設の道中でも夢が成された後になっても、俺の半身として共にあってくれ」

その発言は従者にとって不意打ちだった。しかしまったくもって不

快ではない。

「もったいなきお言葉。ご主人様が良いという限り生涯お側でお仕えさせていただく所存でございます」

主からの労いの言葉、150年間待ちわびていたのだ。うれしくな
いはずがなく、忙しい時でなければ今すぐに主人と寝室に行きたい
気分だった。歓喜に震えながら廊下を歩きつつ呟く。

「次は、絶対に、二度と、離れませんわ」

しかしその言葉に混じるのは愛情崇拜歓喜そして……

主人を守れなかった後悔、主人の邪魔となる敵（害虫）への憎悪だ
った。

150年間を取り返しに行く魔王と、150年間を取り返しのつかないものと認識する従者。

常に共にあった二人は、しかしこの150年ですれ違ってしまっただのかもしれない。

0話 魔王復活（後書き）

初めて小説というものを書いたのですが、予想以上に時間かかることを体験しました。

定期的に更新してる作者様はすごいですね……

作者側になってわかる苦悩というのを知っておけば読者の時に考えられることが増えるかなあ、と期待してたりもします。

1話 召喚！ ……いや、拉致の間違いじゃ？（前書き）

主人公視点です

1話 召喚！ ……いや、拉致の間違いじゃ？

「おーい？話聞いてんのかあ？高貴なるセイントクリス様のお言葉を無視してんじゃないぞ。全くせっかく上位原型世界から人間を召喚できたと思えば男だしよお、その年齢じゃあ」

はて。

私は田中黒乃といいます。

容姿は日本人らしく黒髪黒眼で肌は日焼けしていない黄色。身長は185cmだが身体は痩せ形のため威圧感はなく、そればかりか女顔に近い童顔のせいで身体と顔がアンバランスだと大学の女子達から微妙な評価を受ける始末。

勉強だけはそれなりにできる現役大学生で、9月からの留学に備えて6月である今から現地入りするために荷物を準備していた極々平凡な少年？青年？だ

…っと思うのだが……

なぜに、準備の途中に唯一の趣味である人形いじり 女っぽいとか言うな。人形なめんなよ、人形の美しさ神秘さ妖しさをなぜわからない人が多いんだらう。私的にはぬいぐるみも守備範囲ですけど一番好きなのはビスクドールです。ちなみに今いじっているお気に入りの人形は生まれた頃に祖父に買ってもらった世界に一つだけしかないビスクドールでかなり有名な人形匠が造ったらしい。だが自分でもさらに改造していて造形は完璧なバランスなので変えていな

いものの中には暗器とか宝石とかティーカップとか仕込んでます、戦って世話をできる人形を目指して（動かないけどね、自己満足です）。球体関節もつけました　をしていたら座っていた床に穴が開いて落ちたと思ったら天使（仮）がいるっていう状況……？

漫画や小説なんかで見たことのある異世界召喚？いやまさかそんな非科学的なことがあるわけ……

でも目の前にいる天使っぽい翼を生やした男の着ている服は見たことがない素材だし、この地面の土は緑色をしているし、天使（仮）の周りにはたまに光るエフェクトが出ているし……着々と異世界、少なくとも自分は全く知らない世界であるという根拠を見つけてしまっている。

「　ということ。わかったか人間」

ぐちぐちと文句を言いながら　勝手に召喚されたのに愚痴られても困るのだが　この世界と自らに関しての説明をし終わった天使（仮）。

天使（仮）の説明を述べようと思う。天使（仮）の説明は間に愚痴や自分への賛美がしょっちゅう入るので要点以外思い出さたくないのだ。

まずこの世界についてだが、識別番号UW5000433で『クリスワールド』というらしい。

どうせ『クリスワールド』という名前は明らかに目の前にいる天使（仮）がつけたのだろう。自分のことセントクリスって言ってたし。なんだよ『聖なる救世主』って。

気に食わないので自分の中では『アンダーワールド』と呼ぶことにする。私がいた世界のことを『上位原型世界』と呼んでいたから逆の低位の世界ってことで。

どの世界でも、全ての物質には『根源』と呼ばれるものが内包されている。

これは無生物にもあるが、生物の場合は一般的に『魂』と呼称されることを考えると想像しやすいと思う。

根源にはその物質のほぼ全ての情報　人間だと身体の形や内臓の場所、どんな知識や記憶を持っているか、どんな能力を持っているか、など　や性質が入っていて、持っている量でその物の存在のあり方が決まる。ある一定量から人格を持つ、言葉を理解する、大きい形を維持できる、等と段階によってわかれるのだ。人型の生物は高度な知能を持つために維持に必要な最低根源総量が大きく、知能があまりなかったり身体が小さかったりすると必要量も減り、人格を持つかいなには大きな壁がある。

しかしそこらにある石ころや、パソコンのような道具にも根源はある。世界の神話などで長年を経た道具や多くの血を吸った刀、先祖代々大事にされ続けた宝物ほうぶつなどが意思を持つようになる、つまり『付喪神化』するというのは、根源が大きな物に触れ続け思いを受け取り続けたことにより、その物質に人格を持つ量まで根源が溜まった　根源の増える量には限界があり、よほどの業物じゃないと人格持つレベルには届かないが　ということだ。

この根源という考え方を使うと根源に必要な最低量の大きい方からの順番は、人間>人格を持った人間以外の生物>人格をもった無生物>>>>>一般的な動物>>無生物、という風になり、生物無生物という区分はあまり役に立たない。どちらかというとなんか人格を持

つたか否かで区分しているのだ。人格を持った無生物を生物と定義するならば区分として意義があるかもしれないが。

さて、上位原型世界は神々を束ねる主神の直轄世界であるため、人間だけでなく全ての物の根源量が圧倒的に多い。存在に必要な根源量も多いのでそのことを同じ世界にいなから感じることはないのだが。ので人間の創作物や想像された歴史などが文章等の媒体にある程度の量記されると、世界群の下位の方では発生・存在するに十分な根源量を超えて、何らかのきつかけ。人間の想いであったり、たまに生じる人間には知覚できない世界の歪。よって下位の方に降りてきてその創造物を『原型』として、模範として、モデルとして下位世界を形成するのだ。つまり、今私がいる世界は元いた世界でだれかが妄想して黒歴史ノートにでもまとめた物語の世界を『原型』とした世界だということ。

つてことは元いた世界で読んだ数々の小説や漫画そしてゲームなどの世界も下位世界群のどこかに存在するのか：怖い世界には絶対行きたくないなあ、というのがこの話を聞いた最初の感想だった。もちろん半信半疑だ。相手は嘘をついているようにも見えないが、若干頭がかわいそうで妄想癖がある可能性は少なからず言動的に口調的に。

それで気になるこの世界だが、基本的な物理法則は同じ。

しかし今いる惑星は地球の10分の1くらいのサイズのように、最も異なるのは『魔粒子』と呼ばれるものが存在していることだろう。『魔粒子』は原子よりも小さく、大気中にも海中にも岩盤にも人体の中にさえも存在しており、『恩寵技能 グレイススキル』の一

部や『魔術』を行使することによって、集まってそれ自体が固体や液体、炎等になったりすると、物質の原子配列を変えて形を變形させたり性質を変えさらには違う物質に変換する仲立ちとなることができる。

ちなみに魔粒子は使用してもなくなることはない最小単位であり、固体になっても魔術を行使しなくなると元の魔粒子に戻り拡散し、原子配列を変えた後にも拡散していくので原子配列が安定でない形になっていると反発して粉々になってしまう。

「　　っていうわけでお前二度と元の世界には戻れないから」
この世界を考えた奴は魔術っていう未知の力、上の世界にいた頃はファンタジーの中でしかでてこなかった物を何とか科学的に扱えるようにしようとしてこういう設定を考えたのかなあ、と益体のないことを考えていたので今までで一番の懸念事項であったことを聞き逃しそうになった。

「ちょ、ちよつと待って！　いま最後なんて言ったの!？」
慌てて聞き返す

「またぼーつとしてたのか？　さすがは低俗な人間風情め、男だし期待してなかったけど想像以上に愚鈍なようだな。それに比べて俺様は高貴で」

確かに話に集中してなかったのはこちらの不注意だと思う。が、いきなり召喚しといてグダグダと愚痴や自己賛美を入れて聞きにくい説明を自分で何とか咀嚼していたのだ、少しくらい大目に見てくれないんじゃないだろうか。この天使（仮）には無理な相談かもしれないが。というか男だからとか関係ないだろ。それに人間風情って……こいつの説明だとこいつも元は私と同じ世界出身らしいし、黒髪黒眼なんだから日本人だと思うのだが……天使に抜擢されたか

ら選民思想でも芽生えたか？ この世界に来たのは30年前くらいらしいけどその程度の期間で変わるもんだろうか？ ちなみになぜこいつが選ばれたのか知らないけど、真正銘の下位神候補の天使見習いらしいです。肉体は人間だけど世界を改変できるほどの『恩寵技能』を持っているらしい。その力に魅せられて吞まれたというところだろうか。

あとなんで名前が「セイントクリス」なんだよ……あんだ日本人だる全然似合っていないから。

「つまりよお……」

あ、やっと先ほどした話をもう一度してくれるみたいだ。大事な部分を抜き出すと、

「上位世界でそこらへんにある文房具でも下位世界群のさらに下位の方ならその文房具の根源に刻まれている歴史を元に小さな世界が発生することもあるからさあ、創作によってできる世界は下位世界群ではかなり上の方なわけよ」。

世界の段差が比較的高くないので召喚という形で上位世界の物や者を呼べるわけ。人を呼ぶのはかなり大変なんだけどな、俺様が10年くらいかけて準備したってわけよ。何で人間を呼ぼうと思ったかだって？ この世界だと神がいらないから俺様が実質的に最高神みたいなもんでよお、正直このクリスワールドの愚民どもと戯れるのも飽きちゃったんだわ。金だって神権限使えばいくらでも出せるし女だって洗脳していくらでも手に入れられるわけさ。つまりこの世界の者も物も全部俺様にとっては玩具で紛い物なんだ、だったら『本物』の女を手に入れようとするのは普通な流れだろう？ で、召喚した女を墮とすためにいろいろと小細工を用意してたつてのにそれがおじちゃんになったわけだが。だからお前はいらなんだわ。元の世界には戻せないしなあ。できてもやらねえけど。

さっきの理屈なら戻れないのもわかるよな？ 俺様みたく賢くない

と理解できないかなあ？ 世界間の段差はとび降りるのはできても上るのは無理ってこと。降りるときに準備が大変なもの、あまりに高いところから落ちてきたときに死なないように衝撃を逃すクッションを用意するのに手間取るようなもん、ってわけだ。その物質や生物が粉々のぐちゃぐちゃになってもいいなら召喚自体はそこまで準備しなくてもいいんだよ。まあ召喚のきつかけとなる世界の歪みは滅多に起こらないけどな。全くこんだけ喋らされるとはなあ、すぐに処分す

途中からはほとんど聞いていなかった。帰れない？ この知り合いもない、魔粒子なんて得体のしれないものがある世界で死ぬまで生きるというのか？ 自分は天才ではなかったけど堅実に勉強し続けて良い成績をとってアメリカの大学への3年からの編入条件とT o e f l を何とかクリアしたんだぞ？ 祖父が死んでからは裕福とはとても言えない状況だったので高校からバイトして大学そとしてのちの大学院の学費や生活費のために準備してきて、これから勝負というところだったんだぞ？ その準備には家族 両親と妹 が一体となって助けてくれたんだぞ？ 自分の夢を叶えるためのルートを、学校や昔の恩師、留学経験のある先輩や大先輩と一緒に親身になって貴重な時間を割いてまで考えてくれたんだぞ？ 理想であるところある研究の成就を目指し、未熟ながらも手伝ってもらいながらヴィジョンを立ててその達成のために多くの物を対価にしてきたんだぞ？ 自分の想いと労力・努力だけでなく、周りの人たちも巻き込んで邁進してきたんだぞ？

……なのに、道を、閉ざした、理由、が……女がほしいから？ それも関係ない上位世界から拉致も同然に？

信じられない

許せない

コイツダケハ

『ガガ、ガ、ギギ、ガガガ、ガ、ギ』

ふと気付く、周囲の空間がゆがんでいることに。

「なんだあ？ お前、上位世界の人間だから根源量が超でけえからあまり感情を爆発させると世界が軋むんだよ、まあ俺様ほどの多さじゃないけどなあ。つーかなによ？ ただの人間の分際で俺様に対して殺気をぶつけてきてるわけ？ 俺様の素晴らしさに嫉妬するのは仕方ないって許すんだけどさあ、敵意とかうざったくてしょうがないわけよ。まっ、どうせ処分するんだし今やっちやうかあ」

処分、だと？

勝手に拉致って他人の人生を無茶苦茶にしておいて、お目当ての物じゃなかったらガラクタのように捨てるのか？

やはり……コイツはユルセナイ

人生で抱いたことのない殺気をぶつける。ああ、私は、初めて人を殺そうと、殺してもいい、いや殺したいと思っている！

「あああああああ！！！」

ジャケットの横ポケットに入っていた万年筆を握りしめ天使（仮）に飛びかかる。

跳躍により一瞬のうちに距離をつめ天使（仮）の喉が目に入り万年筆を握った右腕で掻っ切るうとする！

ドゴッ！

確かに喉に向けて万年筆が突き出され天使（仮）は避けられない速さだったのにも関わらず、何故か自分が後ろ向きに吹っ飛んで倒れていた。みぞおちに何等かの攻撃を加えられたようで猛烈に痛む。

「ぐっ……あ、な、にを？」

天使は嗤う嗤う嗤う

「ひゃっひゃっひゃっ」

何をしたかって？ お前説明聞いてたの？ 頭大丈夫？ 俺様あ天使だぞ？ この世界の最高神みたいなもんだぞお？ 俺様は強力な恩寵技能をいくつか持ってんだっつうの。さっきのは「物体時間停止」して腹あ蹴り飛ばしたってわけだ。」

天使は嗤いながら、説明しながら私を蹴り飛ばす。髀るように。一瞬で殺せる力はあるけど甚振るのが楽しいから手加減しているといわんばかりのやり方。こいつは天使じゃない、悪魔だ。

「がはっ、ぐう、げほっ……や、めろ……」

「あひゃひゃひゃひゃ。この世界の人間も思う存分殴ってきたけど、

やっぱり元同族、元々は同じ立場だった上位世界の人間を殴るつてのはまた違った爽快感があるなあ。ひひっ、下位世界は元から玩具としてしかみれないからすぐ飽きちゃうんだよなあ」

猶も殴り蹴飛ばされる大事な内蔵器官はおそらく壊れていない
まだ壊されていないだけ　　が痣だらけで左腕は動かなくなっているし意識も朦朧としてきている。

「んー。でもやっぱり男はダメだなあ。身体固いし。女の方が身体が壊れ行くことへの恐怖が強いからもっと逃げ惑うつてのによお。女は身体の美しさを頼りにしてるやつが多いからかねえ。次は女が召喚されますよーにと。ってことでもういいや。じゃね」

天使（仮）の右腕に巨大なハンマーが現出する。どう考えても天使（仮）の細腕じゃ持てないだろうハンマーは軽々と持ち上げられこちらに振り下ろされる。必殺だ。あんなもの耐えられるわけがない。

ここで終わるのか？

成す気はあったのに何も成してないぞ？

イヤダ

「あああああああああ！ー！やめろおおおおおおお！ー！ー！」

しかし私は所詮凡人。

できたのはせめて黙って殺されないということのみ。

私は召喚された勇者じゃないのだ。

こんなときにご都合主義に新たな力が芽生えたりしない。

世界によって優遇されるなんてことはない。

そして私の人生、凡人が努力して凡人なりの夢を叶えるための道は、途中で悪魔のような天使に終わらされた。

1話 召喚！ ……いや、拉致の間違いじゃ？（後書き）

幾人かお気に入り登録をしてくれたようでうれしい限りです。

2話 おはようございます、ご主人様。 & 恩寵技能について（前書き）

7500文字ほど。私にしては長めです。説明回

2話 おはようございます、ご主人様。 & 恩寵技能について

ハンマーが落ちてきて殺された私、田中黒乃。

暗いようで白い、何色なのかわからない世界。見えているのか見えていないのかもわからない。

ここは夢の世界？　これが天国なのだろうか？
次は本物の、優しい天使に会えるといいなあ。

「ご主人、様？　起き、て」

だれだろうか、心地よい眠りを妨げるのは。
さつきから身体を揺する陶器の感触

ってこれは召喚時に持っていた人形の手の感触……？

「目を開け、て」

私好きなハスキーボイスが響く。
そして目を開ける。

「意識、戻ったです、ね？」

持ってきてきた人形が動いて言葉を喋っているという衝撃の場面を見た。

えっと……どういう状況だこれは？
とりあえず身体は左腕が動かなくて身体中が痣だらけなこと以外に
負傷はない……かな？

「がはっ、ごほっごほっ……」
そしてなぜか私を殺そうとした天使（仮）が倒れながら肺からヒュー
ーヒューって音を立てて苦しんでるのだが。

「ご主人様、叫んだ時、に、動けることに気づいた、です。そして
咄嗟に、守った、です。無事、でよかった、です……」

そういつて舌足らずに話す人形の右手には仕込んだ隠しナイフが禍
々しい赤色に染まっていた。

つか背中から刺したんですか……ナイフでうまく致命傷与えるって
すごいな。予想以上に人形には力があるのか？

人形はまだ人格をもったばかりだからなのかわからないが、感情を
うまく表現できないように表情があまり動かない。いや、陶器の肌
なんだから本来は全く動かないはずか。

しかしこの人形、表情があまり動かないとはいえ、心からの笑みを
湛えているのはわかる。いいのか人形よ、私を救ってくれたとはい
え人間 天使（仮）も肉体は人間 を殺したのだぞ？

「ご主人様、以外、価値ない、です。それ、にまだ、死んでない、
です」

……さいで。まあそこまで思ってくれてるといっなのは嬉しいけども
ん？ 最後に気になることを言ってたような。

「とどめ、さします、ね？」

そういつてちよこちよここと歩いていく身長40cmの人形。

ここで私は考える。殺されそうになったときも結局何もしないで黙って死ぬのは嫌だと、何とか叫びをあげたけど、実際そんなのは何もしてないのと同じだ。私に特別な力が目覚めたりしなかった代わりに運よく人形の人格が形成されて助けてくれたわけだけだ。助けてくれた人形にとどめまで、手を汚させていいのか？

あまりの情けなさに人形の主人としての矜持を取り戻そう　すでに粉々に修復不可能な気がするけど　という気持ちが生えた。

「いいよ、私が、とどめはさす、よ」

と人形を抱きかかえる。こんなこと言いながら、初めての殺人に身体が奥底から震える。さつきは本気で殺そうとかがついていたくせに情けないことだ。

「はあ……はあ、ごぶっ」

「いま、楽にしてやる……」

持っている万年筆をペーパーカッターに持ち替え喉に当てる。

このとき根源についても知ったばかりである私は、天使（仮）が苦しみながら何をしているのかに気づかなかったのだ。震える手に力をいれて喉を掻き切る瞬間にあいつは叫んだ。

「呪い　カース　！！」

気付いた時には遅かった掻き切った天使（仮）は絶命したが、その時に何かを吸収した高揚感・全能感と共に根源に直接ナイフを当てられたような感触が駆け巡る。

「ご主人！？」

先ほどよりはるかに人間らしい表情をした人形が叫ぶのが見え、意識がブラックアウトする。

次はその人間らしさで笑顔が見たいなあ。

「知らない天」

危ないあと一文字を勢いでいいそうになった。

実際にあるのは天井じゃなくて天だよ。それもさつき見たばかりで知らないとは言えない天。

さて

愛すべき人形がその小さい足で膝枕をしてくれていたようで顔の隣に佇んでいる。陶器なので痛かったりするんだけど嬉しいものは嬉しいのです。さつきは天使（仮）もいてそれどころじゃなかったけど、人形が動いてくれるというのはある意味理想の一つだったのですから。

身体の調子は変わらず、かな。全身痣だらけで左腕は感触がなくプランとしていて肩口に鈍痛。骨折だろうか？ 医療方面にはまったく明るくないからわかん。ひとまず人形の頭を優しく撫でた後に立ち上がる

が何故か眩暈がした

って目線がかなり下がってるんですけど！ 比較対象がはるかに小さい身長の人形しかないから正確な身長はわかんないが……もしかして165cmくらい？ 高い身長が平凡な私の数少ない特徴だったってのに。

天使に最後にされたのは身長を低くする呪い……？ 命の瀬戸際に振り絞った結果としては微妙すぎるんじゃないかなあ。私にとっては本格的な呪いじゃなくて助かったけどさ。

「げほっ、おえ……」

唐突に天使（仮）の喉を刈った感触と光景がフラッシュバックしてえずいてしまった。

スッとハンカチをだす人形。こういう細かい気遣いができる自立人形を妄想したことがあったけど、実際にやられると気おくれしてしまう。私、坊ちゃんとかじゃないのにな。

無言で差し出す人形はかわいいからいいけども。

精神状態は殺したのがトラウマになってそうだというくらいかな。気づいてないだけで鏡なんかで自分の顔を見たら憔悴しきってたりするのもかもしれないけど。それにしても、とどめだけ刺すってのは予想以上に　もしかした一撃で殺すよりも　きつかったのかも　とどめを刺すってのは完全に『殺す』っていう概念のみの行動だし。意地を張って最後は自分がやるだなんて言わなきゃよかったかな。

ちなみに元の世界への郷愁の念は全く消えていないが悲壮な気持ち

はだいぶましになっている。天使（仮）を殺したことで発散したんだろうか？ だとしたら嫌な解決の仕方だな。ただ戻れないのにつまでもいじいじしていられない。

夢もこつちで叶えればいいじゃないか、と前向きに考えることにする。そうじゃないと心を維持できそうにないよ。

魂、この世界でいうと根源か。さっきの天使（仮）の死に際にされたことの違和感がまだ残っているのと、高揚感を感じたときに何かを吸収したからか、自分の存在が漠然とだが増えたように感じる。

ん？ 自分の根源が見えるようになってる。根源はイメージでは球体。大部分は空気で、一部に四角いボックスとパズルのように少し複雑な立体図形がある感じ。

どうやら四角いボックスは私の身体のあらゆる情報がつまっているみたいだ。肉体の筋力やら素早さみたいなのが頭に浮かんでくる。

MMORPGに詳しくればSTRやINTなんかで表せるんだろうけどその手のゲームは時間かかりすぎるために敬遠してた俺には無理だ。

立体図形は、どうやら個々が恩寵技能 グレイススキル のようだ。恩寵技能については天使が語っていた中の一つにあった、この世界固有の物であり仕組みはブラックボックスとなっている。

なぜかって？ それはこの世界を妄想したやつがそうしたからだ。魔粒子の方や魔術の設定を頑張つて凝つたら疲れちゃって恩寵技能の方は細かく考えられなかったのだろうと私は予想している。

設定上は『神から恩寵として全種族に与えられた神の力による技能』

らしい。実際には、神の力によるという言葉通りに意味不明な恩寵技能と、魔粒子によってこの世界の科学的法則に則って発動する恩寵技能の二種類があるって言うていた、はず。天使（仮）の説明はわかりにくかったしそれどころではなかったので記憶に穴があいてるかもしれない。

後者の恩寵技能は魔術で再現できる。なぜなら魔粒子を使っているという点で共通しているからだ。

まあ魔術で再現するにはやたら時間と労力がかかるし、効果もスキルによるものと同じや雲泥の差だそうなので再現しようとする人は少ないらしいので気にしなくていい。魔術の細かい仕組みは教えてもらえなかったが、いろいろな現象を起こせるがスキルの出力には歯が立たない器用貧乏というところという認識に私の中では落ちついたのだった。

ちなみにパッシヴ（自動発動）とアクティヴ（任意発動）での分類もできるがここでは割愛。

スキルを持つのとそうでないのでは大きく差が出るのは魔粒子を介さない現象についても同様。

【料理】というスキルをもつてなくても料理できるが、あると腕前にかなり補正がかかる。また、料理を上達していくと【料理】スキルを得ることがある。

ここで一つ気になったことが。根源総量がほぼ固定で持てるスキルの体積が決まっているということとはだ、この世界の人間は生まれたときから何を熟達するのか、どんなスキルをとるのかの取捨選択を迫られるわけだ。家事系統のスキルを大量に持つと、あとになって戦闘系のスキルを得ようとしても不可能なのだから。

上位世界でも人生の時間の関係上、いくつもの分野を極めるのは難

しかつたが、下位世界には能力がスキルとして保存されるために条件がより厳しいと思う。

他に恩寵技能について語るべきなのは、ランクがあるということかな。低いほうから低階、中階、高階、天階という順番になっている。天階は普通の人間じゃたどり着けないし総量を遥かに超えるので考えなくていい。

さて、私の中にある恩寵技能を確認しようか。

すごく大きいのが二つと、すごく小さいのが4つほどある。ちなみに大きいのはお互いうまくはまっている。おそらく技能同士の相性がいいのだろう。

まず大きいうちの二つ目が【グレイスエンゲレイヴァー恩寵刻印】。

クラスは天階。少し上で天階のことは考えなくていいって言うておきながら歯の根も乾かぬくらい早くできちゃったけど、自分、不本意ながらこのアンダーワールドでは普通の人間じゃないですし。

この世界は上位世界の創作物が具現化したような世界、もちろん上位世界の人間である自分は創作物よりはるかに根源が大きいわけだ……正直この世界にあるの根源の総和と比べても遥かに多いのです。つまり天階クラスを二つ持ちながらも全くもって容量を圧迫しておりません。だから恩寵技能同士がうまくはまって容量を少しでもあけるとするのは私に限っては全くの無意味となってしまうのです。

更に補足。なぜ私が天階クラスの恩寵技能を持っているのかということだが、この世界では殺した相手の根源の一部を吸収するこの世

界のシステムにより天使（仮）から奪い取ったのだろう。基本的には根源の空き部分とともに、殺された者の身体能力や技術のステータスの一部を吸収することになり、根源容量については他人の根源の空き部分は拒否反応により自分の根源に取り込まれないためにほとんど増えないが、ステータスのかけらをつけとるにより殺した者の筋力や技術、生命力などが上昇する。このシステムは弱肉強食を正当化するものと認識したので無意識のうちに忘れそうだった。

いくら相手を殺したり鍛錬で根源を磨いても、根源の総量は微々たる量しか上がらず総量は生まれた時に大方決定されると認識されるために、どんな種族にも物体にも才能の限界が存在する。総量を少しでもあげるほかの方法としては、大きな根源を持つ者の側において影響され且つ長年を経ること、くらい。

また、殺した時に運がよければ相手の恩寵技能を壊さずにそのまま吸収して得ることができる。私の場合は天使（仮）にとどめを刺したときに、天階スキルを二つ、その他のスキルを少し吸収できたようだ。

脱線してしまった。【恩寵刻印】の効果は『根源の空きに恩寵技能を刻むことができる』だ。さすが天階クラス、本来相手を殺した者しか得られないのにこのスキルを使えばたくさん人間に技能を与えることができるというとんでもスキル。うまく使えばバランスブレイカーになりそうな予感かしない。根源は物にも存在するため、武器の根源に攻撃に有利な恩寵を刻むこともできる。

制約としては刻む恩寵を私の根源で複製しなくてはならないので時間的にある程度インターバルがあることと、一度刻印されると消え

ないので刻印されるほうの総量に気を付けなければならぬことくらいかな。特に武器や道具に刻むときは良い素材でできた業物じゃないと総量をすぐ超えてはじけ飛ぶかもしれないから気を付けなければ。

そして二つ目の大きい立体、つまりは天階恩寵技能、【根源管理】ルトラスター。

効果は『根源の情報を見ることと、根源から任意の場所を吸収することができる』、で、根源関連の最上位スキルのような。起きてから自分の根源が急に見えるようになったのは、この世界になれたからじゃなくて天使（仮）からこの技能を奪い取ったからだっただのか。後半の効果はかなり強いが、相手を生かしたまま吸収するには制限がある。『相手を生かしたまま吸収する場合、ステータスの欠片や恩寵技能が根源に完全に一体化する24時間以内の状態でしか吸収できない』、だ。たとえば人形が人や魔獣を殺した時にステータスの欠片や恩寵技能を奪ったとする。その直後から24時間以内は奪ったスキル達は人形の根源にすぐには融合しない。球体の根源に立体図形の恩寵技能と欠片であるステータスがくっついて少しずつ沈んでいくイメージ。なのでその馴染み切っていない状態なら相手を生かしたまま、つまりは根源量を減らさずに 総量が減ると人格がなくなるので 有用な恩寵技能を任意で吸収できる。

ちなみに相手が死んでもいい時なら直接殺すのが一番早いのだ。その時も好きなスキルを回収できるのはこの恩寵技能の大きなメリットといえよう。

根源の情報を見れるということて吸収した中であつた天使（仮）の記憶と知識の欠片を見てみたのだけど、有用な情報は読み取れなかった。欠片は欠片か……。愉快的なオブジェの作り方なんて知りたく

もないわ！ と天使（仮）に叩き返したい。

以上の二つが天階クラスの恩寵。仮にも天使だけあつてすごいスキルを持つていたんだな。もしかしたら他に『天地創造』みたいなのも持つてたかもしれない、スキルはブラックボックスということだったから物理法則越えることもあるのだろうから。

ちなみに天使（仮）にかけられた呪いはプロテクトがかかっているのか靄状のものに覆われていて見ることができない。

立体の輪郭から3つあるというのわかるのだが……

呪いは人の命や大きな意思によって相手の根源に有害なスキルを刻むものなのかな。3つも呪いをかけられたのは天使が根源に精通していたからかもしれないが、ほかの人間でも死の間際には気を付ける必要があるそうだ。

いまだに私の命があるのは、呪いの強さが足りなかったのか、かけられる呪いは限られているのか、それとも生きて苦しめようとしたのか、呪いについてはわかってないことが多すぎる。が、とりあえず保留にしよう。

さて、その他の恩寵技能は、【人形師】【共通語熟達】【極東語精通】【速読】の4つだ。前二つが中階で後ろ二つが低階クラス。【人形師】【速読】がアクティブスキルで、残りがパッシブスキル。スキルの内容からこの4つは上位世界から落ちてきた時に得意だったものがこの世界向けにカスタマイズされたもの、というのが推測できる。

【人形師】は人形を繰ったり上手く改造できる恩寵技能。上位スキルにならないと一からうまく作るのは無理。作れないわけじゃない、作ったときの出来栄がスキルあるなしで変わるだけだ。

【共通語熟達】。これはこの世界の共通語に熟達しているという意味でいいんだろう。つまりはこの世界の共通語は日本語……？たしかに天使（仮）も日本語喋ってたしなあ。日本語が共通で、国や大陸や人名は英語圏に近いもの、か。これってまさに日本人が考えたファンタジー世界ですな。都合がいいので文句はありませんが。

【極東語精通】。こっちのほう日本語っぽい名前なのに上のスキルよりランクが低いということは、英語に精通しているということか？ 自分の学んだ外国語は英語と中国語のみで、第二外国語である中国語はほとんど喋れないし、留学のために英語をかなり勉強したことから考えて極東語は英語、というのしか考えられないか。なんか普通と逆になった感じだなあ。

【速読】。これは上位世界でも便利な技能だった。自分なりにかなり極めたつもりだったのだが低階クラスということは、何回も使っていればもっと上位スキルになって更に速くなるんだろうか。

以上6つ。この数が多いのか少ないのかはわからない、ひとまず人のいるところに行つて一般的にどの程度の根源をもっているのか調査しなくてはならないだろう。私の量は桁が違つし、人形もかなりのものと見受けられる。上位での創作文がこの世界なのだから人形もこの世界の量を超えているだろう。

「主人、様？ ご主人、様」
長考していたので気づかなかつたが人形が私を呼んでいたようだ。

「どうしたんだ？」
長い間スルーしていたのはさすがにまずかつたかな、と反省しながら尋ねる。

「北側、の森から、見ている、います。」
北側の森からこちらを見ている何かがいるらしい。

そういえばこの世界では魔獣や亜人と呼ばれる人族に対して敵対する生物がいたのだった。
普通の野生生物であっても熊とか狼であつたらシャレにならない、
すぐにこの場から離脱することにしよう。

といつてもこの平原がシークリッド大陸にあるってこと以外何もわからないのだけどね……
もっと天使（仮）をおだてて地理も聞き出しとくべきだったか

後悔は遅すぎるほど後にやってくるのだ

3話 エウルーパー王国へ

エウルーパー王国。

ユーラシア大陸をそのまま縮小したような形のシークリッド大陸の西端 地球でいうとヨーロッパ辺り を支配する王政国家で、建国は400年前ほどだが二つの王朝が王座を交代で担任しているために、東部と西部で対立をしている。東部はハーヴェイ王朝の影響が強く、西部はアークライト王朝の支配下にある。

現在の王はハーヴェイ王朝のオリヴァー・ハーヴェイであり珍しいものに目がなく、特殊なスキルや魔術を使える人間を集めたり、魔獣の解剖なんかにも精を出している変人王として名を馳せている。治世や権力争いにはほとんど興味ないそうだ。

産業としては土地は肥沃とは口が裂けても言えない状態なので農業もやっているが他国からの輸入にある程度頼っている。漁業は海に接しているところが多いので主要産業となっている。芸術品や工芸品がさかんで武器でも道具でもユニークなものをそこかしこで見ることができる。

また、侵略で土地を東に何倍にも広げていった歴史から軍事力が増大で、周辺国 北も西も南も海なので東側だけだが との交渉はその軍事力での圧力をかける外交がおおい。

気候としては東の海沿岸にある暖流のおかげで冬もそこまで寒くない ところへんは緯度のわりには寒くないヨーロッパと同様みただいだ。

宗教はこの国だけが信仰している唯一神を崇めている。しかしそれ

ほど熱心な人はおらず、ほとんどの宗教的儀式は形骸化している。

世界の中心である。シークリッド大陸の最西端であることからそれを認めず『極西』と揶揄する国は多いが、最近新たに西の海に先の新大陸が発見されたために、国内ではこのエウルペ王国が世界の中心であるという風潮がさらに高まった。

らしい。

なぜ「らしい」なんて言ったかというところ、今現在私はエウルペ王国の東端の街ウクライン 東には隣国ラーシアン帝国南には小さな海 の酒場で恩人達に多少エウルペ王国びいきな説明を聞いていたからです。

「主人、主人、様。」

「なにっ!？」

人形が何かを話してくるが今は森の中を並走して追ってくる『何か』の気配から全力で逃げているのでかまっていられない

「すでに、包囲され、ました」

もう走る意味がなかったようだ、人形の言葉で周りの状況に気づく。

『ぐるる……』

こちらが観念したのを感じ取ったのか森から現れる狼のような動物達。距離が離れていると根源を読み取って種族名などの情報を見ることはできないようだ。

「排除、します」

先手必勝ということで人形が狼のような動物の一体に飛びかかる。

が、人形にしてはかなりのスピードで走って攻撃したとはいっても四足歩行の野生動物の瞬発力には敵わないようで簡単に避けられ、他の個体の爪で攻撃される。

人形はなんとかそれを身をひねってかわし続けるが、私があるところとに戦闘中に動かなかったために背後から飛びかかってきた狼に反応できず、その攻撃を私から守るために胴体に爪を受け吹き飛ばされる。胴体が真っ二つなんてことにはなっていないが、軽さのせいで私から離れたところに飛んで行った。

そしてそんな状況にもかかわらず、人形を目で追っただけで動けず
いた私が狼の群れに仕留められるのは時間の問題だったその時、

『シユンツ、シユンツ』

遠くから飛来する音が聞こえ私に今にも飛びかかるうとしていた狼
二頭の頭に刺さり、狼は断末魔をあげて倒れる。刺さったのは矢の
ようだ。

「大丈夫かい、嬢ちゃん達」

状況を把握するのに精いっぱいな私に声をかけるのは、大剣をもっ
て立つ190cmを超えるだろう大柄の男。

その周りにはクロスボウをもった妙齢の女性と短剣を携えた細見の
男性、槍をもった恰幅のいい男。大柄の男が私の周りにいてほかの
三人は包囲していた狼たちを順番にしとめていく。

ものの数十秒で半数を仕留めたときにととう残りの狼たちが逃げ
ようとし、それを三人が追走していった。追撃するようだ。

「なんだってこんなところに一人でいるんでえ？」

残った大柄な男は、私が怖い経験をしたことにより動けないのだと
思ったのか、優しくに気づかうような声色で話しかけてくる。力強
く輝く青色の双眸には心配げな色が混じっていた。

「お嬢ちゃんって……私は男ですよ？あと遅れてしまいました、
田中黒乃と申します。このたびは助けていただきありがとうございます
います」

まずは誤解をとき、そして感謝を。

それにしてもなぜ少女なのだと勘違いしたのだろう？ 女顔と言われることはあったが、その背格好から勘違いされたことは人生で一度もなかったというのに。服も黒いジャケットと長いパンツなのだが。

「おう、気にすんな。しかし男だったのか、背も低いし女の子だと思っちまったよ」

そうだった！ 天使（仮）の呪いで身長が160cmくらいまで縮んでるんだったよ！ ……女性に間違えられるってのは想定範囲外だったのでつい忘れてたけど、25cmも身長が下がったのだった。

男の娘っていうのに自分になるとは思っても見なかったけど、身長だけ高くても顔のせいで男らしさを磨くことが全然できなかったのだし、むしろこの縮んだ身長の状態のほうがバランス的におかしくないのかもしれない……それもまた男としては屈辱的なことだけだ。

「それに、ツアナッククロノって珍しい名前だな」

「苗字が田中です。極東の方から来たので。こちらでは黒乃・田中ですね」

……そういえば人名は英語圏風味だったんだな。ふだん日本語話するのに「タナカ」ってうまく発音できないのはどうなってんだらう？ 上位世界で創造したやつのは『設定』だから仕方ないのだけどさ。

「ほー東の帝国より更に先か？ それは遠いところから来たなあ。

俺の名前はザルモン。お前さんは苗字があるということは貴族かな

にかかい？」

しまった、この文明が中世ヨーロッパなこのアンダーワールドは貴族制度があつて苗字は貴族くらいしかつけないのか。

とっさに言つた極東の文化ということで押し通すしかないかな、さつきの口調だと帝国つてのより東はあまり知られていないみたいだから。

「いやあ、逃げに徹したハイウルフはなかなか追いつけませんね」と、追走していた3人が順々にもどつてきた。女性だけ一頭の狼を手にかけている。大柄な男に話しかけてきたのは槍をもつていた男性で、頬にかかる茶髪に青い瞳をしている。

「槍を置いてサブウエポンの投げナイフを使わないからつしよ」と言つのは短剣を使つていた赤髪茶眼の青年の談。

「私の名前はエメリーナ。そつちの少女の名前を教えてくださいませんか？」

弓矢をもち濃緑の髪と驚色の瞳をした24歳くらいに見える女性が私をその瞳に捉えながら大柄な男ザルモンに声をかける。

「こつちの坊主はクロノ・ツアナクつていう極東の方からはるばるやってきたそうだ。ちなみにこの見た目だが男だぜ」

その言葉に緑の女性達が驚きに目を見開くのを尻目に機械的に会釈を返す。

私の頭の中で思考されていたのは、女子に間違えられたことによる

男の尊厳についてではなく濃緑の髪についてだった。

これがこの世界の普通なのか……？ たしかにどんな設定もありだと思っけど、リアルに緑色の髪を見ると衝撃がでかい。何が衝撃かって緑色が自然に顔の一部として溶け込んでいることだ。文化祭でお遊びで染めたやつは見たことあるけど、脱色してきれいに緑に染めたとしても違和感しかなかったのに。

短剣使いの赤髪茶眼の青年は名をテッド、背が高い茶髪青眼の男性はカルロスというそうだ。

「ご主人、様。無事？ ごめん、なさい」

ハスキーボイスで舌足らずに話しかけてくるのは吹き飛ばされていた人形。身体のパーツは無事だったようだが服が少しきれている。あとで縫い直さないと。

「動いて喋る人形！？ 君は珍しいものを持つてるすね！ その着ている服も珍しいものだし」

人形をみて驚く人族4人組。話しかけてきたのはテッドだ。

アイティファクト

「神遺物……？」とつぶやくのはカルロスさん。なんですか神器って。伝説的な物と勘違いされたらめんどくさいことになりそうで嫌なのですが。人前では人形には動かないでいてもらおう。

「えっと、極東です！ この服も人形も極東の特別なものなんです。そしてこちらには見聞を広めるため旅行に来ていたのですが、お

供の馬車が襲われてしまい迷子になってしまっただけで彷徨っていたので
す。
いきなり召喚されたものとしてはどのように状況をごまかすかは必
ず直面する問題と違っていいだろう。

私はうまい言い訳は思いつかなかったのとつさに極東を主張して
押し通した。納得したというような顔を大柄な男ザルモンがしてい
るのでありえないことでもなかったようだ。ひとまず安心する。
しかし後ろに控える丁寧な物腰のカルロスは読めない表情をしてい
るのでザルモンが単純なのか、それともザルモンたちのような職業
の人間はあまり細かく聞き出そうとしないのか、のどちらかなのか
もしれない。荒事をやる仕事の人達は暴力を使う分暴力の怖さを知
っているから下手に首を突っ込まないってのが基本のような気がす
るし。

そしてこの後、すぐ近くにエウルペ王国東端の街ウクラインがあ
ると知り、一緒につれていってもらって酒場で話をしてもらったの
だった。

ウクラインでは大きなほうだという酒場では、4人組のうちカルロスを除いた 冒険者ギルドに討伐成功の報告をしにいったらしいメンバーで酒盛りをしている。

このうち最も多くこの国のことについて話してくれたのはお調子者の気があるテッド。テッドはまだ18歳らしい。年下なのに自分よりも風格があつて エメリーナによると、私にも威厳ではないが何か大きなものがあるという雰囲気を感じるらしい。おそらく圧倒的な根源量を感じているのだろう 生まれた世界の環境が違い過ぎたとはいえ、天使にも狼にも成すすべなくやられた自分が恥ずかしくなる。

ちなみに人形は動いたら騒がれるので机の上でじっとしてます。上位世界にいた頃人形を改造しまくってたおかげで【人形師】を得たわけですが、そのスキルを発動させて人形の損傷部分を直そうとしたら完全に腕が落ちてました……。【人形師】が発動しません。

すぐさまほかの恩寵技能をチェックしましたが、【共通語熟達】は言葉が通じているために発動している模様、【速読】は発動できず。たまに会話に混じる和製英語みたいな英語 おそらく極東語の一部 も通じているために【極東語精通】は効いていると仮定。そうすると、パッシブスキルである言語関連の中階と低階は発動しているが、アクティブスキルの二つは発動していないことから、アクティブスキルが使えないのが呪いの効果か？ いやしかし、天階のアクティブスキルである【根源管理】と【恩寵刻印】は使えたしなあ。天階スキルは除外なのか？

ひとまずの結論としては、神階以外のアクティブスキルが使えないということにした。

恩寵技能は使うことでしか熟練度があがったりクラスアップしない

から、【人形師】を上位互換スキルの【人形匠】にして質のいい人形を作成するつてのができないってことか……。

部屋にあったほかの人形たちも素晴らしい。最もいいのはダントツで一緒に来た人形だ。ちなみにほかの人形には名前がついている。一緒に落ちてきた人形は生まれた時から共にある唯一無二のものである。識別する必要を感じなかったから名前を付けなかったのだ。ものばかりだったからこの世界でも再現したかったというのに。

というか【人形匠】はそもそも高階クラスだろうからこの計画は初めから頓挫していたのだった。

これで呪いは二つまで判明したわけだ、身長の低下と恩寵技能制限。あと一つはどんなのだろうか。楽しみではないが怖いのでどうせなら早めに判明してほしいものだ。前の二つもそれなりに効果が大きいのである。あと一つは大したことないのかもしれない、そう願う。

酒場の前で別れた。酒代は今回はザルモンさんに奢ってもらった。気おくれしてあまり飲んでないけど。後、こちらでの身分証を手に入れるために冒険者ギルドのウクライン支部に行くことにする。

ザルモンさんたちは明日からまた依頼があつて隣国の方へ赴くらしく、しばしのお別れの挨拶をした。

酔っていたにもかかわらずその背中からは熟練の戦士というべき存在感があつた。

3話 エウルーパー王国へ（後書き）

中途半端なところで区切ってしまった

4話 ギルド & 初の恩寵刻印行使

冒険者ギルドはウクラインの東の門のほうにあった。ウクラインはエウルーペ王国の東端であるので国境付近に広がる平原や森側に依頼の元となる案件が多いので出やすくするためらしい。

冒険者ギルドの建物は横幅200mに高さ20mという大きな出で立ちだった。横に長い洋館というイメージできるだろうか。その黒と赤色の外壁は魔物の住む館といったような風貌でギルドの建物にしてはあまりにも威儀を正した感じで堅苦しくいかめしい。

「ようこそ、冒険者ギルドへよくいらつしやいました」

正面の門は最初から開いており中に入る。腕に自信がある冒険者が常にいるからなのか、門番はいないようだ。

入って右側には二階にあがる巨大な階段が、その下には依頼が張ったボードが置いてあり、左側に奥には管をまく荒々しい冒険者が10人ほど、依頼の報酬の配分を行っている。正面には依頼を受ける受付があり営業スマイルで笑顔をくれる。その表情からは読み取れない。さすが営業のプロだ。が心の中では私を見て迷い込んだのかなあ、なんて思ってるかもしれない。

実際に左の奥にいた冒険者の中にはこちらに物珍しげだったり好色な視線をぶつけてくるやつがいる。もともと背が高かったことから電車などでも目立つために視線にはなれていたはずだが、正直好色な視線は気持ち悪い。美人な女性はいつもこんな視線を浴びていたのか……男の性といえども自重しようぜ男たちよ。

露出狂の気があったり視姦されるのが好きってのは都市伝説なんじ

やないだろうか。慣れる気がしないぞこの視線。

「本日はどのようなご用件でいらっしやいますか」

いけないいけない。思考がそれていくのは悪い癖だ。とくに緊急性が必要な場面や戦闘中においては完全な短所になってしまう。

「私、極東から初めてこちらに来まして、冒険者ギルドに登録してみようと思ったのです。」

受付の女性は何か聞いたそうな色を瞳に一瞬湛えたが、すぐに営業スマイルに戻る。この女性、笑顔のときにえくぼがでるのがすごいかわいい。長いストレートの髪が青色で瞳も青い。この異世界の神秘を感じずにはられない。

「ではギルドの成り立ちから簡単に説明していきたいと思います。

まずギルドが発祥したのは独立都市群の中心都市であるグリーンシアシティーです。設立の歴史は――
まずはギルドの発祥が王国じゃないのに驚く。自尊心の高いこの国がほかのところが発祥したギルドを受け入れているとは。

受付嬢に説明されたことによると、独立都市群というのは王国の東南にある内海　グルーミ海と呼ばれ、まんま黒海の場所。座礁や亡霊船が多い魔の海として有名　を挟んだ東側にあり、北をラーシアン帝国、南をアイスル教国、東を壮大に広がる大砂漠に囲まれている緩衝地帯だそうだ。

ラーシアン帝国は現代のロシアの3分の1とカザフスタンの位置を

領とし、アイスル教国はトルコからサウジアラビア、イランに該当する位置を治める大国である。両方とも地球よりはかなりスケールダウンしているが。

よってその間にある独立都市軍はグルジア、アルメニア、トルクメニスタン、アフガニスタンなどの位置となる。このアンダーワールドにはカスピ海に該当する内海は存在しない。

で、ギルドとは直接王国とは接していないものの常に周りの国に威圧されていたグルージアシティーが生き残りのために2000年ほど前に設立した組織らしい。周りの国の中で軍を動かすににくい問題

政府と癒着している犯罪組織の摘発や、国境付近の魔獣の討伐など を解決する代わりにさまざまな場所に支部を置き、少しずつ功績の積み重ねとイメーজ戦略で腕に自信があるが群れるのが嫌いなものや、大国の政府というものが信じられない正義漢、ただただ自由に戦いたいものなど優秀な人材をそろえて、国を跨った問題処理人として活動させる傍ら様々な内部事情を集めて独立都市郡の生き残りのために国のバランスを調節することもあるようだ。もちろんこれらは受付嬢が直接語ったものではなく、言葉の端はしと伝えられる情報から推測した結果。当たっていると思う。

ギルドのシステムとしては大きなものは国家間の問題、身近なものでは近所のお手伝いまで様々な以来が、国家や団体または個人から入ってきて、依頼料を決定しボードに張り出されたのを誰かが受注するか、ギルドから腕利きの冒険者クラン 少数だとグループと呼ばれる に直接依頼して、受けた冒険者は楚々の依頼の解決したらギルドに戻ってきて証拠品を渡し報酬を受け取り依頼が完了する。

依頼には魔獣の間引きなど常に受注している状態にできるものも存在する。魔獣や亜人が大繁殖したときには別の依頼として出るが。

また、ギルドは信頼の商売であるので、冒険者は実力や功績によってランク分けされる。

一番上がSで下がFランクだ。Sはギルド全体でも滅多におらず英雄級のみで、努力の限界がB、才能あるものの努力の限界がAほど。平均ランクはD＋くらいで、Cだと一人前の冒険者という評価。

他にも克蘭でのランクというものもあり、メンバーの力量を考慮して決められる。克蘭ランクだとAにいくのはそれなりに存在するため、克蘭ランクのみにSSクラスが存在する。

「では、こちらの魔法陣に手をあててください」

奥から紫色の金属板 近くで【根源管理】で情報を見たら『ミスリル』であることがわかった に精緻な模様が描かれている。これが魔法陣というものなのか。

「根源には個々の波長のようなものがあるのでこの魔法陣で個人登録をし、その情報を書き込んだギルドカードを持てば個人の証となります。」

魔術を使う時の魔力もこの根源に依り特定の色に染まり、また根源は髪の色にも影響を与えることができるそうだ。髪の色が濃緑だったエメリーナさんは魔力色が濃緑で、この受付嬢 フィリシアさんはというらしい は髪が青なので魔力色は青ってわけか。魔術を使うときはかなりきれいなんだろうなあ。

魔力色は変えられないので犯罪のときに魔術使うと魔力色を見られてバレそう、隠密性にかけるようだしやっぱり魔術って微妙な気がしてきた。

「登録は完了です。この後どうします？ 依頼をうけますか？ この近くでの恒常的な依頼である『薬草とり』と各種魔獣の間引き討伐は

ギルドメンバー全員に受注していただいてますが。こちらはのあたりにでる魔獣の習性や危険性がかかれたカタログです。」

「ひとまずは間引きや薬草とりの依頼だけでいいです。それこのあたりで冒険者おすすめの宿つてあつたら教えていただけませんか」
拠点確保は基本ですよ。依頼は様子見。

「いつか今の段階じゃ魔獣討伐なんてできない気がする。ハイウルフという平原で襲ってきた魔獣は、個体だとD相当で群れになるとBになるらしい。だからEから始まる自分では絶対に遭遇してはいけない相手だ。」

「しばらくはカタログを見て戦える相手を選んでいくことになるだろう。天使（仮）から奪った恩寵も直接戦闘力は皆無なのだから。」

「ここはこの王国支部の中でのも屈指の大きさを誇りますので、二階と三階部分に夜だけです泊まることができます。ただし利用したいという人が多いのでただいま空きを確認してまいりますね。使料をギルドに預けたままの報酬から引くこともできます。」

受付嬢フィリシアさん 推定年齢20歳 は受付の奥の職務机が並んでいる部屋に入っていた

。チラッとみるに夕方は依頼を完遂してもどってくる冒険者が多いので処理する仕事が多いらしくあわただしい。

電話を箱状にしたようなものがある。【根源管理】で情報を覗いてみると恩寵技能【電心】が刻まれているレアアイテムのようだ。遠くと会話する恩寵技能には【電心】【通心】【念話】があり、どれも相手を通心系恩寵をもっていないと一方通行に思ったことを伝えるだけとなる。後者にいくにしたがって伝えられる距離と速度がある。そう、速度といたが、地球の通信と違って通心は電波ではなく魔粒子によってラインをつなぐために少し時間がかかるのだ。

それは今はいいとして、ギルドが銀行の真似事してるのには驚いた。現代の銀行と違って使用者が利子を払うので金庫といったほうがいいんだらうか。

「運よく2階に空き部屋がありましたよ。ランクが低い人向けの部屋なので必要最低限しか設備が揃ってませんがよろしいですか？貴重品も個人でしっかり保管してください」

まあ私は男だしそう問題もおこらないだろう。高価な雰囲気を自己主張する人形は自分で逃げることができるわけだし。

部屋をとっておいてもらったので、夜になるまであと2時間ほどのうちに宿代を稼がなくては。食事については酒場でつまんだぶんでは耐えられる。人形にいれてもってきていた宝石を売ることも考えられるが、相場がわからない。そもそも銅貨や銀貨の価値すら知らないのだ。うちだと足元をみられることもあるだろうし、上の世界からもってきた宝石なので価値がありすぎても、どこからもってきたのだという話になって目立ってしまう。

最悪の場合は売り払うだろうけどそれは最終手段だ

ということではまず薬草と雑魚い魔獣を探しに行くことにする。

周辺警戒は私よりは索敵範囲が広い人形に任せよう。

一時間後、Eランク魔獣『はぐれコボルト』に無双する人形と逃げ惑う主の姿が！

……言い訳させてください。

私の武器、万年筆と扇子ですよ？

万年筆も扇子も祖父の遺品でかなり値打ちのものらしいですけど、でも攻撃力あるわけないでしょ

人形はどうしてるか？

右手には仕込みナイフ、左手には私のペーパーナイフで二刀流です。ナイフのみならずペーパーナイフからも『シュンツッ！』って空間を裂くような音がでてますけど……上位世界の物品で根源が大きいから切れ味があがってるってところでしょうか

だったら万年筆と扇子もうまく使えばこの世界ではすごい効果が表れるのかもしれませんが、使用者の私がへたれなのでどうしようもありません。

格闘術の心得も全くなく運動神経もない、そして唯一の長所であった高身長　バスケットかすごい有利だった　がなくなった今、ただの貧弱大学生にできることなどありゃーせんですよ。

はぐれコボルトは群れないコボルトです。群れない代わりに少しだけ能力が高いのですが、知能がある亜人と魔獣の間のようなコボルトやゴブリンは、そのわずかな知能によるチームワークが怖いわけで、個体でいるのは冒険者にとっては力モでしかありません。近くに5体くらいいるのに、群れないことが矜持だともいうのか個人個人でかかってくるという……

「ご主人、様。おわつ、た」

逃げ回っているうちに人形は私が指示したやつを殺し、そのあとに私の周りにいたやつを追い払ってくれたみたいです。

指示した個体が一番有用なスキルをいくつかもっていたので優先して狩らせたのです。そして人形の根源に定着する前に私がもらって、そのあと人形にもあげるといふ手順を踏むことによつて、次からほかの人にもあげられるようになるのです。時間はかかるけど無限チートですよ！　夢が広がります。

「お疲れ。さつそくだけど、恩寵技能もらうね」

そういつて『根源管理』を発動。人形の根源を覗きこみます。人形の根源は白ですね、真っ白です。人形の髪色は白なので魔力色もおそらく白になるでしょう。ちなみに人形の初期保持恩寵は【傳く者　サーヴァント】【紅茶淹れ】【短剣使い】【魔力貯蔵】の三つです。

【傳く者】は『仕えるもののために行動するときには様々な補正がかかる』効果があり、生まれたときから常に近くにいたのと、メイド服に似たドレスを着せていたことから得られたのでしよう。中階
【紅茶淹れ】は紅茶が入れるのがうまくなるといふまんまのスキル。小さいティーセットを人形の中に仕込んでいたから得られたのか。
低階

【短剣使い】短剣の使用がうまくなります。仕込みナイフのおかげでしよう。低階

【魔力貯蔵】魔力を貯蔵するのがうまくなります。持ってきた宝石がこの世界では魔力を貯蔵する際に使われる 【根源管理】で確認しました 宝石で、それを身体の中にいれてたから得られたのだと思われませぬ。低階。

人形も根源量は圧倒的なので容量はまだまだ余裕です。

さて、はぐれコボルトを倒して手に入れたスキルは…… 【ひとり狼】

【犬嗅覚】。両方とも低階クラスでした。

【ひとり狼】は一人で戦うと攻撃力と素早さに補正がかかるスキル。人形には有用でしょう。

【犬嗅覚】は嗅覚がかなりあがるという効果。ところで人形には嗅覚あるのか……？ あるそうです。どんな仕組みになっているのか、下位世界は神秘の塊ですな

その二つの恩寵技能が人形の根源の表面に沈んだり浮いて来たりふわふわとしている状態なのを確認、手を伸ばし人形の胸あたりに触れて 直接触らないとイメージしにくい 浮いてきた立体をクレーンでひっかけるようにゆっくりと、このときに他の根源に傷をつけないように丁寧に取り出し自分の根源で迎えます。

自分の根源にゆるやかにぶつかり、少しずつ沈んでいく恩寵技能、私の根源の表面に波が立ち身体のどこから痛みが発し耐えきれず肺から空気がもれました。

しかし天使を殺して吸収したときと同じような高揚感を感じて同時に、確かに恩寵を私の根源が呑み込むのを知覚し一息つけました。

「ご主人、もう帰らない、と、暗くな、る」

人形の言うとおりここから街まで30分ほどなのであと45分くらいで暗くなるとしてもそろそろ街に帰ったほうがよさそうです

【恩寵刻印】で人形に刻むのは帰って宿に入ってからにします。

宿代ははぐれコボルト一体の報酬と、私が集めておいた種々の薬草たちで大丈夫でしょう。

カタログでだいたいの群生地に行けば、あとは根源を覗いて初心者が見つけられないような貴重な薬草も見つけ放題というわけです。

そうして冒険者ギルドに帰ってくることができました。報酬は銀貨2枚。

内訳ははぐれコボルト討伐で銅貨60枚、種々の薬草銅貨140枚です。

受付嬢フィリシアさんも薬草の数には驚いてました。表情を崩すのに成功して内心したり顔をしてしまいました。

銅貨100枚で銀貨一枚、銀貨100枚で金貨1枚、間にそれぞれ半銀貨と半金貨があります。
気になる物価ですが、宿代が食事なしで銅貨30枚、食事が一食銅貨10枚です。

文化が違うから宿代が安いってのはありますけど銅貨一枚で100円と考えることにしました。食事が高めなのは王国が食物の一部を輸入に頼っているからというのがありそうです。

体感的に夜7時。明かりも無料ではないので、早めに寝るために、
【恩寵刻印】をやってみようことにします。

ベッドの上で転がっていた 人形とはいえ小さい女の子がパタパタやってるのには和む 人形を呼び、胸に手を当てて、【恩寵刻印】を発動。

自分の根源の中にある【ひとり狼】に意識を集中。根源の表面に出し、回転させながら形状と性質を模倣、感触が鮮明なうちに人形の中の根源の空いているところに、【ひとり狼】の形をなぞるイメージ。そしてそれが人形の根源に少しの波を立てながらぶちやぶちやと浮き沈みしているのを確認。いつのまにか身体中から汗が噴き出ていますが成功したようです。これで24時間後には人形の根源にしっかりと固定されるでしょう。

そして同様に【犬嗅覚】【速読】を順番に、根源を割れ物のように労わりながら刻んでいきます。

全ての作業が終わったときには私はベッドの上に倒れこんでいました。

熟練度が低いためにまだまだ負担が大きすぎます。根源は肉体にも精神にもつながっているために両方に影響を与えられるのがわずらわしいと思っています。

最後に今日一番の功労者だった人形に微笑み　なぜか人形はこちらを見るとすぐに違う方を向いてしまった。残念　襲い来る睡魔に身を委ねた

5話 魔術との出会い

『ユサユサ』

「じんさ、ま。」

ん……まだ日が昇つてもいないきがするんだけど、人形は私を起こそうとしているようだ

「おはよう」

ひとまず起きてみる。予想通りまだ時間は2時といったところだ。外はまだまだ暗い。

「どう、ぞ」

人形が昨日ギルドに納品しなかった薬草で薬茶を入れてくれる。日は私のジャケットに入っていたジツポライターを使ったようだ。

「ご主人、様、6時間、睡眠」

なぜ起こしたのかと思っていると、不機嫌な色が表情にでたのかもしれない、人形が言い訳をするように私の袖を引っ張りながら上目使いをしてくる。くそ、超かわいい。人形が動かなかったときもそのかわいさに悶える時があつて周りに変な噂　人形異常愛欲者
ドールフィリア　ってなんなんだよ……命名した奴、「ドヤア」って顔してたので殴りかけた　を立てられたが、いまの人形は人格をもつて動いているんだ、変な趣味ではないだろう。

……いや今度はペドフィリアと言われるのか……？　身長40cm
だしなあ人形

で、人形の言葉を解読すると私を起こしたのは、私はいつも6時間睡眠を心掛けていたからだそうだ。たしかにそうしてたけども常に共にあったので根源に記録されていたのだろう、それは寝る時間が11時から2時くらいだったからなのだよ。8時に寝て2時に起きるなんて普通やらないでしょ。

といつても人間でいえばまだ生まれただばかりなので仕方ない。少しずつ教えていくことにしましょう。この健気な人形の行動にはちょっとした注意と頭ナデナデで返す。

それにしても明かりが蝋燭やランタンしかないのは困り者だ。こちらとらただの大学三回生暗くなった8時から5時まで寝るなんて無理早いところ魔術か恩寵技能で解決する術を考えたい。人形には【速読】もあるからいろんな本を読んでほしいのだ、本が手に入るかという問題があるけど。

昨日の夜、一階の依頼のボードに降りて眺めていた時に、戸締りに来たギルド職員がいて話をさせてもらったのだが、その中には明かりの話もあった。

大別して魔術式ランプと恩寵式ランプがあり、魔術式の方が種類がたくさんあり、安いことから高いのまである。

恩寵式の方は【発光】が刻まれている物ですさまじく高い。なぜなら物に技能を刻めるのは【恩寵調金】という高階スキルを持っている者くらい。数少ない彼らは大抵どこかの国や大ギルドに囲い込まれている。だからだ。それに刻まれる物も根源が相応に高くないといけないことから、根源の総量が大きい高級品に刻むことになるので自然と高くなる。あとは偶然発光をもっている天然ものを見つけることだが、これも市場に出回るときにはかなりの額になって

いる。ただも庶民には手が出る代物ではないということだ。

魔術式の方は、貯めた魔力　いまだに魔粒子と魔力の使い分け方がわからない　を魔法陣に通すことよって小さな『火球』や『発火』をして炎をろうそくのようにだすものが多い。魔法陣を描きこむ素材や魔法陣の細かさによつて効果も費用も変わる。魔法陣が粗悪品だと大量の魔力を注いだのに数分しか持たなかった、なんてことになりかねない。

また、この方法だと魔力を練ることにある程度習熟しなければならぬいそうで、私と人形にはまだできない。

魔術自体は多かれ少なかれ誰もが使えるもので、子供の時から小さい魔術　『発火』や『凝水』など　は教えられる。じゃあそれで明かりをつければいいと思うかもしれないが、魔力を常に注ぎ続けなければならぬので普通の人には耐えられない。明かりの場合、魔法陣は持続化と魔力貯蔵に多くを割り当てることでなんとか一晩ほど持たすのだ。

ひとまずの目標は私と人形が魔力を練ることができるようになりつづ、魔術式ランプを手に入れられる金額を稼ぐこと。

薬草の群生地は見つけたが、とりすぎると生えなくなってしまふのでそこまであてにできない。となると私と人形が強くなって魔獣を狩らなければいけないわけだ。

幸いファンタジー世界にありがちに、宿代など生活用品は安いので無理しなくても食いつばくれることはない　偉そうにいつてるけど一般人である私はEクラスであるはぐれコボルトも単独で狩れないので、人形がいなければ雑用仕事をして小銭を稼ぐ生活になつていた　だろう。

本当にできた従者だ。

睡眠を必要とせず、人形であるがゆえに私よりは夜目が聞くので、私が寝ている間はギルド内や街の闇に紛れて情報収集をしてくれている。

私はまだこの国を信用していない。だから存在するであろう闇を詳しく調べる必要がある、夜に人形を派遣して情報集めを頼んだのだ。余談だが、見つかりにくくし見つかっても無視されるようにと目を出す穴をあけた布をかぶった姿は幽霊にしか見えん……そのうち、ウクラインに亡霊現る！ って噂にでもなるんじゃないだろうか、この娯楽の少ないご時勢。

ということ朝5時になり空が明るくなってきてからギルドを出てカATALOG片手に狩りにいくことにする。私は一度読んだだけで情報を覚えられるほど出来がよくないので、片手がふさがってもカATALOGは必須だ。

東門から出て昨日とは違い南方へ行く。またはぐれコボルトと出くわす可能性は低いと考えて、次は同じEランクの魔獣『アプモンキー』、『マンドラゴラ』を狩りに行くことにした。

二つとも森の浅いところに生息していて、『アプモンキー』は果物を好むが好戦的なでかい猿、『マンドラゴラ』は耳をつんざくような叫び声をあげる歩く植物だ。

アプモンキーは脅威でもないが繁殖がはやく、増えすぎると近くの街に食糧を奪いにくることがあり、マンドラゴラはの叫び声で冒険者の戦いを邪魔したり他の魔獣を刺激することから迷惑な魔獣として間引き対象となっている。

「【犬嗅覚】発、動。」

森の入り口から入って数分、生い茂る樹木で空が見えにくくなってきたところで、人形が呟くとともに嗅覚による索敵を開始する。

【犬嗅覚】ははぐれコボルトがもっていたときは間違いないがパッシブスキルだったのだが、人形や私が見つくとアクティブスキルに変質していた。推測だが、犬の嗅覚を再現できるほどのスペックがないから、常時発動ができないんじゃないかと思われる。

常に発動していると街角の汚臭にダメージをくらいそうだから別にいいけれども。人も動物もある程度の体臭はどうしようもない、風呂という文化がないこのアンダーワールドでは特にだ。なのにいちいち反応していても仕方ないだろう。

『さくつ』

「キイイイイイイ！」

いつのまにか発見して忍び寄り倒していたみたいだ。

人形のスキルによる短剣さばきは鮮やかというほかない。それに天使の時もそうだが後ろからこっそりと忍び寄って刺すのに適性があるように思われる。いつか【暗殺】を得るんじゃないだろうか。

「ご主人、様」

人形が無表情にだが達成感による笑みを隠しきれずにトコトコと近づいてくる。やっつてること、もといやらせてることは物騒だが、犬や猫が手に入れた獲物を主人に自慢しにくるみたいで愛らしい。ついつい抱きしめて頭を撫でてしまう。

さて、人形がアップモンキーから奪ったスキルを回収しよう。今回はスキルは一つ、【目利き 果実】だけだが。敏捷性に関する欠片を吸収したようだ。欠片のほうは私が受け取ってもコピーして返せないから人形が持ったままにしておく。

【目利き 果実】は果実に関してみただけでおいしいかどうかかわかるといふもの。【目利き】系恩寵は上位に【鑑定】系があるらしい。私には物質の性質を読み取るには上位もいいとこの【根源管理】があるので必要なく、人形は食物をとる必要がないのでこれまた使う機会がないだろう。

恩寵技能は使えば使うだけ熟練度があがっていくのでそのために【根源管理】で吸収して【恩寵刻印】で刻むという作業をやる。やはり肉体的にも精神的にも少し疲れてしまう。

「次、行って、きます」

しかし私には優秀で気遣いもできる半身がいるので問題ない。頼り切ってしまうのを申し訳なく思うが、異物である私たちがこれからこの世界で生きていく時に、いまやっている地道な恩寵集めと熟練度稼ぎの成果がでてくるはず。そう、私が直接動かのは決して二ト的な思考ではない……はずだ、決して年下の子に稼いで貢いでもらってる悪徳な存在ではない……はずだ。

呪いのせいで【人形師】を発動できずろくなメンテナンスも行えない自分、早く人形に恩返しできるように自分にできることをやろう。

その後、3時間ほどかけて 強い魔獣がいると困るので索敵しつつハイドしてゆっくり進んだ アプモンキー2体とマンドラゴラ4体を狩った。上位世界からの持ち込みである人形の仕込みナイフは刃こぼれはしていないものの血糊がべったりついてるのでそろそろ整備しなければならぬだろう。

マンドラゴラはその大きな悲鳴で魔獣を集めたりこちらの攻撃を止めるのだが、人形ボディな人形は聴覚をオフにできる むしろ普

段がわざわざ聴覚をつないでいる　　ので叫ばれたときも硬直せず
に仕掛けられたので余裕だった。

森の中でぐったりするわけにはいかないのです、今回人形が集めた恩
寵は街に戻ってから吸収しようと思い、森から抜けて街に入る。

南の森は近いほうなのだが、街の東門から片道1時間半ほどかかる
のが想像以上につらい。現代人のもやしっこである私はピクニック
などほとんどしたことがなく、歩くだけでも息が上がり小さい人形
から心配した顔を向けられる始末。正直人形の前で無様な態度を晒
したくないという、いささか手遅れな感があるプライドを発揮して
なければ途中で倒れていたかもしれない。

冒険者ギルドのほうまで戻ってきてみればすでに12時前になつて
いる。

私は燃費がいいほうなのだが、昨晚の夜は少しのつまみで今朝は何
もたべていないので腹も減ってしまう。

まずはギルドで討伐証明を行い報酬をもらおう。

一頭あたり、アプモンキーが銅貨50枚、マンドラゴラが銅貨40
枚なので銀貨2枚銅貨60枚をうけとる。これで手持ちは銀貨4枚
銅貨25枚　　ろうそくが銅貨5枚だった　　。

これだけあれば食事だけなら相当良いものが食べられる。

私は美食家ではないし人形はたべないため、ウクラインの街の東か
ら中央に延びる大通りに出ていた適当な露店でホットドックのよう
なものを買って食べる　　「お嬢ちゃんお腹減ってるみたいだ
から二本買ってくれたら安くするよ!」っていわれて二つ買ってし
まった　　。

上位世界で男は女性に甘く、女性は色々と得できてうらやましいな
あ、と思っていたが実際に自分が女性に間違えられてサービスされ

るとその役得はすさまじいと感じる。
なのでこちらが得するなら女性だと勘違いされるといふ屈辱には目を瞑ることに決めた。

人形を抱いて大通りを歩くこと数分、遠くのほうに中央の施設、地方行政機関が見える。

人々があわただしく、さすが王国の東で最も人通りが多い 主に冒険者だが 街の中央部だなあ、と眺めていたのだがどうにも様子がおかしい。

人々が大通りの真ん中をあけていくのだが、表情には焦りと恐怖が混じっているのだ。

『君子危うきに近寄らず』と『虎穴に入らば虎子を得ず』のどちらを選択するか数瞬迷い、日本人らしく妥協した折衷案 端によりつつ騒ぎの元を見に行く を選択。

少し早足となって近づいていくと、茶色の仕立てのいいローブ着て杖をもったいかにも魔術師ですという格好をした25歳ほどの赤髪青年が取り巻きと共に冒険者組みと言い争いになっているようだった。

「こっちの女性はもう謝ったじゃないすか！ あんた大人げないすよ！」

……あれはたしか冒険者四人組みの短剣使いテッドさんじゃないか。どうやらぼろ 民族衣装のようなエスニックな柄がなんとか判別できる を纏った女性が魔術師の不興を買い、テッドはそれをか

ばっているらしい。近くには冒険者ギルドで見かけたことのある若いギルドメンバーがいるが、魔術師とのテッドの争いには口を出さずに推移を見守っている。

少し補足。

このエウルーパー王国はシークリッド大陸の西、地球でいえばヨーロッパ地域を全域支配していると豪語しているが、実際にはまったくそんなことはなく、東端のウクラインから西端のバスターウまでの途中で王都を通る大街道を中心に、凸レンズを横に倒したような形にしか実効支配しておらず、特に北のほうは原住民が大量に住んでいる。

そもそもたかだか人口1000万人ほどではエウルーパー王国30万平方キロメートルの全範囲に手をとどかすことなどできがしないのだ。結果、行商や軍事、資源的に有利な拠点のみ押さえていて、目が届かないところにはたまたま税を取り立てにくるだけで盗賊の根城になっているというのも珍しくはない。

だが王国は傲慢でいまだに収められもしないのに侵略と原住民の迫害を続けている。これは王国が軍事力をもち続ける意義を国民に示す意味が大きい。実際にこれは功を奏し、国民は連日届くどころかもしれない辺境の侵略報告に自分たちの国の強さを称え誇る。

正直因縁のつけかたはたいしたことではないのだろう　口論は取り巻きに任せて魔術師は薄ら笑いを浮かべていた　し興味は失い、見た感じこの世界の特権階級である魔術師と平民の間にどれほどの差があるのかを観察することにした。

どうやら魔術師というのは相当な特権階級のようだ。

周りの野次馬も目をあわせないようにし、腕に自信がありそうな冒険者ですら手を出そうとはしていない。テッドの周りの冒険者を見るに、テッドが争いに介入したことに對して「余計なことをしてくれた」と苦々しい表情を浮かべている。

状況が動いたのはうつむいていたぼろを着た女性が急に立ち上がり魔術師のほうに飛び掛った時だった。会話の様子から、魔術師たちが女性の故郷についてこき下ろしたことで怒りの沸点を超えたのだろう。

取り巻きは小物らしく余裕をなくし避けてしまう

が、魔術師は薄ら笑いが罨に飛び込んできたという獰猛な笑みに変わり、周りの冒険者、とくにテッドが女性をとめようとした瞬間、赤い光が出たと同時に一瞬で女性の足が根元から切り裂かれる。起こった変化は赤い発光だけで音もせず、だ。

「ま、じゅつ……?」

人形が珍しく私へ話しかける以外で言葉を口にする。

そうだ、あれは魔術だ。一瞬見えた赤い光がああ赤髪の魔術師の魔力光なのだろう。

そう頭の中ではわかっていても、予想していた魔術と違いすぎて現実を認められない。

無理もないだろう。私の中でのこの世界の魔術は、恩寵技能に劣る性能しか出せない器用貧乏、出力不足の劣悪品、そういう印象だったのだ。

魔力光が必ずでることから証拠がやすく隠密性も薄いとすら思っていた。

しかし実際はどうだ。

女性が近づくと音もなく赤い光を湛えた刃が現れてきりさいた。いくら魔力光を視認できるといっても、こちらに当たる直前で見えても避けるすべなどない。

力自慢の冒険者たちが魔術師に近づいていかなかったのも無理はない。魔術師の近くによった途端に防具のないところを不可視無音の刃で狙われたら一たまりもないのだ。

私は今までの魔術への認識を完全に反転させた。

危険だ。隠密性、間合い、発動までの時間……あれは一人がもつべき力じゃない。

迅速にアレの情報を集めなくては

6話 武器屋 & 十日後(前書き)

7300文字也。5000〜8000くらいが一番描きやすいみたいです。

6話 武器屋 & 十日後

北方の民族衣装の名残がみえるぼろをまとった女性が足をなくしてから、2時間後、私と人形は街の西側にある商店街に来ていた。露店が並んでいた東と違って家の一階を店にしている商店が多い。なぜこんなところに来ていたかというところ、あの事件の後テッドと話す機会があり、魔術師が持つ杖には魔術を補佐する恩寵技能が刻まれていると聞いて調査に来たのだった。

あんな業があふれているようじゃおちおちしてられない、まずは魔術について少しでも知らなければ。強迫観念に駆られる。

ちなみに足を切断された女性は貧しさのあまりスリを行おうとしたらしい。王国に故郷から追い出されたという恨みも込みで。しかし魔術師の取り巻きからスツてしまったために目をつけられたとか。そうであっても足切断は過剰防衛だと思っけどね。

テッド達冒険者が切断された足も拾って街にある病院につれていったが、足をもとに戻すには腕利きの良い医者 恩寵を持つか魔術が得意な医者 と莫大な費用が必要だそうなので、おそらくどうにもならないだろう。この先彼女がどうなるかは知りたくない。

問題なのは魔術師の一方的な断罪がまかり通っていることだろう。暴虐に巻き込まれないようにこちららも魔術をなんとか習熟するつもりではあるが、魔術師の特権の強さはこの王国限定なのか、大陸全体でそうなのかも知る必要がありそうだ。

一応実力のある魔術師は大きな力を持ちすぎているということに仕えて管理される。少数だが大国の高待遇を蹴って冒険者ギルド専有の魔術師となる剛の者もいる。ので、証拠を集めて国に訴えれば聞いてはくれるが、国としても魔術師に他国に逃れられたり反抗されるのは処理が大変なので、よほど横暴な事態にならない限りは注意だけで済まされる。

今回ののは両足を切断したといっても犯罪者であるし、王国民でないので全く聞き入れてももらえない。

「ご主人、様。武器屋、ついた」
人形の声で通り過ぎかけていたのに気づく。

ここはこの街一番の品揃えを誇るといふ武器屋。横にも縦にも広い普通の家8つ分くらいある。二階建てで、両フロアともに武器があるというところでもない店だ。その量は王都近郊の武器屋にも匹敵するとはこの武器屋の店員談。

この店員は私たちが根源の大きい武器を探して奥に進むと表れて説明しながらついてきたのだ。

この武器屋には強力な武器がたくさんあり、恩寵技能が刻まれた武器すらあるということ。店員が何人も歩いているし、武装した警備員までいる。

なぜここまでいるかというと、盗まれる心配だけじゃなく壊される心配もしてはならないからだ。上位原型世界の地球や他の下位世界では基本的に、武器や道具が店で壊されることは少ない。壊したらその武器や道具は壊れたら使えないのだし、破壊衝動のためだけに壊れやすいものじゃなく壊れにくい物を破壊しようなんて輩は

相当珍しい。

だが、アンダーワールドでは少し事情が違う。この世界には破壊した物や殺した者の恩寵技能やステータスを吸収するという仕組みがあるのだから。武器を壊してその恩寵技能やステータスを奪ってしまえという輩は枚挙に暇がない。

例えば、【熱波】を持つ武器と【衝撃】を持つ武器があったとして、使うときには片方しか用いれないので恩寵技能も使った武器のほうのだけ 当たり前 だ。そのときの解決策として仲間に片方を持たしてコンビネーションを発揮して攻撃するという考えにいたれば平和的なのだが、片方を壊して恩寵技能を吸収した上でもう片方の武器を用いれば両方の恩寵を一つの武器で一振りの元に再現できるという考え方に至るものが多い 絶対に恩寵技能を獲得できるというわけではないのだが 。

よって、武器を盗まれるでなく破壊されるという事件が相次ぐことになる。

ちなみに、武器を持って何かを破壊したり誰かを殺したときに、根源の吸収は持つてる根源総量が多い方に優先的に引き寄せられて吸収される。武器で壊してその武器に恩寵技能が吸収されるケースというのは、使用者の根源の容量がいっぱいの時くらいだ。

以上の事情があるので、私がいかに恩寵彫金武器のほうにまっすぐ進んだから念のために観察と牽制を兼ねて来たということだろう。

以上を結論するにいたった情報は、集めて統合するのは容易かった。24時間肉体の疲労なしで動け、人が入れないところにも侵入できる人形の諜報力はかなりのものだし、私もただのんびりするだけ

ではなく、子供っぽい容姿を利用して油断を誘い情報を聞き出しているのだ。

さて、二階の奥の方、恩寵彫金武器のあるところにたどり着いた。一階は大きな武器が多かったが、二階は小回りのきく探検やロッドなどが多い。

今いるところの正面にも恩寵が刻まれた武器　やはり恩寵が刻まれる容量があるだけあって使われている素材も一目でいいものだとわかる　は店員に言わないと手が届かないという制限だけが、店員が詰めている部屋の扉付近には、ガラス代わりであるクリスタルのケースで手が直接触れられないようになっていた棚がある。おそらくそちらには本当の高級品が並べられているのだろう。

まずは小手調べと目の前にある長さ40cmほどのロッドを見てみる。

軸は何かしかの木できていて、紫色の金属　魔力伝導が高いミスリルだ　の蛇を模したような装飾が先のほうにあり、柄の一番下には赤い色をした宝石が埋め込まれている。

そして【根源管理】を発動。軸の木は『古樹の木片』、赤い宝石が『火炎のルビー』のようだ。『古樹の木片』が魔粒子を引き寄せ、『火炎のルビー』が火炎の力を与え、ミスリルからほとんど減衰することなく放出する。魔術の仕組みについて詳しくは知らない私には説明を見ても理解はできないけれど。

根源は『火炎のルビー』が最も大きく、恩寵もここにあった。刻まれた恩寵の名は【体外魔力操作　火炎】。中階クラスで、効果は『

火炎属性に限定して体外魔力の扱いがうまくなる』。

私にとっては体外魔力？ なにそれ？ なのですかどうかもわからないが、値段を見るにこの棚ではトップクラスで良いものだったようだ。杖一つに金貨100枚 日本円で1億円で……。持つだけで中階スキルが使えるのだから安いもんなのかね相場的に。

隣には劣化版である【体外魔力行使 火】が刻まれた杖もあるが値段は金貨10枚。だいぶ安くなった気はするけど、それでも今の稼ぎじゃ絶対買えない。

魔術のことを知るには使ってみるのが一番だと思って買ったかったのだけど。

この世界では日常で使う魔術を習得するために多感な子供の時から魔力に触れているために、魔力を使うのに意識なんてしていない。だから感覚を覚えてもらうことができないので恩寵技能によって無理やりつかう感覚を覚えようと思ったのだけど。

買えないし、さすがに売り物を壊すなんてことはできないからなあ。

地道に魔力を使う感覚を覚えるのと金を稼ぐしかないようだ。

先は長い。ひとまずは人形とともに恩寵集めに励むことにしよう。

ちなみにクリスタルの棚に飾られている方には記憶を失ってしまうほど仰天する価値の物がおいてあった。

生活費に比べて装備品高すぎてわらえない

それから十日が過ぎた。

街から日帰りで行けるところにいるEランクの弱い魔獣を狩り続けてDランクに上昇し、有用なスキルも大方回収できた。

途中で上位世界ナイフの扱い　血糊を拭くだけ　に激怒した鍛冶屋と仲良くなったり、夜の街に出没する幽霊の噂を聞きつけた少年たちに人形がつかまりそうになったり、無謀にもギルドに泊まっているのに強盗に来た輩を（人形が）返り討ちにしたり、といくつかイベントがあつた。魔術に関してはいまだに魔力を練ることもできない。

鍛冶屋は16歳くらいにしか見えない女の子なのに異常なほど物知りで人族と亜人の確執など、興味深い話を教えてもらった。少女の名前はグローリアというらしい。

襲ってきた強盗は私が特殊な道具を持っていると聞いてやってきたそうだ。どう考えても戦闘力のない、未だにギルドの荒くれどもから女と勘違いされている　面倒くさいので訂正してない　私が連日狩りをほぼ無傷で終えていたら、何かの道具でブーストしてると思うのは当たり前か。

受付嬢フアリシアさんによると『人形使いの少女冒険者』として物珍しさによって知られつつあるということだし、そろそろ他の街へ行ってもいいかもしれない。この世界は隣町への道すら危険に満ち溢れてるからなかなか踏ん切りがつかない。ギルドに泊まるのは危険が格段に少なかつたしなあ。

ちなみに強盗さんの装備は回収し破壊して恩寵を吸収した。命をとらないだけ嘛だと思っしてほしい。得た恩寵技能は黒い靴から【無音】だけ。他の装備からはステータスのみで人形に壊させました。全装備のうち一つは恩寵彫金されてるのでそれなりに稼いでるか腕利きの強盗だったのかもしれない。人形の【犬嗅覚】発動中 アクティブスキルだけど、肉体的疲労のない人形にとって長時間発動させるのは容易い。精神的疲労のみなので に来たから音がでなくても気づけたけど、そうじゃなかったらやられてたかもわからんね。

さて、魔獣狩りで得た恩寵だが、蜘蛛がでかくなって甲殻をもった魔獣ジャイアントスパイダーからは【蜘蛛系作成】【系繰り】、白色の芋虫の巨大化したようなホワイトキャタピラーからは【麻痺毒 弱】、中心に核があり他の部分を切っても壊しても再生するグリーンスライムからは【再生】【強酸生成】【打撃耐性】、少人数で固まっているところをしとめたゴブリンから 正確には持っていた一番良い武器からは【切断強化】、洞窟にいた蝙蝠、ウインドバット 群れだとCクラスなのだが、Bクラス魔獣の『ハンドレッドベア』の食い残しを仕留めた からは【発超音波】【蝙蝠聴覚】【風属性耐性】【吸血】、昼飯にとったフルーツのとりあいをしたアプモンキーからは【雑食】

【森林闊歩】、
を得た。

【再生】はその名の通りだが、あまり人間が使うのはやめたほうがいいスキルだ。欠損した部分を埋め合わせるために周りからまわさなければならぬため、背が縮んだり、腕をなおすために内臓が持つていかれる恐れもあるためだ。人形には与えておいたが。

【強酸生成】も、手から出すと手が溶けてしまうために、生身の身体では使えない。人形なら酸にやられることはないから活用できるだろう。

【雑食】は肉食の獣がもつと草でも栄養がとれるようになるというもので元々雑食な人間には必要がない。アプモンキーがこれをもっていたということは、アプモンキーは身体的には肉食しか無理だが恩寵技能が受け継がれているのか？ それとも雑食を極めてど
う極めるというのか…… 恩寵を得るに至ったのだろうか。

【森林闊歩】は森林内を移動するときに補正がかかるというもの。

これらの中では【蜘蛛糸作成】【糸繰り】【麻痺毒 弱】【強酸生成】が罫の作成に大きく役立ち、【蝙蝠聴覚】【発超音波】が【犬嗅覚】と共に索敵を磐石のものにしている。どれも低階なので私には使えず、あいも変わらず人形が駆使しているわけだが。

問題は蜘蛛糸や毒は全て使用者の身体の一部が使われるという点だ。人間なら生活をしていて新陳代謝により日々新しい身体ができてるので作りすぎない限り問題ではないのだが、人形は食事も排泄もしないために質量が全く変化しないため、身体の一部を用いて糸や酸を精製するほど体積が減っていつてしまう。

それを擬似的に解決したのが、以前私が使えないと嘆いていた【人形師】だ。固定観念により人形に【人形師】を与えていなかったの

だが、「人形であつても、人格をもち動く人形なのだから人形を使えて問題あるまい」と思い至り人形に【人形師】を与えてみたら、さすがの中階クラスの技能、材料を買ってあげたらもの見事になくなっている部分を修復できた。

また、人形によると【吸血】の効果がすごいらしい。人形は肉体的疲労はなくとも、人格が存在する時点で精神的疲労はあるのだが、この恩寵を使うと生命力を吸い取ってだいぶ楽になるそうだ。ということであまに首筋を噛ませて血をすわせてあげている。

夕方に最初に会った冒険者四人組のうちの二人が長期依頼から帰ってきた。

私の前を通り過ぎようとする二人に声をかける

「ザルモンさん、お久しぶりです」

「おう久しぶりだあ。声聞くまでクロノの坊主だと気づかなかつたぜ」

ガハハと笑うザルモンさんと苦笑するエメリーナさん。今の私は元々着ていたジャケットの上から灰色の大きいローブを頭からすっぽりとかぶっているので一目ではわからなかつたようだ。

まずは二人の旅を慰労するために酒場に入って酒とそれなりにしっかりとした料理　とは言ってもこの世界の料理はシンプルなものが多い　を注文する。

私が何とか細々と依頼を受けてDランクに無事あがったことを報告

し、大きさに喜ばれる。どうもザルモンさんは私のことを息子と、エメリーナさんは弟と認識しているようで猫かわいがりしてくのはいかなものか。かわいがられるのは嫌ではないが、この殺伐とした世界にあつては純粋な好意は少しこそばゆい。

次に依頼の土産話をされる。もちろん依頼主や内容の詳しい部分は守秘義務によりぼかしてあるが。

今回の長期依頼は隣国ラーシアン帝国の南西のヴォルガー共和国

この世界で共和国があることに驚きだが、国の中心にはグルーミ海に流れる大きな川があり資源も豊富なため、帝国の庇護下にはいることで比較的安定した生活を国民が送れるらしい。への輸送護衛任務だったとのこと。馬車で片道4日ほどの距離で、ウクラインから一番近い国だ。

また、ザルモンさんたちのクラン名を『境の風』といい、その名の通り主に国境付近での依頼をうけているウクライン街での主要メンバーで、クランの人数は6人。

今回の依頼はテッドとカルロスさんを置いて残りの4人で行ってきたとのこと。カルロスさんは用事があつて王都に行っているらしい。

そして次は少し休んでからまた輸送護衛任務を受けるつもりで、久しぶりにエウルーパー王国の中央に向かうそうだ。それを聞いて私もついていきたいと言ってみる。

この街での情報はある程度集まったし、顔を知られてきたので新たな所へ行こうと思つたので護衛任務についていけるなら渡りに船だ。

しかしザルモンさんもエメリーナさんも少し渋い顔をした。

今回の依頼はランクB。輸送任務でランクが高いということはそれだけ重要視されている荷があるということ。失敗は許されず、Dランクである私ではCとBランクしかないクランのメンバーの助け

になるどころか足手まといになりかねない。
二人とも熟練の冒険者だけあって公私をわきまえていて仕事に関してはシビアだ。

結局、任務を共同する他のクラン 『空翔る虎』といい、4人が参加する にも問い合わせ、新米冒険者に経験をつませることは重要であるという理由より、報酬は経費以外なしで絶対に邪魔にならないようにする つまりは助けてもらえないということ と いう条件の下に、私ともう一人、『空かける虎』の新人が任務に加えられることとなった。

そして輸送護衛任務までの三日間、情報収集は人形が継続し狩りや薬草集めをやる傍ら、私は野宿に必要な道具を揃えに道具店をまわっていた。

この世界の文化レベルでは現代のようなキャンプ道具などなく、見たことも使い方もわからない道具だらけなので、護衛に参加するほかのメンバーが野営準備の荷物を担当していたとしても自分で実際にチェックしとくのが、これから一人で旅をするときなどに役に立つだろうと考えたのだ。

野営用の道具として食事関連に鍋などがあるが、大きくて一人用には向かないので断念する。干し肉と硬いパンだけなのはつらいが4日くらいならなんとか我慢できるだろう。

だいたい道具にはやはり恩寵技能はついていないし、ついていたら高いのだが、店の端のほうにたたまれていた天幕が目に残る。

どうも気になったので『根源管理』でしっかりと視てみると、『疲

労軽減」という低階恩寵が刻まれていた。

【疲労軽減】はその名の通り疲労がたまるのを軽減するが、天幕がもっているのならその天幕が少し長持ちしやすいというだけだ。【疲労治癒】なら目が飛び出るほどに価格が跳ね上がったのだから、この天幕が【疲労軽減】という恩寵を持っているということ自体に気づかれなかったのだろう。恩寵を読み取れる【根源看破】は高階恩寵で所有者が少なく、わざわざ天幕を見てもらうのに金を払うわけがない。しかし恩寵を見れる私にとってはチャンスだ。

ということでも早速、この天幕を買い叩く。値切り交渉が普通な世界に二週間もいたら当たり前前に値切りができるようになってしまった。そして裏路地に入り、誰も見ていないことを確認して天幕を破壊する。布の部分は人形の服の補填や、簡易ベッドを作るのに使えるだろう。天幕が天幕でなくなり、根源がばらけゆらめくのが見える。その不安定な状態になった根源から恩寵を取り出すイメージ。浮かび上がってきた立体をクレーンで取り出し私の根源、海の中に放り込む。【疲労軽減】が私の中に染み込み溶け合うように一部となっていく。

【根源管理】によって根源が見える私には自分の好きな部分を切り取ることは容易い。この作業も10日間の間にずいぶんと手馴れ、硬直時間も短くなってきている。

しかし恩寵やステータスを得た瞬間の高揚感と陶酔感だけはいくら感じてても新鮮なままだ。この世界で血の気が多い人がたくさんいるのも、人や魔獣を殺した時の快感の中毒になっているせいではないだろうか。

そして護衛任務開始の日の朝、日が昇り始める頃にお世話になった

ギルドの受付嬢フィリシアさんに感謝の言葉を書いた置手紙をカウンターに部屋の鍵とともに置き、二週間もお世話になった冒険者ギルドウクライン支部を目に焼き付けてから、今日も暑くなりそうだと天気を予想しつつ集合場所に向かって歩いていった。

6話 武器屋 & 十日後（後書き）

早くNAISEIをやりたいです。内政ではありません。

できればどんどん巻いていきたいのですが

7話 護衛任務

集合場所につくと、最初の方に冒険者が揃えるオーソドックスな装備をした少年がいた。

あれが『空駆ける虎』の新人さんだろう。新人が先に来て先輩を迎えるという風潮は上位世界でもアンダーワールドでも同じということかな。

しっかしいかにも新米な冒険者オーラが漂っている。私は最低限必要な防具も付けていないので人のことをいえないし、あちらから見ると冒険者未満にしか見えないだろうけども。

その少年は身長175cmほどで耳にかかる黄髪碧眼、顔立ちは西洋風だが肌が黄色く、このあたりではみかけないタイプだ。軽い細剣とサブで便利なナイフを腰から下げ、防具は革でできた胸当てとを着込んでいる。うん、やはりオーソドックス、新米オブ新米な姿だ。

首からかけている額あてにはなにやら文様が刻まれている。その点が普通とは少し変わったところか。

「おはようございます。クロノ・タナカです、今日からよろしくお願いたしますね」

「ん、ああ。おまえが『境の風』の新人か。どうやっておまえみてえなひよろっこいやつが加入できたんだ？ まあいい、今日から邪

魔にならないようにしろよ」

……驚いた。同じ新人なのにここまで高圧的に出られるとは。それに私は『境の風』に入っていないぞ。

「何も言い返せないのかあ？　ほんとにたまついで」

「あほかっ！！」

私が黙っているのを見て勢いづいた少年がまた余計なことを言い出した時に、後ろに大柄な男が現れて少年の頭にげんこつを落とした。

「い、いたいです、ハーマンさん！」

「その程度で痛いなんて言っつとこの依頼につれてかねーぞ」

「ひ、ひどいですよお」

少年が涙目になって訴える。いやね、あんた態度変わりすぎだと。性格まで変わっているんじゃない。

「悪かったな嬢ちゃん。こいつ初めての高ランク任務で昨日から浮き足立っててよ、憎まれ口聞いたのも強がってみて緊張を和らげようとしたのさ」

「いえ、大丈夫ですよ。私も緊張しているのでその気持ちはわかります。」

「ありがとよ。ほらっフラン！　嬢ちゃんの落ち着き具合を見習え」なるほどなるほど。お子様ならつい強がっちゃうこともあるだろう。

ハーマンさんと呼ばれていた大柄な男の言葉を聞き、ぐざぎざと擬音をならしながら私のほうを見るフランくん。しかし年齢的にかわいくないぞ。そういうのはシヨタだったときにやりたまえ。

まあわたしのことを最初から男と見破った慧眼に免じて気にしないであげようと思う。けっこうすごいと思うよ？　160cmの小ささ　王国の男性の慎重平均は175以上　でありローブで顔

を隠しながら人形を片手にもつ人物を男だとわかるってのは。

ちなみにハーマンさんは勘違いしているようだがいちいち訂正しないし、か弱い女だと見られていたほうが得することはいくらでもあるので黙っておくことにする。

「ご主人、様。やらなくて、いいん、です？」

物言わぬ人形のふりをしてくれていた人形、なぜ君が殺気立っているんだ……。

「やる」って「殺る」って意味か！？」

私の半身は存外に物騒なそうだった。魔獣や亜人を殺し続けてゆがんだのか？

そうこうするうちに両克蘭のメンバーが集まってきたようだ。『境の風』からはザルモンさん、エメリーナさん、テッド。『天駆ける虎』からはフランとハーマンさんとあと三人だ。

そして少し後れて商人がよく使う馬車　Bランク任務なので見た目よりもだいぶ丈夫だったりするのだろう　を引連れて男がやってくる。

「おはようございます、皆様方。今回の護衛の依頼を引き受けていただきありがとうございます。報酬は先に経費分、達成後に残り金額でよろしかったですね。」

物腰が随分柔らかいと思ったら、依頼主の代理らしい。おそらく依頼主が地方の貴族でこの人が執事や使用人頭ということだろう。

後は両クランのリーダーと執事さんが細かい日程などを最終確認し、ウクラインの西門を開け、早朝なので許可証を見せてあけてもらわなければならないのだ、中央へ向かう街道を馬車が走り出した。

今、私は猛烈に気持ちが悪い。

すでに門をでて4時間ほど、特に何もなく平和に馬車は進んでいくのだが、私はウクラインの街から新たな拠点に移ることに頭がいっぱいで移動手段について失念していた。

そう、私は乗り物酔いしているのだ。

護衛の面々は一人で馬に乗って先に行き周辺警戒をしているものと、馬車に乗り込んでいるものがあるが、私やフラン、テッドのような若い面々は馬にうまく乗れないために馬車組みだ。

ちなみに、馬以外の獣に騎乗する人もいるかとおもったが今回のメニューにはいなかった。魔獣を使役できる人は【獣支配】【獣使い】【獣通じ】のいずれかの恩寵をもっていないと厳しいとのこと。いつか魔獣や幻獣にも乗ってみたいものだ。私は呪いでそれらの恩寵を使えないので誰かと相乗りという形しか無理だろうけど。

ファンタジーの定番、馬車。たいていの小説で揺れが激しく尻が痛くなるというのを考えて、壊した天幕の布に少し詰め物をしてクッションとした。そこまでは見越していたのだ。

尻に敷いたクッションを恨めしげに眺めるフランにちょっとした優越感を感じること数十分。たわいない話を彼らとしていたときに突然それは訪れた。

「つづつ！」

先ほど朝食として食べたものが胃から逆流しようとする感触にむせる、が吐くところがないためなんとか嘔吐感を押さえ込む。幸いその一瞬を彼らは見ていないようだった。年下の彼らにはあまり無様な姿は見せたくない。

自分が電車でも新幹線でも飛行機でも乗り物酔いする、三半規管おかしんじゃないのかってくらい酔いに弱い人間なのを忘れていたとは不覚。

その後3時間、ずっと酔いながらも吐くことはせず、テッドとフランとの会話には相槌を打つだけになった。

元々饒舌に話すほうではないので特に不審に思われなかったようだ。

二人の会話によると、フランはテッドと同じ18歳で、出身はウクラインの近くの小さな村。肌が黄色いのは母親がアイスル教国の砂漠地帯の民族だからそうだ。つまりアイスル教国、地球でいうサウジアラビア辺りの人族は黄色人種ということか。

父親の仕事につれられてたまにウクラインに来て憧れており、生まれた村は余所者の母に冷たかった生まれ村を母の死とともに飛び出してきて、戦闘を行う者として適正があったために『空駆ける虎』に目をつけてもらえた、というのがフランの経歴。

【根源管理】で見ると、【未来線予知】【攻撃強化】【切断強化】【危険察知】という戦闘系恩寵があった。これはまた便利な技能が揃っている。

中階【危険察知】で不意打ちを防ぎ、中階【未来線予知】で相手の動きを先読みし、低階【切断強化】【攻撃強化】で持っている力を超える攻撃を繰り出すことができる。

こんな有用な恩寵を持つって王国政府や貴族に知られたら、高待遇で召し上げられるだろうね。

細かい恩寵は普通の人にはわからないから、何か恩寵をもっているのが戦いに役立つ、としか見られていないだろうが。

テッドは王都の近くで生まれたある程度裕福な家だったのだが、若いうちに旅したいということで家の反対を押し切って、冒険者が多いウクラインにまでやってきたらしい。

ちなみにテッドは戦闘系恩寵は【爪攻撃強化】【麻痺毒（弱）】という、人間にはほぼ意味がないか、使ったら自分が大変なことになるものくらいだった。

テッドもそれなりに魔獣は殺しているが、恩寵を吸収できないこともあるし、吸収したとしてもどんな恩寵かわからないので習得していることに気づかれない恩寵技能も多いのだ。

テッドは他にも【雑食】【毛皮硬化】なんて人族には意味のない恩寵をもっている。低階ばかりなので容量的にはそこまで逼迫していないが。

いつのまにか駄スキルばかりで埋まって才能限界に達してしまうこともあるこの世界はやはり怖いな。

夕方になって野営の準備が始まった。

ここまでの道のりは街から近いこともあり、道には魔獣は一匹も現れず、馬に乗って先行しているエメリーナさんたちが、野生動物を

食事をするために狩ったついでに追い払う程度だった。朝の食べたぶんは昼休憩で吐いたし、戻す危険性を考えて昼も食べていなかったなのでお腹はペコペコだ。

動物は狩ったのに魔獣は追い払ったことを根拠に、魔獣は食料にならないのかとエメリーナさんとザルモンさんに聞いてみた。

「そうねえ、魔獣は人に害をなす動物のことを言うから食べられるものもいるわよ」

「動物だも全部が全部食べられるわけじゃねえってのと同じことだ」
確かにそうか。

なんとなく前の世界の影響で狼や熊は魔獣じゃなく動物って分類で考えてしまいが、この世界の基準で言えば熊や狼も人を襲う限りは魔獣に分類されるんだな。

夕飯を準備し終わる頃には暗くなってきていた。外では特に明かりが貴重なので19時くらいには活動を終えるように準備がされる。夕食は各自が持っている硬いライ麦パンと狩って来た兔の焼肉、少しずつだが鍋で食べられる野草と干し肉をちぎって入れたスープだ。顎に顎関節症を抱えている自分にとってはパンは固すぎて噛み切れない。だからスープに浸してふやかし食べる。行儀が悪いと思うってしまうが、こんな世界だ、贅沢はできない。

贅沢ができるようになるのはいつかお金を大量に稼いでどこかの街に住み着いてしまう時だろう。

いまはまだお金も少ないし、この世界の危険性を調べきっていない

ので安心して枕をたくして眠ることができない。
まだ見ぬ恐怖があるかも思っているのだ。自分でも臆病だとは思
う。

枕なんてここにはないのだが、と自嘲的に呟き、天幕の中で横にな
る。今夜は不寝番でない。

ちなみに人形は外に座っている。この世界では寝るときも恩寵が刻
まれた装備なら必ず手の届くところにおいて、壊されないようにす
るのだが、私と人形の場合は人形の方が強いので抱いて寝る必要は
ない。

朝、不寝番を交代でしていたものは若干疲れているようだ。特に昨
日不寝番を何時間かやったフランの顔色がひどい。
軟弱なやつめ。自分のことは棚にあげて呟く。

私の場合は睡眠を必要としない人形が常に不寝番をやっているからぐっすりと眠れるのだ。

人形の方が【犬嗅覚】と【蝙蝠聴覚】【発超音波】ではるかに広い索敵範囲を誇るのだから私がいても何も意味がない。人形に察せないなら私にもそうだからだ。

今夜の不寝番は仕事だし何事も経験ということでもじめにやるつもりではあるけどね。

ちなみにこの世界は朝ごはんは食べないものも多いとのこと。なぜなら動き出すのが朝5時から6時で、そのまま仕事を昼までやってしまっからだ。朝食を欠かさずに食べるなど貴族のすることらしい。

「うっせ。今から少し仮眠とるから有事になったら起こしてくれ」
そういつて軽くかわし馬車に乗り込むフラン。君は【気配察知】があるから敵意を持った存在が近づけば自動的に気づいて起きるでしようよ。

さて、数時間後それが現実になった。

馬車に揺られている　　少しだけ慣れたが、しかし気持ち悪くてグロッキー状態　　私は何も感じなかったし、人形も特に何も言っ
こなかったのだが、

『ガバツ！』

と跳ね起きたと思ったら、フランは進行方向の右ななめ前方、北西の方角をじつと見つめたのだ。

私はポカンとしていたのだが他の馬車詰めメンバーは即座に武器を構え、フランの視線を追う。

「あそこの森、ここから100mに数人の気配がある。」
馬車の周りにいたメンバーに聞こえるようにフランが注意を促す。

【気配察知】で勘付いたのだろうか、さすが中階、すさまじい効果だ。熟練度もかなり高いのだろうか。馬で先行しているザルモンさんや『空駆ける虎』のメンバーも気づいていないというのに。

各自身構えていたが、結局馬車がその近くを通り過ぎた時も何もなかった。

「この辺りでの盗賊情報ってあったっすっけ？」
テッドがエメリーナさんに話しかける。

「いや、聞いたことはなかったはずよ。でも新しく住み着いた可能性もあるから今夜は気をつけましょう。」

時間があれば盗賊の拠点くらいは見つけておきたいが、最優先なのは荷物を守ることなので、天幕の周りにトラップを大量にしかけて敵襲に備え、夜陰に乗じて夜襲があれば返り討ちにすることをエメリーナさんが提案、周りも賛同したので私も同意する。

そして少し進行方向右側へ警戒を強めることを確認しあつて散らばる。

私も馬に乗る練習をしないとたほづがいかかもしれない。荷物番くらいしかできていないのはつらい。

『くいつくいつ』

突然ロープが横に引っ張られる。

「私も、気づいてた、もん」

……どうやら人形、私がフランのスキルの便利さに感嘆していたのを見てむくれたようです。

本人が言うには「自分もフランより先に気づいていたけど、脅威度が低いのでご主人様の耳に入れるまでもない雑事だと判断した」とのこと。

この子、最初に私が馬鹿にされたのにも怒っていたし、フランには敵愾心を燃やしているようです。

精神年齢は人間で言うなら6歳くらいか？ 自分のものをとられるというのを嫌がるという気持ちを持つようになったのか。

愛いやつめ。娘の成長をみているようでつい笑みがこぼれた。

7話 護衛任務（後書き）

盗賊編はあと二話、かな

読みにくいところとか教えてくれたら助かります。

自分的には会話を続けるがあまり好きもとい得意ではないので主人公のセリフは極力減らしています。

うまい掛け合いがぜんぜん浮かばないので。。。

8話 誤算と盗賊と

『ピーーーーー！』 「ぎゃあああああ」

警笛と悲鳴が鳴り響いたのは夕方に差し掛かる頃、そろそろ野営地を決めなければと速度を緩めた頃だった。

「なっ！ どういうこと！？ なぜ南から賊がやってきている！」
エメリーナさんが叫ぶ。

南から、進行方向の左ななめ前から馬にのって襲来する盗賊は明らかに準備が整い統率されてこちらに向かってきている。
たしかにおかしい。

こちらは馬なのだから相手が馬に乗ってアジトに知らせにいつても、夜になってこちらが野営しているときにしか追いつけないと考えて野営中に備えようとしていたのに、敵は盗賊がいると思っていた逆方向からやってきたのだ。

よって警戒が逆方向に向いていて接近を許してしまった。今の道の南には隠れやすいところが多くあったというのに、襲ってくるとしても北から来る想定をしていたために注意しておらず、すでに大きく接近を許している。

『ガキンツ、ガチャン！』

考えている時間はないようだ。ザルモンさんが馬に乗ったまま相手

と接敵し大剣を振り払うのが見える。

私たちの仕事は馬車の護衛、勝利条件は盗賊の追い払うか馬車が振り切るまで時間を稼ぐこと、敗北条件は荷物を奪われること。

今は逃げ切ることを主要として馬車を走らせ続けているため、馬に乗れない私やフランは馬車の上で荷物を守るしかない。逃げ切れないと判断した場合は降りて盗賊を追い払うまで戦い続ける。このあたりは事前に打ち合わせしてあるのであわてることはなく、敵を確認する。

道の左斜め前から迫ってきている盗賊は5人ほどだが、リーダーらしき男の根源は大きく、中階恩寵の【剣裁き】をもっていて、互角以上にザルモンさんと打ち合っている。ザルモンさんは下位互換である【剣使い】だから剣をもった正面からの戦いでは不利もちろん恩寵で優劣が全て決まるわけではないが　　だ。互角に打ち合い鏢迫り合いながら進撃を防いでいるのは、ザルモンさんの冒険者として修羅場を潜り抜けてきた経験と騎乗の上手さによるところが大きい。ほんの少しの変化でも一気に状況が傾いてしまいそうだ。

残りの盗賊4人はたいした腕でもなく、エメリーナさんや『空駆ける虎』のハマーンさんたち2人で押している。

エメリーナさんたちが盗賊を討伐するまでサルモンさんがもてば勝利は確定だ、と思っていたその時、

『シユンシユンッ!!』

暗くなり始めた空を飛来する銀の矢先が馬車の御者兼商人と、馬車周辺を守っていた『空駆ける虎』の一人に突き刺さる。手綱による

コントロールから解き放たれた馬は驚き走るのをやめてしまう。
『空駆ける虎』の男には矢が頭に刺さっているのもう助からないだろう。遠くから数矢で直接狙えるような弓をもっているのか、相
当に距離を詰められているのか、どちらにしても厳しい状況だ。

「どこから飛んできたんだ!？」

御者の安否を確認する手間も惜しく、明らかに南以外から飛んできた矢に警戒するテッド。馬車が止まったためにあわてて外にでるフ
ラン。

「馬鹿野郎! 馬車から離れるな!！」

こちらの様子に気づいたハーマンさんが、南の戦線を少し離れ、フ
ランを叱責する

「はやく索敵を!」

最近戦いを人形に任せばなしで久しく感じていなかった危機感に、
馬車の中からあわてて人形に指示をだす。

だがすでに遅かったようだ。人形が発言するよりはやく状況が
動いた。

『シユンシユンシユン!』

遠くからの牽制の矢と共にいつのまにか接近していた別働隊4人
おそらく本命 によって息も絶え絶えの御者が突き落とされ、
新たに乗った盗賊2人により馬を走らせられる。フランも個人の戦
闘力が高くて馬には追いつけない。それをわかつているフランは
馬が加速する前に飛び乗ろうとするが、他の接近していた盗賊に阻
まれる。それと同時にテッドも押さえられる。

私が入形にある指示をした時に、フランとテッドが何かを叫ぶが、
どンドン離れていく馬車からでは聞き取れない。

こうして私と人形と荷物の載った馬車は盗賊に率いられて盗賊の本
拠地に運ばれていくのだった

夜です。笑いながら盗賊たちが乾杯してます、目の前で。

二時間ほど前。

馬車ごと連れ去られた私と人形。止まっしてしばらくしてから馬車を
あけられるのを感じる。

人形の嗅覚と聴覚による索敵により人数的に打開することは不可能
と判断したため、人形には動かないように指示し、あけられるのを
待った。

人形は身体の欠けた部分を、非常事態ということで荷物の中の価値
の低そうなものを【人形師】によって使い補修して荷物の山の中に
隠れてもらっている。

そして馬車の扉が開錠されると、私がいたことに一瞬驚いた後即座に剣を突きつけられますが、私の姿を見て武装解除を求めてくる。ああ、やはり私を女だと勘違いしているんだな、と命をとられないことを理解して　それが狙いで馬車から怪我覚悟で飛び降りずにある小細工をしてきたのだからそうじゃないと困る　武器をもつてないことを示すと、乱暴に後ろでに縄で縛り上げられ、うつぶせに床に転がされる。抗議の声をあげようと視線を上げると、盗賊にしてはこざっぱりとした家々が見える。

って盗賊が家！？　たしかに北のほうでは街や村が盗賊の根城になるといふ話は聞いたことあるけど、王国を東西に走る街道のすぐ近くにもあるとは……森の奥の山の裏にあるので見つかりにくいというのわかりますけど、それでもなぜこんなところに農村が……？

その光景に戸惑っていると軽々と持ち上げられて村の中心にの広場に運ばれる。ガラガラという音もするので馬車もこちらまで持つてこられているみたいだ。戦利品を全員で確認するということが？

しばらくすると馬車を襲ってきた盗賊たち　リーダーらしき大柄の男もいる　が順々に戻ってきている。様々な方向からバラバラに戻ってくるということは、ザルモンさんたちをうまく撒いてきたということだろうか。

リーダーが帰ってくるのと広場にいる全員が輪になって食事を運び、勝鬨をあげながら宴の始まりを告げる。

盗賊たちは自分がどんな働きをしたか武勇伝を語ったり、互いをねぎらいあう者が多い。酒量が増えるに従って盛り上がり完全に油断しきっているように見える。見張りも交代でいつているようだが、この余裕さは冒険者たちを撒きながらの逃走に余程自信があるのだろうか。まさかザルモンさんたちが全滅したということはあるまい、ないと信じたい。

盗賊たちは荒々しい雰囲気のもの少なく、運ばれてくる料理も質素ながらも丁寧に作られたものが多いように見え、食欲を誘うように耐えながら、腑に落ちない違和感を感じるのだった。

宴の間、私は縛られたまま馬車の近くに転がされていたが、いくばくかの水とパンをもらえた。

トイレは何とか一人で行かせてもらえた。武器をもっていないし逃げられないと思われたのだろう。実際反抗するきはないのだし今は。

そして宴が終わると楚々の家に戻っていく。

戦利品である荷物　ほとんどが武器や装備品だった　はなぜかほんの少ししかとらず、全くとっていない者もいた。大量の残りは山腹の洞窟にいれておくようだ。

私はなぜか今リーダーの家　山のきつい斜面の上にあつて襲撃されにくく逃げにくい　に連れられていた。戦利品を分け合ってる時に盗賊の一人が私をリーダーに見せたら、一瞬リーダーが呆けた

後に「俺が預かる」と言っただけで抱えられ連れてこられたのだ。

いつ犯されそうになって男だとバレルか　あまり猛々しいやつがいなかったからバレても殺されはしなかっただろうけど　戦々恐々していたのに一回も襲ってくる素振りを見せずに宴も終わってしまっただけ。

まさか、このリーダー、私に惚れたか？　不快なことこの上ないけどそうだとしたら生き残る目がでてくる。そしてその間にフランとテッドがアレに気づいてくれれば。

「楽にしる。俺はお前さんを犯す気はない」

身体がこわばってるのに気づいたのかこちらを慮るような声色で声をかけてきた。

ふーむ、ほんとはよくわからない盗賊団だ、ここは。このリーダーの影響か？
いつそ聞いてみるか。

「あなたたちは変な盗賊ですね。ほとんどが普通に田舎の村にいます。うな雰囲気の人ですし、このアジトもただの村にしか見えません。」
「実際に通報されてもしここが発見されたとしても、男手しかいない。少し奇妙だけど平凡な村とみなされるんじゃないだろうか。」

「はっは、予想外に肝が据わってる嬢ちゃんだな。ここは盗賊じゃないのさ」

盗賊じゃない？　盗賊っぽくないのは認めるけど、紛れもなく私たちは荷物目的で襲われたと思うのだが。

「嬢ちゃんには何もしないから安心しな。明日にはここを移るから」

長居はできないけど、くつろいでくれ」

そんな重要情報を渡すとはますますもって不気味。冥土の土産に教えてやるよっていわれたほうがまだ納得する。

それに手の戒めを緩めて前で縛るだけにするとはどういうことなんだろうか。たしかにこの男には逆立ちしても敵わないけど万が一を考えるものだろうに。

いすに座っていると、このリーダーが馬車から持ってきた戦利品が目に入る。

仰々しい大鎌だ。なぜ非効率な武器を選んだのだろうか――瞬思うが【根源管理】でみると納得し、絶句した。

柄には『世界樹の枝』が中心にはめられその周りをダマスカスでコーティングしてあり、刃の部分にはこの世界最強の金属とされているオリハルコン。どうやって薄くしたのだろうか。で、その他の部分にも純度の高い鋼鉄であるということにも、金貨何十枚するんだろうと目がくらむ感覚を覚えたのだが、刻まれている恩寵技能を見てさらに驚愕し、驚嘆することになった。

なんと高階クラスが刻まれていて、しかも二つなのだ！ 刻まれた恩寵もすさまじい効果のものだ。

一つは【戦乙女 ヴァルキュリエ】。効果は『戦闘時に全体ステータス大幅アップ』と『敵味方の血が流れれば流れるほど能力があがっていく』。両方ともにアクティブ。

二つ目は【豊穡の女神の加護 ラウニプロテ】。効果は『保有者がいる土地周辺の土壌を数段階良いものに変える』と『保有者が認識した植物の成長を数倍に早める』。前者がパッシブで後者がアク

タイプ。

【戦乙女】は素人であっても戦場の雄となるだろうし。【豊穰の女神の加護】は土地がやせているエウルペ王国としてはのどから手がでるほど欲しいスキルだろう。国を順番にまわっていけばそれで飢饉がなくなるだろう。両スキルとも女性しかもてないことなどデメリットになりはしない、表舞台にできれば所有者を歴史に残す恩寵技能だ。

この二つを内包しているのだからあれだけの最高級素材で作られているのも納得する。

実際に、【根源管理】によると大鎌の根源ぎりぎりいっぱいに入っているし、

また、ステータス情報などがはいっている立方体が無理やり高階クラス恩寵二つに押しつぶされているので、この鎌はどれだけ刃を研いでも二度と物を切ることはできないだろう。下手な刺激があれば内からはじけ飛んでしまいかもしれない。

だがどうやってこんな不安定な、武器ともいえない武器ができあがったのだろうか。相性の悪い、しかも高階スキルが二つ刻まれていることから天然物ではありえない。

【戦乙女】と【豊穰の女神の加護】を持っていて且つ【恩寵彫金】を所有している人物がいたとしても、私の【恩寵刻印】じゃない限り高階恩寵は刻めないはずだし、そもそも前者二つをもっているものが他の物に与える行為 自分の希少性価値を減じる行為 などするわけではない。

「その大鎌の価値がわかるのか？」
いつのまにか近くにしたリーダーが、まじまじと見つめていたのに
気づいて声をかけてくる。
と同時に桶とぬれたタオルを渡してきた。

身体を吹いていいのだろうか……？ 腕の戒めがゆるくなったこと
も、パンをもらえたことも驚いたが、ここまで待遇がいいといぶか
しんでしまっ。

「そいつの中から泣き叫ぶ声が聞こえるだろう？ 早いうちに解放
してやらなきゃなんねんだ」
大鎌のほうに顔を向けながら焦点のあわない目をするリーダー。口
から出た言葉は私に言っているようで独り言のようなものだろう。
それにしても何をいつているのかわからない。根源が見える私でも
根源が内から壊れそうになってることがわかるだけで、根源に悲し
みなどの感情は読み取れない。

『ト』
『ト』

と机に少しだけ湯気をたてるスープと比較的新しいパンが置かれる。
「宴会のときにはほとんど食べていないだろ？ これを食べな。明
日は長時間動くからな」
困惑している私に娘を慈しむような表情をして食事を勧めてくる。
その笑顔につられて、食べないのは悪い気がし、少し温くなってい

る野菜入りのスープを飲みパンを咀嚼する。
まったく、ここに着てから調子を狂わされ続けている。対人経験の
不足が祟ったのかもしれない。

その後も寝る前まで他愛のない会話をしたり、身体の調子を気遣わ
れたりしながら眠る頃合となった。

やさしく抱えられ違う部屋につれていかれてベッドに下ろされた。

このリーダーの細かい気遣いを見てみると、上位世界での家族や死
んだ祖父を思い出してしまいセンチメンタリズムに沈む。

寝かされた部屋を見てみると 既に暗く、ろうそくの明かりしか
ないためにぼんやりとしか見えない 盗賊には甚だ似つかわしく
ないファンシーな部屋だった。現代の思春期の女の子の部屋ほど色
とりどり自由に飾ってあるわけではないが、この世界では十分気合
がはいった部屋といえるだろう。

一見して女の子の部屋なのかとも思ったが、それにしても飾り方も
色合いのあわせ方も違和感がある。

と、ここまで観察してから栓のないことだと思い、近くに人形がい
ないことをさみしく思いながら瞳を閉じた。

8話 誤算と盗賊と(後書き)

次シリアス？

はやくほのぼのまでいきたいです

9話 疑問と救出と(前書き)

長くなったので分けることになり、盗賊の話があともう一話だけあります。

9話 疑問と救出と

ストックホルム症候群（ストックホルムしょうこうぐん、Stockholm syndrome）は、精神医学用語の一つで、犯罪被害者が、犯人と一時的に時間や場所を共有することによって、過度の同情さらには好意等の特別な依存感情を抱くことをいう。

リマ症候群は、ストックホルム症候群とは逆に、監禁者が被監禁者に親近感を持って攻撃的態度が和らぐ現象のこと。

Wikipedia「ストックホルム症候群」より引用。

この気持ちはストックホルム症候群なのだろうか

私は今、人形とともに何とかリーダーを川から引きずり出し、近くの小さな自然洞窟ともいえないほどの小さな洞に寝かせる。人形がリーダーの身体を少し持ち上げてくれていて間に硬いゴツゴツした床に適当に取ってきたわらのような草を大量に敷き詰めた。

『ゴホッ』

口から血が混じった咳がでる。あまり猶予がなさそうだ。

急いで【根源管理】を全力で発動し、周辺を見渡す。無理な行使
それも本来の熟練度を越えるほどの により肉体的にも精神的
にも根源に引つ張られ軋むが、治療に使える薬草を見つけないければ
ならぬ一心で耐える。遠くに痛み止めと治癒を助ける薬草が『視』
える。行かなくては

なぜ私は盗賊のリーダーを助けようとしている？

人形はさつきから指示に従いながらも私のほうをチラチラと見てい
る。

表情が細かく読める私でなくてもその面様が表す情感を即座に理解
できるだろう 私への憂えだ 。

従者からの、娘からの心配に、後ろ髪すら引かれずに身体に鞭打ち
続けているのは何故か。

きつと、はつきりさせたいのだと思う。

リーダーの私への家族へ向けるような笑顔、大鎌に向けた空虚な瞳、
アンバランスな部屋、盗賊にしては異常な本拠地、数々の不可解な
発言、それらの理由を。

このまま聞かずに行ってしまっただけは、逝かれてしまっただけは、絶対にあとで悔やむ時がくると直感しているのだ。

重くて少し気を抜けば動けなくなってしまう身体　無理もない、山腹を転がり落ちたあとに川で流されたのだ　を鞭打って進み、薬草を岩で削りエキスをリーダーの胸に大きく開いた傷跡に垂らし塗りこむ。応急処置にもならないが今できる全てだ。

こんなときに有用な恩寵技能も技術ももっていないことが悔しい。傷跡は人形の【蜘蛛糸作成】と【糸繰り】で少しでも塞ごうとするが、内臓自体を貫かれているためにほとんど意味がなく、シルクのような白く艶かしい輝きを放つ糸を赤黒い鮮血が妖しく染める。

『じゅっ、ひゅー、ひゅー……』

少しは効果があったのだろうか、リーダーの苦しそうな呼吸は変わらないものの、目を覚まして開口一番に声を発した。

「
」

それは唐突だった。

朝起きると贅沢なことにすぐに食事をもらえた。水を汲んだ桶を渡され顔を洗う。

その後匂い消しの薬草までもらう。

昨日と同じように高待遇。今日も一日中ペースを崩されるんだろうな、という思いと共に始まった。

が、予想以上に早く不思議な平穩の終わりが来た。

今日は夕方から雨が降るぞということ、早めに出発という話を外の大人たちがしていて、実際に昼前に集団で村を出ようとしたのだった。

私はリーダーの家に路銀と共に置いていかれた。

ほんの数分で騒がしい音が聞こえ始め、家にもすごい速度で音が近づいてきてリーダーの家の扉を蹴り開けた。

「クロノ！ 大丈夫だったか！？」 「ご主人！ 様！」

息を切らして入ってきたのはフランと人形だった。即座に私の腕を前で縛っている縄を切る。

「なにがあつたの！？」

フランに思いつきりあきれ返った顔をされた。

「なにがあつたもなにも……お前が人形を使って俺たちを盗賊のアジトまで呼んだんじゃないか。急いで来たつてのによお」

心配の中に脱力が入っていくのを見て取れる。

「え、じゃあ今ザルモンさんたちは！？」

「もちろん逃げ出していた盗賊を追撃してるぞ。俺もまたすぐに行く。お前はここで待」

最後の言葉を聞かずに私は飛び出す。フランは虚を突かれたが、人形はすぐに私に並走する。

「どう、したん、です」

人形が私の鬼気迫る様子に遠慮がちに声をかけてくる

どうしたもこうしたもない。

彼らは盗賊じゃないのだ。いや、盗賊行為を一回でも働いたのは確かだし、仲間をやられた『空駆ける虎』のメンバー、ハーマンさん

達は絶対に盗賊を許さないのもわかる。

それでも、彼らはどうみても完全な悪人ではない。少なくとも理由を聞かずに殲滅していい相手ではない！

普段とは考えられない速度で地を駆ける。まだ山の中での下りだから馬車を馬で引くのはできないはず、つまりそう遠くに行っていない。行つてできれば戦闘をやめさせ仲裁を呼びかける。うまくいくとも思えないが、意味もなく消える命は減らせるはずだ。

数分後、血の臭いが濃くなり、物言わぬ死体となつて転がっている盗賊がちらほら見える。

私からみて手前側に、大鎌を背負つたリーダーが右手に剣をもち、血を流しつつも冒険者3人に対して奮闘しているのが見える。しかし少しずつ傷を食らい斜面の方、山道から外れそうになっている。盗賊の死体の数が少ない。残りには逃げる事ができたのだろうか、リーダーが時間を稼いでるようだが。しかしこのままではリーダーが殺されてしまう。

その時、今まで押していた3人が何故かバックステップで距離をとる。そこを戦闘を止める千載一遇の好機と捉え、

「やめて！ とまっ」

3人とリーダーの間に飛び込んだのだが、

『シュッ！』「馬鹿っ！」

この世界に召喚されてから聞きなれてしまった遠距離攻撃の音が聞

こえる。矢だ。迂闊だった。距離をとったのは矢で牽制するた
めだったのか
死ぬ直前だからか、私の意識が加速され周辺の時間が遅れ始めた時
に、血相を変えて私のほうに飛び込んでくるリーダーが見える。

「ぐっ！ あああああああ！」

私を庇い矢を腹に受け苦悶の表情を浮かべるが、しかし私を力強く
抱いたまま山腹を転げ落ちていく。

幾度も回転し身体が宙を浮き下にたどり着いたと思ったら冷たい感
触。上下がわからぬまま流されていく。

少し流れが弱まったときに状況を確認する。

私を守り気絶しているリーダーを、今度は私が支えながら顔を水か
ら出すことに成功。

やはり川に落ちて流されているようだ。

だが状況はまずい。私はカナヅチだ。最も苦手な運動が水泳だった。
どうにか浮かぶだけでもしようと思えばたばたとさせるが、足がつか
ないことを理解するだけで無情にも私とリーダーの身体が沈んで
いく。

しかしその時私の身体に巻きつくものを感じた。

糸だ。それも何十にも重ねられた糸。

ブチブチと私とリーダーを支えられずに嫌な音をたてて切れていく
傍らから補完されていく。いったい何が……

そこで見えたのは、深く埋まっている岩の裏からこちらに糸を出し

続けている人形だった！

人形は私たちから見て岩の裏に身体をいれ、その陶器の身体を軋ませながら踏ん張っているのだ、

しかしそれだけでは踏ん張れずに言わばの後ろにある木や地面にも糸を飛ばして自分の身体を固定しようとしている。狙いが外れて踏ん張りになるわけがない小さい石にまで糸がついてしまうことがあるのは 表情は物理的に見えないが 人形も相当必死でやってくれているのだろう。

ここまでされて努力の結果を踏みにじるようなら、私は頼りないダメ主から最低のクソ主になってしまう。

糸を片手で上手く手繰り寄せつつ岸に近づいていく。そして握力が完全になくなってしまふぎりぎりまで岸の岩に手をひっかけることができた。爪も指も割れてささくれ血が出ている。

人形が最後に思いつきり引っ張って私たちの身体を地上にあげてくれた。

「ご無事、でよかつ、たです」
荒い息を吐いていると人形がやってくるが、その姿に絶句してしまふ。

その左右対称完璧な黄金率でその美を発していた身体は右半身がほぼなくなり、私が純白と呼んでいた美しすぎる腰まで伸びていた髪も今では肩口にも満たない。

そんな状態でも私を気遣ってくれる健気な、できすぎた従者には最

大限の感謝と報酬を持って報いなければならぬが、何ももっていない私にはなんとか動く右腕で短くなつた髪とともに頭を撫でてやるくらいしかできなかった。

この子がここまでボロボロになつた原因に思い至る。

盗賊たちに馬車ごと連れられる寸前、この大陸でじゃ珍しい私の黒髪を目印に『蜘蛛の糸』とともにテッドとフランのほうにとばし、そこからは目立たないように 盗賊にばれないように 細い糸を木に沿って貼り付けていったのだ。

そうすることでテッドたちにアジトまでの道を教えるという、とっさに思いついた「ヘンゼルとグレーテル作戦」である。

荷物を落として目印にすると盗賊に気づかれる可能性が高いので、要所要所に私の黒髪を切つてはりつけることで対応した。

その後、村内に運ばれた時にはまだ盗賊たちに対して強い危機感をもっていたので、早めに援軍にくるように人形に直接案内するように支持したのだ。

そうすれば、透明に木々の間を伸びる蜘蛛の糸に気づかなくとも、黒い髪を目印を探っているうちに人形と会える可能性が高いという寸法だ。

それだけでも人形とはいえ精神的に相当疲労していただろうに、私とリーダーが斜面を転がり落ちた時も真っ先に追いかけてくれたのはこの子だったのだらう。その小さな身体を懸命に動かして追ってきたのだ。

そしてあの大規模な【蜘蛛糸生成】の行使。

私の想像する以上の量を生成しなければ人間二人は支えられなかつ

たのだろう　元々蜘蛛の糸は粘着性が強い代わりにはね係数がかなり低い　、糸を生成するために自慢の陶器の身体を惜しげもなく使っても無残な姿になってしまったのだ。

結局この子がやることは全て私のためで私のせいでポロポロになっている。

この半身にいつか報いることができる日が来るのだろうか。

さて、リーダーの状態を確認する。水を飲んでいるが、息はできている。

しかし転げ落ちたとき刺さったのであろう細い竹が背中から腹側に貫通している。まずは止血しながら抜かなければ。

腰に下げていた大鎌はなんとか身体から離れていなかった。少しは衝撃を和らげてくれたかもしれない。

半壊している従者の手を借りて、無様な主は自分を庇った戦士をここから見える自然の洞に運んで治療することを決意するのだった。

目が覚めたリーダーが開口した。

「あなたは、天使……いや、死神か？」

「どうせ、どっちもろくでなしだよ」

何をねぼけているのだろうか、と思いつつも率直に浮かんだ言葉を返す。

「あ、ああ。お前か。無事だったか？」

「あんたが無事じゃないよ」

何をのんきに私の心配なんぞしてるんだと、矢から庇ってくれた恩人に理不尽な怒りを感じ、つい刺々しい口調になってしまう。それにしてもこのリーダー、案外意識がはっきりしているようで、弱弱しくもはきはきと話せている。死の淵にいるというのに。

「そう、か。痛みはだいぶました。残りは無駄だから自分に使え。あとその恩寵やめろ、お前が壊れるぞ」
無駄……？ 何が無駄だというんだ？
と無知に浸れたら楽だったのに。

【根源管理】。この便利で有能な恩寵技能、アンダーワールドで生きていく上で欠かせない私の要素・血肉となっているもの。

それが冷たい現実を無慈悲に無機質に教えてくる。先ほど使いすぎた結果暴走しているのか、オフにすることができない。

『残存 命力 0 %。減 向。 要血液 足。必
ルギー 不足。残存生存 間 6 秒』

「う、ああ、うわああああああ！」

目を背けたいのに背けられない。薬草の効果で命が減っていくのを少しはゆるやかにしているが、大規模な治療魔術や技能を行使しないとどうにもならない、あっても血液が足りない、そもそも他者治癒系の技能を私も人形ももっていない、どうしようもない！

助からないとわかってしまう！ 物の本質である根源にはごまかしがきかないのだ！

「へ、へへ。そんなに慌てるなお前さんよ。ほんとに、普段すかしているのに大事なときには全力になって感情豊かになるところが、俺の娘とそっくりだ。すまなかった、な。家で娘であることを押し付けようと、してしまった。」

絶望している私に向かってリーダーが話しかける。

娘？ やはりあの笑顔は私を娘に見立てていたということなのか

「自分の身体の状況は、自分でわかる。最後に、俺の話聞いてくれない、か？ 娘がどんな表情をして笑って泣いていたかを、思い

出すことができたんだから、思い残すことはほとんどない。
「
そう言って微笑むリーダー。」

私が口を挟む前にリーダーは語り始めた。

10話 過去と天使の約束と名付け（前書き）

人は残酷なのです。

10話 過去と天使の約束と名付け

「もう3年ほど前に、なるかな。
ここよりもさらに北の村に住んでいて、俺には目に入れても痛くないほど可愛がってた娘がいたんだ。」

娘はさ、生まれた時から不思議な威容を放っていて、物心ついたときには身から溢れる存在感に周りの全ての人がその畏怖を覚えるほどだった。この子は将来すごい子に、それこそ歴史に残るような大人物になるんじゃないかって気楽にまだ生きていた女房と喜んでた。

この頃は恩寵技能 グレイススキル ってもものにもあまり気を払っていなくて、たかだか人それぞれが持つ技能や才能を、王国の人間が名称付けて特別視してるだけだろって程度の認識だったのさ。

12歳の頃には、娘が村を歩くと人はその存在を無視できず、魂の大きさに恐怖するか、ただただ尊敬し平伏するか、誘蛾灯に集められる蛾のように娘み群がるものに別れ、

娘が畑の近くを通るとみるみるうちにやせた土は越え、植物を見つめると一年かかる植物が数日で生ってしまう。

ここまでいくとさすがに周りの人間が怖がる気持ちも理解できてきた、もちろん娘を怖がるなんて親失格だから恐怖はしなかったが、一個人、ただの人間には明らかに過ぎた力だ。

14歳の時には、娘のことを生き神と崇める者と化け物と恐怖する

者に二分され、どちらも娘を人間として見ていなかった。それに気づくと普段から感情を表に出さなかった娘は、親ですら見抜けないポーカーフェイスになって家から出なくなってしまうんだ。

『過ぎた力は人を不幸にする』とは誰の言葉だったか、自分の娘の不幸でなるほど金言だと理解したよ。

しかしこの時点でも俺は甘かった。過ぎた力を持った代償はこの程度じゃなかった、人間扱いされないだけじゃなかったんだ。

女房が亡くなるとともに、いい踏ん切りだと思つて娘と離れたところに引つ越して、娘を対等に見てくれるような人間が現れるまで、現れないなら俺が傍で見守ろうと考えていたのだが、さびれたところにも関わらず、どこからか『聖女様』の噂を聞きつけて押しかけてきた。娘の前にたつと娘の威圧感の前に怯んでしまうのだが、それでも瞳に欲をぎらつかせたやつは諦めなかった。

その後引つ越すこと数回、金も少なくなり、俺も娘も疲れてしまった時にそれは起こった。

すでに王国まで噂は届いていたらしく、寂れた家にわざわざ着飾った集団がやってきて、王都からの勅使だと言い張る。

なぜこんなところに来たかを聞くと、『王都に連れていってやる』と言つてくる。そして「それじゃ質問の答えになってない」と怒鳴つたら聞こえたんだよ、取り巻きの言葉が。

『神から与えられた恩寵の回収をしてやるというのに』って言葉がよ。

これには、娘に対する罵詈雑言を聞いてきた俺でも耳を疑ったね。人あらざる神や化け物という人格として扱うのですらなく、恩寵技能を宿した『入れ物』として見ていたのだから。

この日は実力行使する気はなかったようで、押し問答の末になんと

か押し返したが、最近勢力を北にも伸ばしているエウリーペ王国とはここまで狂っているのかと戦慄して、またすぐ人がいないほうへ引越したよ。

そうすると、こちらの逃げる意図を悟ったようで、暴力を専門とする集団を使い実力行使に出てきた。

何度も誘拐されそうになるが、同じような境遇の者　王国によると『恩寵保護』、俺らからしたら『ただの拉致』、を親族が受けた受けている者　が集まりあつて情報を交換し、娘を守りながら数週間は逃走できていた。

逃走が終わったのは『執行人』という『恩寵回収』を専門とする奴が出てきたときだった。

俺たちが命からがら包囲網を抜けた先にやつらはいて、罨にはめられたと気づいた時には、彼らは身に宿す恩寵と業物の武器で確実に仕留め、蹴散らせていき、とうとう娘のように恩寵回収の対象となつている子たちが集められているところにたどり着いた。

俺たちが死んだか、気絶したか、押さえつけられているか、恐怖で隠れたまま動けない状態になっているのを尻目に、『執行人』は部下から武器を受け取り、瞬きする間もなく一瞬で、あっけなく一人の子供の首を落とした。

これは想像の範囲外で一瞬何も考えられなくなった。

仲間と共に逃げ惑ううちに根源と恩寵について詳しく聞いていたから、『執行人』や部下が恩寵持ちを殺すと吸収してしまい、王やお偉いさんに渡すには自分を殺してももらわなくてはならなくなる。そんなことをするやつはいないだろうという話だったし、実際にこれまで逃げ延びられたのは相手が恩寵持ちを殺せず、誘拐されたのを輸送中に取り返すのができたというのが大きかったのだ。

しかし『執行人』はためらいもなく首を落とし恩寵を回収し、今度

は違う武器　これもまた相当高価な素材を使っていると遠目でもわかる　を部下から受け取って次の子の首をはねる。そしてまた武器を代えてははね、武器を代えてははね、と機械のように作業していく何もできずにほとんどが首を狩られた時点で、ようやっとカラクリに、悪魔の所業に気づけた。

『執行人』は根源に容量いっぱいまで恩寵技能を宿していたんだ！なぜ武器で殺しても武器に恩寵が宿らないかというところ、その武器を使った人間のほうがたくさん根源をもっているからそちらに引き寄せられ吸収されるからだ。では人間の根源にあきがないときは？自動的に持つている武器に吸収される。

そのために業物の武器をいくつも持参していたわけだ。」

……なんということだ。

しかし、それなら王家や貴族もうまく恩寵を集められる。

人間は世話に手間と場所がかかり、また印象も悪いが、『執行人』が人間に宿る恩寵を武器に吸収して、それを買えば金は多くかかるが、汚名を背負うこともないし、他者への褒美や貢物にする場合も人間を渡すよりずっとずっと楽だ。壊して恩寵を得ないのならば倉庫にいれて何十年もっておけるのだから。

ハキハキと喋り、自嘲気味に話すリーダー。彼はその相貌から流れ落ちる液体に気づいているのだろうか。

「そうして、恩寵もちの娘たちは首を狩られて、身に宿す恩寵を武器に吸収され打ち捨てられたというわけだ。

その時になんとか生き残ったのが、俺と盗賊団をやっていた10人ほど。俺らはその後、隠れ潜み、貴族や商人の情報を合法非合法あらゆる方法で集め、自分の娘たちの恩寵と無念が封された武器を回収する活動を始めた。

盗賊だけ盗賊じゃないって言ったのはそういうことだ。

輸送しているやつは完全に無関係なのも多くいるし、まあそういう人はできるだけ殺さないようにはしているが、盗賊行為などには間違いはないが、奪うものは俺たちの親族たちから奪われた恩寵が刻まれた物だけで、普段の生活は普通に農村をやっていた。あの山の裏にある村もそうだ。

今回の俺の娘の武器を回収するのが最後だったため、あの拠点は放棄することに決め、子供や女連中は先に新天地に移動させていたというわけさ。

俺の娘を奪った武器は、その能力の地方での有用さゆえになかなか王都に渡らず、また貴族のごたごたに巻き込まれていて情報を補足するのに3年もかかった。

それが普通の商人の荷物のように、大量の武器の中に隠して、しかも冒険者に依頼されたと聞いたときは千載一遇のチャンスだと思っただね。

どこかの護衛に任せると中身を見られて奪われてしまうと考えると、仕事については厳しい守秘義務を持ち、宙ぶらりんのために余計なこと首を突っ込まない冒険者に白羽の矢がたったところだろう。

そんな理由があったとは。しかしこれである村で感じた違和感にも得心が行く。そしてあの女の子らしさをいかにも不器用な人が真似

ようとなりました、と主張していた部屋は、リーダーが娘のことを懐かしんで再現しようとした部屋だったのか。

「あなたの、あなたたちの娘さんたちを襲った黒幕は、誰なんです？」

「該当するやつらが多すぎてわからなかったよ。強いていうならこの王国中央すべて、『恩寵技能は神から与えられたものでしかるべき高貴な身分の者が所有しなければならぬ』という風潮そのものだ。」

ここ数年、ハーヴェイからの王さんがおとなしいのをいいことに、アークライト王朝はその活動を活発にしている、噂だとハーヴェイ支配下の東部の犯罪者に影から支援して恩寵持ちをさらわせているってのうわさも聞く。

今回の輸送先も系列からするとアークライトの派閥へ届けられるものだったはずだ。」

予想以上にこの王国の闇は深そうだ。やはり王都にイカナケレバ。

「ふう、こんなもんかな。事情は。」

それで、思い残したことってのはよ、この、娘の恩寵と怨念が刻まれた大鎌を、王都のやつらにだけは渡したく、ないから、壊してもらえないか。

本当は、俺が落ち着いてから、壊すか、供養したかったん、だが…
…あと数分しか意識も、持たない。

お前さんなら、恩寵の効果がでないし、娘と同じくらいの、歳に見

えるから個人的にも納得できる。最後の願いだ、売ったら凄まじい、大金になる宝だというのは理解してる、が、どうか壊してくれ！」

「わかり、ました。」

その悲しみの剣幕にほんの少し混じる気休め程度の希望、娘は帰ってこないがせめてものという気持ち。それを汲み取って拒否するという考えはなかった。息も絶え絶えになってきた彼とこれ以上議論するきもない。

そして同時に湧いてくるある思い。

『この世界の不幸をどうにか減らせないか。』

ただの大学生だった自分には過分な願いなのかもしれない。

しかし自分はこの悲しい世界、弱肉強食よりもひどい、強者の娯楽や見栄のために当たり前に弱者が潰される世界を作った人間と同じ出身地なのだ。幾ばくかの責任も感じるといふもの。自分だって様々な下位世界を生み出してしまったらどうから。

そもそも王国の暗いところを探ろうと思ったのはなぜだったのかを
考える。

理不尽な暴力の存在などはウクラインにいても知ることではできず、冒険者ギルドに参加して、ある程度のランク　Dクラスから本登録扱いだったらしい　をもっていれば、そうそう王国にゴミのよ
うに扱われることはない、ただ安寧に暮らすだけならば、ウクライ
ンで冒険者家業を続けて金をため、王国でも帝国でもいいから市民
権を獲得すればよかった

。それなのに、わざわざ王都、王国で最も繁栄しある意味最も後ろ暗く危険な王都に行こうとしているのは、『自分が上位世界の人間で特別な者』だという傲慢な認識があったからだ。

「歪みを正すために堕ちてきた天使、か」
自嘲する。まさかあれだけ天使（仮）を憎み嫌悪していた私が、自分を天使のような存在だと、心の奥底で思っていたのだ。

でもそれでいいじゃないか。
ただの大学生？

違う。上位世界から堕ちてきてこの世界の数倍の根源を持ち、天使（仮）から奪った、世界管理用と思われる恩寵を保持している。私の存在はジョーカー、下手したらバランスブレイカーとなるほどの。
大きな力を持つ者は選択しなければならぬ。使うか使わないか。何も考えずに使おうとしないのは、最大限利用していないのは、ある意味罪だろう。大きな能力にはかかるものが、責任が大きい。

だから、選択しよう。

「『俺』さ、天使なんだ。上の世界からやってきたんだ。
リーダーは、そうか、とだけ呟いた。」

「俺はね、この世界から悲しみを取り除くために遣わされたんだ」
リーダーは、おう、とだけ呟いた。少し笑みを湛えながら目を閉じる

「約束するよ、弱い者が虐げられない国を造る。いつか必ず。」

リーダーからの返事はなかった。

「最後に一つ、あなたと娘さんの名前を覚えて。
リーダーの唇が動く。ハリス、ヘイゼル、と。」

手に大鎌をもって洞を出る。土砂降りの雨が降っていて川が増水している。涙は心の雨とは誰が言った表現だったか。人形があわててついてくる。

「ナイフを貸せ。」

一瞬俺の雰囲気戸惑い、逡巡するがおずおずと残った左手で渡してくる。

『キイイーン！キイイーン！』

ナイフを大鎌に打ち付ける。雨をつけて塗れた金属と金属がぶつか

り合う音が高く響き渡る。

上位世界からの持込ナイフのほうが根源量から考えてはるかに丈夫だ。いつか大鎌が壊れるだろう。

『カキイン！キイイイン！』

金属音が鳴り響く。繰り返し繰り返し。

周囲がぼやけていて、大鎌を押さえてくれている人形の表情もわからなかった。

『ガアアアアーン！』

大鎌が壊れ、高揚感とともに【戦乙女 ヴァルキュリエ】と【豊穰の女神の加護 ラウニプロテ】が俺の根源に入ってくるのを感じる。

大雨で体温が低下する中、その快感にしばし浸っていたのだが、同時に恩寵技能【電心】【剣捌き】【錬金】【料理】【率いる者】と幾ばくかのステータスが入ってきていることに気づく。

少し考え、【剣捌き】を見て得心を得る。

ハリスが逝った。

致命傷は竹による内臓損傷。竹を食らったのは私を庇って飛び降りたときだから、私が殺したことになっているんだろう。明確にわかる、いじわるなシステムだ。

娘は別格ながらも、ハリス自信も相当な恩寵持ちだ。

【剣捌き】と【錬金】 娘さんの部屋にあつた小物類を作るのに役立つだろう。は中階クラスだし、【電心】は低階ながらも情報を遠くへ伝えるという、仕事に困らない超便利恩寵技能。

【電心】をもっていたから、必ず追いつけない距離であつたのに待ち伏せされていたのかと思ひ至るが、もはやどうでもいいことだろう。

そういえばハリスさんは、俺が男だといつからか気づいていたんだな。そのため、安心して【戦乙女】と【豊穰の女神の加護】を吸収させたのだろう。効果がでないのだから。

ふと気づくと、洞の中にいた。
たくさん葉っぱと糸で毛布のようなものができ、俺の身体にかかっている。

「主人様、倒れた、です。」
「どうやら雨の中疲労で倒れた俺を洞まで運んでくれたらしい。
その際にまた【蜘蛛糸生成】をつかったようで、陶器の部分が更に減っている。木や岩の色が混じっているのは、欠けた部分を埋め合わせるために【人形師】で補完したのだろう。」

「ありがとうございます。」
人形に感謝してふと気づく。

今までは、指示しなくても話さなくても考えていることを察し共有できていた、半身である人形に名前など必要ないと思っていたが、最近是人形に呼びかけ、相談することすらあるのだ。
だから名前を贈ろうかと思いつく。

「今までの感謝の気持ちも兼ねて、お前に名前をつけようかと思う。
なにか希望はあるか？」

「ご主人、様に、つけてもらえる、なら、何でも、良い、です。」

この子の名前は一番多く呼ぶことになるだろうから、真剣にかつ合っている名前をあげたい。

イメージは純白だ。まじりっけのない白。しかし『ホワイト』とか『パールホワイト』では安直にすぎるだろう。

彼女の、岩や木で補填した部分は茶色と灰色となっているが、その上から白い色が侵食して淡くなっている。その透き通るような白い髪は岩肌や周りにあるものの色すら白っぽく写す。

たしか、上位世界にいたときにこのような、白を被せたような色合いがあったはずだ。美術をとっていたときにも使ったことが幾度がある。

そう、パステルカラーだ。

「パステル。今日からお前の名前はパステルだ。」

「謹んで、お受け、いたし、ますわ。」

パステルはその名の通り、さまざまな色彩をもった恩寵を自分の中に取り込んで、その純白で自分独自の色としていくのだろう。

10話 過去と天使の約束と名付け（後書き）

盗賊編終了です。

次からようやくと王都で、理想国家建国を目指してちょこちょこ動いていきます。

11話 純白の戦乙女と純白の美少女(前書き)

繋ぎ回かな

11話 純白の戦乙女と純白の美少女

後日談(?)。

ハリスさんが亡くなった次の日の朝、雨が止んだのでできるだけ堅い地盤を見つけて、ナイフと大鎌でせつせと穴を掘り、大鎌とともに埋葬しました。

この大陸、少なくとも王国では土葬ということがわかったので。

墓標には『ハリス 娘ヘイゼルの魂と共に眠る』って掘り込みました。この世界の墓をいまだに見ていないのでどう弔うのがこの世界の普通なのかわからないが。

大鎌はすでに根源もおかしくなっていてすぐにも壊れそうだったので持って帰ろうという気はおきなかった。

その後、ザルモンさんたち冒険者グループと合流し、盗賊に捕まっていた間はどうかだったかの説明と、人形についても聞かれた。確かにフランやハーマンさんたち『空駆ける虎』のメンバーはパステルのことをただの人形だと思っていたからね。

盗賊の理由については、少し同情そうな顔をしたがそれだけだった。シビアナ冒険者をやってるんだし、元々この世界で生まれて生きていけばドライにもなるのだろう。彼らは実際に盗賊の人となりを見ただけじゃないしね。

あ、あと俺の口調が『俺』に変わってることについても驚かれた。「どういう心境の変化だ」ってのと、「お前男だったのか」っての。『空駆ける虎』のフラン以外は知らなかったんだっただな。

そして隣街まで取り返した馬車でたどり着き、盗賊の被害届をだしたあとに、証人として御者を連れ冒険者ギルドへ。荷物がいくつか紛失してしまったので、最初の契約どおりに弁償金をギルドが払う代わりにクランはランクの降格処分や、次の緊急依頼の強制受注を約束させられていた。

今回の輸送は、大鎌を隠して届けるために書類上は高価なものがほとんどなかったの、弁償金もごく小額で済んだそう。

御者に証人となってもらうのは、この世界では武器や道具を破壊して吸収するのがよくあるので、冒険者が盗賊に襲われたふりをして武器を奪い破壊して地面に埋めた、と疑われたらたまらないからだ。

そんなこんなで、王都までは馬車で8日の距離であります。

今の街から次の街までの輸送任務を探して相乗りさせてもらつつもりなので、今はこの街ルーマンで休息中。もちろん情報集めは俺とパステルでしてます。

そうそう、身体のところどころに土色と緑色が混じった人形もといパステル ですが、あの日雨で洞からでられず手持ち無沙汰だったので、【戦乙女 ヴァルキュリエ】を刻んだのだけど、効

果がほんとにやばいです。

元々無尽蔵の体力を生かして狩りを続けていたパステルは、その莫大な根分量も相まってBランクの冒険者ほどの実力が元々あったのだけど、【戦乙女】が加わることでA以上には確実になってるっぽい。

それが証明されたのは4日前、あの約束の日の次の日のこと

人気がない場所にいるからにはもちろん魔獣やゴブリンのような亜人がどこからか沸いてくる。しかもこのあたりにオークの巣があったように、集団で襲い掛かってきた。

それを見て、一応追い返せるかなあ、と思っていたら、【戦乙女】を発動させたパステルが、攻撃にきていた小部隊を瞬く間に一太刀も振るわすこともなく、食らうこともなく、ではなく相手に振らせずらしなかった。殲滅し、そのまま巣ごと全滅させちゃいました。

「気持ち、いい」

これを語るは血の雨を自分で降らせて浴びるパステル談。【人形師】で血を身体の一部として取り込んだため、全体的に紅くなっております。

【戦乙女】怖いな……血が流れるほど強くなるという話だったが、それだけでなく戦闘狂になる効果もあるんじゃないか。

とりあえず、高揚感に身をゆだねているパステルの胸に手を当てて【根源管理】を発動。

パステルの中に新鮮な恩寵技能が浮き沈みをしながら根源に入っていこうと張り付いているイメージを捉える。

ふむ、【精力強化】【媚薬生成】【肉体旨化】【棍棒使い】が種族全体が持っている恩寵のようだ。種族にメスがいないオークの根源は女を求める欲望でいっぱいだった。ちよつと怖かったです。

つか【肉体旨化】って……。『肉が旨み成分を多く含むようになる』。オークは食べたらいいってことか？ たしかに豚っぽい頭してるけど。俺は豚肉はあまり好きじゃないし、魔獣ならともかく亜人を食べるのには抵抗があるのでやめておく。

他に手に入れた個人の恩寵が、【魔獣通じ】【思考強化】【集中力強化】。後ろ二つは頭がいいオークがいたということだろう。

そして低階【魔獣通じ】は『魔獣と心を通じ合わせることができる』とのこと。これで魔獣と気が合えば乗せてもらえるし、熟練度をあげれば【魔獣使い（ビーストテイマー）】になれる。

ちなみになぜオークが魔獣をと思ったのだが、おそらく以前にそのオークが人族で【魔獣通じ】を持った者を殺した時に吸収したんだ

ろう。

根源のそこまで多くないオークでは恩寵の吸収力はそこまで高くないはず　恩寵の吸収性効率については詳しくはわかっていない
なので運がいいやつだ。

朝食は食べられる野草　栄養があるかどうかは【根源管理】で見ると　俺が採取して、人形が【錬金】で作った鍋でスープにしたものと、増水した川に蜘蛛の糸で罫をつくり、【発超音波】で水中にいる生物の感覚を狂わせて魚をゲット。アジみたいな味でおいしかった。

【錬金】はどうも質量保存則か等価交換の法則だか知らないが、何かしらの保存則は働いているようで、鉄の鍋を作るのに同じ量の石や岩が消えた。
結構時間かかったし、できた直後に鍋から熱を発していて鍋が自分の熱で溶けかけた。原子の配列が変わったときに熱がでたのか？
熟練度が上がれば何か変わるかもしれない。
それでもかなりすごいけどね。上位世界では成し遂げられていないことだし。

そして仲間のもとに戻ろうと、川に沿って歩いてみると、リザードマン数人に遭遇。

今日は亜人に縁がある日だな。もっと上流の綺麗なところに巣を作っていて、滅多に出てこないと聞いていたのだが……もしかして増水で流された？　水中の生き物のくせに。

そんなことを考えていたら、気が立っていたのかこちらに襲い掛かってきた。遠距離からの水を圧縮したものを牽制で飛ばしてくるが、それは牽制用なので流石に俺でも避けれる。その隙に水を潜り近づいてきたリザードマンが何やらとかげっぽい声を発しながら手に持った槍を振るってくる。

『ガキイイン』

しかし【戦乙女】を発動しているパステルがうつとりとした笑顔を湛えながらナイフで刃先を逸らす、どころかそのまま破壊した。ほんと神器化　神器というのは人では作れないようなすごいものの総称とのこと　している気がするよ、上位世界からの持込ナイフ。

何か良い銘はないものか……パステルが使う仕込みナイフだから『白隠』にしよう。

あ、戦闘終わりました。

リザードマンが3体倒れていて1体は逃げていく。遠距離攻撃が未だにないからでは追撃できない。パステルが蜘蛛の糸を飛ばしても届かないとこまで行かれたらどうしようもないからね。これからの課題だ。

え、魔術を使えって？　未だに俺もパステルも魔力を練るという感覚を理解していないのですよ？

魔獣から恩寵技能を得ようにも、ゴブリンメイジみたいにあまり強くなくて、且つ【体外魔力行使】をもってる魔獣はほとんどいないし、もしこの中央に近いところを出たら、即座に狩られてお上の人間に謙讓される。

ということでは王都に着いたら魔術の師匠を探してみるつもりだ。全くもって魔術が使えない人族は珍しいので、世俗とあまり係わり合いになってない魔術師がいたら良いのだが。

さて、リザードマンの恩寵やステータスを人形が吸収し終わったよ
うなので、次は俺がもらいましょう。

快感を感じている女の子の胸に手を当てる、ってエロいな。パステルが人形ボディでなければ役得なのだが。

得たのは【魚鱗生成】 【水泳】 【水中呼吸】 【槍使い】。三匹のだしこんなものだろう。

【魚鱗生成】は防御時には便利かな？ 攻撃された箇所だけ魚鱗化させれば。

【水泳】はカナヅチの俺には念願のスキル！ だが低階のアクティ
ブなので使用できず。

その代わりとっては何だが、【水中呼吸】は中階パッシブなので使えます。風呂でおぼれる心配がなくなるね。この国に風呂はないけど。

そして仲間の下にたどり着く道程の最後に出てきたのは、タイミン
グを計ったかのようにラスボス級。
ジャイアントワームだ。

全長は25mほどで芋虫のような形をしているが、身体の直径とほ
ぼ同じ大きさの口からは、堅い地面を掘り進むことができる巨大な
牙伸びている。

本来は人族を積極的に襲うことはないが、この度の大雨で地盤がゆ

るみでてきたのだらう。こちらに攻撃の意思を向けているのは寝不足でイライラしているからかもしれない。

「パステル、やれ」

先手必勝だ。こちらに殺気を向けている相手に配慮などしなくてはいいだらう。

動物をみだりに殺生してはいけませんという倫理観は、この世界に来てそうそうに取っ払われましたよ？ 俺の場合は直接手を下していないから、いまいち実感が無いというのも大きそうだがね。

『グアアアア！』

あちらさんもこちらの攻撃の意図を悟って、口を開き牙を輝かせる。既にパステルはその小さな身体からは考えられない速度でジャイアントワームの胴体部分に近づき、ナイフ『白隠』で銀光を閃かせる。ジャイアントワームは首を上げたまま悲鳴を発し、胴体部分を動かしてパステルを押しつぶそうとするが、パステルはすでに反対側に飛んで白隠で切り裂く。

無駄を悟ったのか今度は首を下げ、パステルを牙で突き刺さんとする。しかしそれが狙いだ。

口を大きく開けたところを、パステルは前転して口のなかに入り込む。突然の愚行としか思えない行動 自分から餌になりしてきた

によつて、ワームの思考に一瞬の空白ができる。その隙にパステルの白隠が口の中で舞う。

堅い外殻を捨て内側からの破壊を試みたのだ。小さく、少々の酸では溶けない身体を持つがゆえの戦術。逆に【強酸生成】で口の中から器官を溶かしていく。

その後もしばらく暴れていたジャイアントワームの頭頂部から脳漿とともに白隠が突き出て戦闘の終わりを告げた。

体液と血液でベトベトになっていたパステルだが、血は【吸血】や【人形師】で生命力に変換したり身体の一部とした。体液はすぐ傍に川があるので問題ない。少し壊れた部分は【人形師】で材料を補填し、【再生】によって整える。

ここまですが戦闘後の流れだ。

俺と違ってパステルは俺が与えた全ての恩寵技能を使えるので、使い方も堂に入っている。最初は人形が【人形師】を使えるのに違和感をもったものだが。

さてと、またパステルに手をあてて吸収。

これからやることにはいくら力があっても足りないくらいなのだ。

金も人脈もない者が虐げられる人々を救おうと考えているのだから。

ちなみに【錬金】を使わせての金貨銀貨造りはかなり難しい、いや効率が悪すぎる。熟練度があがればまた変わるのかもしれないが……。

そこの石ころから金に変えるのが大変なのはわかりやすいが、細かい作業　つまりは彫金　には向いていない。建造物など大雑把に作る時には重宝しそうなので、熟練度をあげておくようにパステルに指示する。

新たに得たのは【鑑定 鉱石】【鑑定 宝石】【鉱脈探索】。

鑑定系二種は【根源管理】がある俺には無用の長物だが、【鉱脈探

【索】は相当有益なものになるだろう。

とことごと歩いてくるパステル。未だに恩寵を刻まれた高揚感から顔が赤い。敵を殺したときと、私が回収して刻む時、一度の恩寵で二度おいしい！ のかもしれない。

「ジャイアントワーム、A、です。」

まじで！？

とうとう才能ある人の到着点であるAランクまで来てしまいましたかパステルさん。

主の俺はいまだに戦闘力Eですけどねー。

実際肉体疲労が人間よりはるかに少なく、自由に改造できる人形は人族をはるかに越えていくだろう。ということはこの世界では人族よりも無生物が人格もったほうが強いってことか。

やはり上位世界でもそうだったが、人族は身体的にもろいなあ。上では科学力、この世界では繁殖力で栄えているけども。

俺も身体を人外化してみるか？

これからやろうとすることが数年で終わるとは思っていないし、維持するとなれば数十年かかるだろう。その間に老いて能力が下がるのは少し拙い。不安定な組織を作ろうとしているのだから。

それに上位世界での俺の専攻は生物工学、バイオテクノロジーで、人側に偏っていたので、人類究極の夢である不老不死には大いに興

味がある。

分野的には生命医学とでも言うべきで、大学受験の時に医学部か理学部かで多いに悩んだ。結局研究に入れるのが早い理学部に進むことにしたが。

まあ興味があつて将来研究してみたいというだけで、所詮二回生まで終えた程度の知識。うちの大学では二年で学部を決め、三年から進む。しかないので、科学的なアプローチでの不老不死は達成できそうもないが。実際に科学的な研究をできるようになるには、実験道具の作成から始まるので十年は最低でもかかるだろうし、上位世界の最先端レベルの研究ができるようになるまで、どれだけの時をかければいいのか想像もつかない。ただの大学三回生が一から科学者を育てなければならぬのだ。

そう考えると不老化はそのうちやっておきたい。この世界には魔粒子が存在し、物理法則を超えた恩寵技能があるファンタジー世界だ。上位世界よりはやりようがあるんじゃないかと思っている。

そうこうしてるうちに、十日間のルーマン滞在も終わり、王都への旅路が始まったのです。

今乗っている馬車　馬は鞍もないので乗れなかった　はレンタ
ルしたもの。レンタカーみたいなものですね。

王都につくと同じ系列の商人に貸し出され、荷物を載せて帰ってくるのだとか。

ちなみにジャイアントワーム討伐後に持ち帰れた極少ない素材
牙や腹にたまっていた宝石　で金貨3枚になりました。素材に3
00万つて……。今までちょこちょこ稼いだのがばかばかしく感じ
ます。

さて、なぜいきなり丁寧な物腰になっているのかと申しますと、
御者が超絶に美少女なんですよ！　しかも17歳くらいの！

服は薄い桃色のノースリーブドレスで汚れないように下を縛ってい
て、腕には肘まで覆い隠すロンググローブ、頭には貴族の婦人が被
るような帽子。

ドレスの上からでもスタイルの良さが伺え、帽子の下の髪は透き通
った純白。肝心の顔は人形のような完璧な配置、幼さが少し残るが、
計算されて作られたとしかいえない美貌！　紅い瞳も妖しい魅力を
感じさせ、少女っぽさと成熟した身体と瞳による大人らしさの奇跡
のアンバランス！

この美少女は誰なんでしょうか!? ぜひお近づきになりたいものです。

「ご主人様、なにをやって、おられるので。」

ちよつと現実逃避に走ってました。もう王都に向けて馬車が出てから数時間。

しかし未だに目の前の光景になれません。

そう、美少女の御者はパステルだったのです。

十日間の滞在中、姿を見ない日が多く、「とうとう親からの独り立ちがあさびしいな」なんて思っていたら、出発の日の朝早くに純白の美少女が現れて、

「ご主人様、お待たせ、しました。」

と言ってドレスの端をちよこんともってあいさつをしてきたのです。その恥らうような笑顔がまぶしくてまぶしくて、こんな良い子にご主人様と呼ばせているうらやま、もとい鬼畜な野郎はこのどいつだ! と柄にもなく興奮してしまって、

いたずらを成功させたような笑顔を徐々に慌てた顔にシフトさせた美少女 もといパステルによって事情を説明されたのです。

まさか自力でボディを全体改造するとは。

たしかに身体体温は人よりいささか冷たいし、間接部分は未だに不自然さが残る。球体間接が入っているからだ。けど、顔についてはまんまそのまま人間です。

顔は人形の顔の表面を使って、人間っぽく調整したとのこと。体温を感じるし、口の中は人間のをほぼ再現。まばたきもします。まだ食道と胃がなかったり、するそうだけどこれで十分な気がします。

「性交は、まだできま、せん」と、普段の口調で区切って喋っているのか、羞恥心で言葉が区切れてしまっているのか。パステルの言。これを聞いた時には悶絶ですよ。『まだ』っていうところがかわいすぎます。

もうこの子はただの人形じゃない、一個の人格をもった生き物なのだし、抱いてもいいよね？
この世界じゃ児童ポルノとか関係ないし。20歳と17歳じゃむしろ妥当でしょう。

それに俺の外見は呪いによる身長縮小で16歳くらいに見えるそうですし、よりノーマルになります。

ちなみに作成方法を聞いたらかなりスプラッタでした。
自分がどこまで切って根源がばらけないかを調べて、核となる部分
を手探りで推定したって……。
生身の身体じゃ絶対できないな。

さすがファンタジー。

俺の不老化もここなら実現できるかもしれない。
という希望がもてたのだった。

11話 純白の戦乙女と純白の美少女（後書き）

次回からやっ和王都だー

とうとうメインヒロインの一人が出てきます。多分。

今までは男がちょっと多かったかな。

12話 王都と雷少女

エウリーペ王国の王都スウィザード。

王城を中心として城砦都市で、遠くからでも見上げるほどの城門をくぐると、外の街道よりも数倍に広い、中世ヨーロッパレベルの文化の割りには格段に整備されたといえる大通りが、はるか遠くに見える王城までまっすぐ通っている。

砦を突破されて壁の中に入られると、簡単に王城までたどりつけてしまふ構造なのは、常勝を謳う王国の驕りなのか、余程自信があるのか。

実際に王国から攻め込むことがあっても攻め込まれることは少なく、主要道路にはいくつもの砦があるので、常に内部で割れている帝国や、砂漠地帯にあるがゆえに貧しくて、侵攻などする余裕がなく、自分たちの聖地を唯一無二の聖域として宗教で心を保っているアイスル教国では攻めてこれないだろう。

正直、エウリーペ王国に攻め入るメリットも少ないのだ。長年の軍功を裏打ちする、恩寵技能を多く持つ精鋭部隊は厄介な相手だし、撃破しても手に入るのは痩せた土地と先住民族の反発くらいなのだから。

さて、人通りも活発で明るい、名実ともに王国の一番の都市であるスウィザードだが、やはり裏通りは別世界だった。

王都に入って宿をとり、少し探索をしようと思えば外に出ると、パス

テルが【蝙蝠聴覚】で悲鳴を感じ取り、その方向に向かおうと裏路地にでて、予想通り嫌な光景に出くわした。
14くらいに見える少女　汚い身なりをしている　　が後ろ向きに首輪をはめられそうになっていたところだったのだ。

「パステルッ！」

俺が指示を出すと同時に一瞬で加速し膝蹴りを男に浴びせ飛ばすパステル。

そのまま泡をふく男を組み敷く。

「大丈夫か？」

首輪を拾いながら少女に手を伸ばす。

「あ、あ、いやっ！　それいやっ！」

悲鳴交じりに拒絶される。ショックだ。どうやら右手にもった首輪を恐れているらしい。

【根源管理】でみると【屈従】という低階スキルが刻まれていた。効果は『つけたものの命令に逆らえなくなる』というもので、首輪という形を考えても奴隷にするためのものなのだろう。

ちなみに【屈従】【従属】【隷属】の順で効果が強くなっていく。

「いや、君を奴隷にするつもりはないよ。怖いなら壊しちゃおうか。」

と言いつつ、パステルに投げると右手を男から離し、出てきた仕込ナイフ『白隠』で一閃、切り裂いた。これで首輪は壊れると共にパステルに恩寵が吸収された。

恐怖の象徴がなくなったことで少女はぺたんと路地に座り込んでしまふ。

俺は次に男に目を向け近づき、ほほを叩いて無理やり起こす。

「ひっ、あんたたちなにもんだ。」

「こつちが聞きたい。状況を教えれば命は助けてやる。」

できるだけ恐ろしく見えるように凄んでみるが、こちらの姿を見て侮った表情をしたので首元にナイフをつきつける。

さすがにそうされては話さずにはいられず、事情を聞いた。

そこに座り込んでいる少女はなんとということはない、見目が整っていて、且つ恩寵を使った瞬間を目撃されて目をつけられ狙われたとのこと。

親類縁者が貧乏な兄だけだったために、兄をさくつと殺した後、捕まえようとした恩寵を使って逃げられてしまい、仕方なく高価な【屈従】が刻まれた首輪をもって追いかけた。予想外に逃げ続けられるが、少女が疲れたところを人海戦術で追い詰めたところに俺たちが通りがかった。

よくもまあ……一応王国民に対して軽く殺人なんてできるものだな。それほど貪欲に恩寵を求めているのか。

【根源管理】で見ると、戦闘系では【敏捷強化】【魔力性質変換 雷】をもっていた。

たしかにこれは狙われるだろうな、と思う。

両方低階とはいえ、後者のは『魔力に雷の性質が付与される』という効果のパッシブスキル。

【体外魔力行使 火】がついた武器がかなり高かったことから、魔術系は価値があるのだろう。……ウクラインの街で見た魔術の破格さを直接目撃しているので理解できる。

魔術師が必ずといっていいほど国に仕えるのは、待遇がいいという

他にも身を守ってもらおうというのが大きいんだろう。そうしないとこの少女のように捕まってしまう。

この少女も早めに自分の恩寵の価値を理解して先に王国や帝国に売り込んでいれば、安定した生活が保障されただろうに。

もちろん不快だが、いちいちこの程度の商人を誅していれば、この街だけでもかなりの数を屠らなくてはならなくなってしまふので、正直扱いに困る。

買ってもいいけど、金はあまりないし、ここの商人たちに目をつけられてしまうと、これから諜報活動をするうえで障害となってくるだろうからなあ。それはまずい。

かといって得たばかりのスキル【屈従】は実際にはどれほどの効果があるのか、持続時間や記憶の保持があるかどうかすらわからないし、ましてや奴隷の首輪に恐れていた少女の前で使うのは避けたい。といってもあまりじっとしていると、他の場所に人海戦術していたやつが来てしまふかもしれない。荒事が得意なやつだと対処に時間がかかりまた援軍が現れてと、悪循環になりかねない。

『ヤク』

砂場にスコップが落ちるような軽い音が聞こえ、男は一瞬口から血を吐いた後心臓へ刺された白隠が致命傷となつて死んだ

結局殺させることにした。こいつらはこの少女が殺されることが前提だと知った上で奴隷にしようとしたのだから、殺されても文句は言えないだろう。

ジュツという音を立てながら【強酸生成】でできた酸で溶かしていく。その間に土を掘り穴をあける。半分ほどとけた死体を埋めて土をかけ、【錬金】によって路地のこの辺りを堅い土で舗装させる。

これで見つからないだろうし、血も消せた。もし見つかったも半分溶けていれば身元もわからないだろう。

これほどためらいもなく一人の人生を終わらせる命令を下せたのは、この奴隷商人　弱者が奴隷になることは当たり前で、恩寵を得ているのなら尚更だと考えている奴ら　にハリスさんに聞いたことを思い出したからかもしれない。

この腐った風潮をどうにかできないものか。そういうのはこの世界に最初からいる人じゃ難しいのだろう、それを当然だと、自然界の法則だとあきらめてしまうから。
アンダーワールドには新しい風が必要なのだ。

この後少女を解放したが、とことと俺らの後ろをついてくるので、泊まる宿まで連れて行った。

今は宿の前だ。パステルには服を買いに行かせている。汚い身なりそのままでは宿にいれてもらえないだろうし、初日に目をつけられるなんてことはしたくないのだ。

やがてパステルが帰ってきて、着替えさせてから宿の部屋に入る。王都だからか宿泊料が少し高い。

パステルが紅茶を入れて俺と少女に渡してくれる。

あまり質のいいものはないが、この世界に着てから毎日お茶を入れてくれていたパステルが入れると、大抵おいしいものになる。

「君の名前は？」
落ち着いた頃を見計らって聞いてみる。そろそろおびえずに反応してくれるとありがたいのだが。こちらの精神的にも。

「アイリス、です。」
返事をしてくれたアイリスちゃん。身なりを整え顔を洗ったので先ほどよりも可憐さが増して見える。髪は紫色で瞳は藍色、髪は肩口まで伸びるショートカットで、耳元の髪が後ろよりも長い。スタイル的には……うん、未成熟。14歳だから仕方ないのかもしれないけど。貧困層らしく全体的に肉がついていない。

この少女の待遇をどうするかが問題だ。一度商人に目をつけられているから王都内を自由に歩くことはできないが、俺とパステルはこれからこの街に一ヶ月ほどは滞在する予定なのだ。その間宿から一歩もでないなど耐えられないだろう。

しかし今更身寄りのないこの子をポイッと放り出すわけにもいかない。人情的に。

どうせパステルに聞いても「ご主人、様に従う、です」って言われるだけだ。パステルは俺以外には合理的な性格をしているので、どちらかというのと捨てることに賛成だろうな。さっきから俺と少女を冷たい眼で見ていることから伺える。というかその瞳はきつすぎませんかね、威嚇みたいになっちゃってますよアイリスちゃん震えてるって！

結果、とりあえず匿うことに。外出するときには俺かパステルということとローブを深くかぶることを約束させる。

代わりに魔術を見せてもらうことにした。彼女は魔術は日常魔術程

度しか使えないそうだが、俺たちが知りたいたいのはその以前の感覚のことなのだ。【魔力性質変換 雷】の能力を見させてもらいたいという打算もある。

ということでも早速【魔力性質変換】を見せてもらう。

できるだけ出力を控える 外に彼女の青い魔力光が漏れると厄介だ ように言い含めて発動してもらう。そうすると彼女の周辺の空気が震えたと同時にバチバチと紫電を発する。彼女がやるということからタイムラグはほぼ0。それだけで放電を起こすような電圧を生じさせるとは。

【魔力性質変換 雷】はその名の通り魔力に雷の性質を与えているわけだから、実際に雷を起こしているわけではないんだろうけど。

そして彼女の魔術講義が始まる 知識については知っているのだが、彼女が嬉しそうに先生役をやるのでのってみたい ことになった。

「だからこう！　ぎゅーってしてぱつと放つ感じですよ！」
信じられるか？　これで、アイリスちゃんも魔粒子を集めて魔力を
練り、一気に放つという基礎を説明してるつもりなんだぜ。

簡潔に魔術行使の講義を受けてから、実践に移ったもとい移らされ
た。よほど先生役が　誰かに頼られるというのが　楽しかった
ようだ。

しかし今となつては、楽しいな雰囲気は俺たちとアイリスちゃん、
双方の表情にはなかった。

予想できていたことではあったが、やはり感覚的すぎるのだ彼女た
ちの魔術は。

こちらら本で理論をしても一ヶ月間何も進歩が得られなかったの
である。小娘一人に手伝ってもらっても感覚の糸口さえ掴めないの
は当然といえよう。

やはり金をためて魔術系の恩寵彫金武器を買って、魔力という俺た
ちには未知の感覚を、スキルを行使することで荒業で得てしまっし
かなさそうだ。

今日はここまでとする。

夕飯を追加料金をはらって部屋まで二人分　俺とアイリスちゃん
の分だ　運んでもらい、食べた後は身体をお湯で塗らしたタオル
で拭いて寝ることにした。

俺たちと話すことでだいぶましになり、一時的に他のことに思考を
占有させて、兄が殺されたことも奴隷にされかけた経験も忘れてい
るが、整理することは必要だろう。
少なくとも数日はこの話題に触れるつもりはない。

「おやすみ、なさいませ」

パステルの声を背後から聞きながらベッドに入る。まがりなりにも
王都の宿だ、安宿のわりに清潔だし調度品も悪いものではない。

これからパステルは黒いローブを着て情報収集に行ってくれるのだ。
身体が大きくなったので小さいところにははいりこめなくなるが、
どうどうと夜の街を歩くことができる。

あとは信頼する従者に任せて、ただの人間な俺は眠るとしよう。

おやすみなさい。

ブラックアウトとともに王都の夜は更けていく。

12話 王都と雷少女（後書き）

予想外に進まなかったです。

はやく物語を加速したい。

13話 情報集めな一日と変わり種魔術師

王都では派閥争いをみる。

今日もまだ早朝だというのに、アークライト王朝の精鋭部隊『聖王の栄光』というまんまな名前の部隊が王城から出て、周りをきらびやかな服装をした王城専属の音楽隊が行進を取り囲みながら、国家アークライト王朝ようのもらしいや、この世界の行進曲を奏で、『聖王の栄光』の門出を称えながら、周囲の国民や他の派閥の貴族に対して示威している。

王城からはかなり離れた宿から出た時にはその音が聞こえていたのだから、どれほどの迷惑となっているのだろうか。

まあこの世界に騒音関連の法律などあるわけがなく 普通の法律も杜撰なものだった、文句を言うものなら平民なら消され、貴族なら爪弾きにあっってしまうことから迷惑だと思っている人間は部屋で我慢するのだろうか。

実際に表に出てきている人間はみんな尊敬やあこがれ、そして自身のことであるかのように誇っている。英雄や有名人が同郷である時に自分のことであるかのように誇りに感じることに 同一視

は、上位世界でもよくあることだ。オリンピックなどが良い例だろう。もちろんそれを心が弱い、自分に自信がないなどといって批

判する気はないが。

さて、表通りには示威しあっている軍に、宮廷魔術氏たち。

彼らは仕立てのいい、傍目には実用性よりも修飾に重きを置いた服を着ているように見える。が実際には上着やその下に着ているものに恩寵 【防御強化】、【魔力不可侵】 【守護】 が刻まれているものが多い。持っている武器にも有用な 【切断強化】や【不可壊】など 恩寵が彫金されている。さすが精鋭部隊が揃う王城、この王国の富が集う場所。日々繰り広げられる派閥闘争の中で得た賄賂や恩寵彫金武器を存分に下賜されているのだろう。本当にきらびやかだ。

逆に、光に対しての間、裏通りはウクラインやルーマンよりもはるかにひどい。

一週間前の裏路地で目撃して少女アイリスを保護したのが昔に思えるほど、同じような光景が散見された。奴隷狩りはまだ目立たないところでやっているが、奴隷の売買は普通にやっている。この国では奴隷の売買は合法だから当たり前前の光景なのだろうが……慣れないう者、すなわち俺には人間や亜人が商品として店先に首輪と手錠をされて繋がれているのにひどい違和感がある。嫌悪感の前に先に違和感が。

あとこの王都でやっと、初めて亜人を見た。ああ、亜人といっても、知能が低いゴブリンやコボルトとは別な。人族じゃない時点で『亜人』とひとくくりになされているから。

俺が見たのは奴隷オークションに行って見た時だ。入場料だけでもかなり高くて買う金なんて残らなかったので買われていくのを見送

るだけだったが。奴隷オークシヨンは不定期に行われている。奴隷売買は合法だが、大規模なオークシヨンはトラブルも多いことから、地下で数商人合同で行われる。合法といっても周りからの印象が悪いというのも大きいだろう。

オークシヨンもたけなわとなった時、本日のメインとして司会が紹介したのが獣人族の娘だ。

兎耳を白い髪の上からびよこんと立てて、ほとんど裸のような格好をしていて見える尻からは白くて短いもこもこした尻尾が見える。

司会によると、この王国からはだいたいなくなり、北の方に村が点在する程度となった珍しい獣人族、兎族だそうだ。戦闘力は獣人にしては低いが、逃げ足は人族より遥かに早い。また大きな特徴としては雌しかおらず、他の種族の精液を使ってしか繁殖できない。子供は全て兎族となる。このことから種族が増えることがなかなか難しいので少数派となっているし、どこからか男を調達する必要がある。るので周りと孤絶した場所に隠れ住むこともできないのだ。

大抵の獣人は人族と同じく短命種で寿命は60年くらいだが、人族よりも若い時間が長いので美しさもそうそう衰えない。また魔術を使える個体が人族と比べて圧倒的に少ないことから、物理的な拘束をされて、性奴隷として扱われるか、労働奴隷として扱われることが多い。

兎族の少女も十中八九性奴隷目的で買われたのだろう。

この一週間は王都の地理を覚えることと情報収集に専念した。

パステルの【電心】の有効距離が1キロに伸びたので情報交換もやりやすくなってきている。

ちなみに俺は【電心】で受信することはできるが、低階クラスなためアクティブに発動しなければならぬこちらから言葉を送ることができない。受けるだけの一方通行だ。

それを解決するために、最近「お兄さん」と俺のことを呼んでくれている。兄を失った悲しみを俺を兄としてみる依存心に変えて精神を安定させているのだろう。紫髪の少女アイリスに【恩寵刻印】で【電心】を刻むことにした。

いつもパステルにやるように何も言わずに徐にアイリスの胸あたりに手を置いてしまつてから「しまった。男への恐怖が蘇つてしまうだろうか」と考えて肩に手をあてて【恩寵刻印】を使うことにしたが、しかし最初から常に胸に手を当ててやってきた。パステルも最初は人形でつるべただったし気にしていなかった。ために、肩ではうまく根源に刻むイメージができないのだ。これは偏に俺が心は身体を中心の心臓あたりにあるという非科学的印象を抱いているからであろう。

結局事情を説明して胸に手を当ててやらせてもらった。不可抗力だ。嫌がってないようだからいいだろう。

顔を真っ赤にして照れていたのはかわいいと思うが、いくらなんでも会って一週間の他人の男に心を開きすぎではないだろうか。いくら兄代わりとして見てるといっても、依存しすぎでよくない傾向だ。

さて、情報収集は朝から始まる。

ほとんどの朝は宿で食事をとらずに敢えて外に出、大通りで朝食を買いながら店の人と会話をする。一般市民だからこそ王都での噂についてもただの話のネタとして気軽に喋ってしまう。噂の中には真相がもれ出ているものや、外れていても煙の元には何らかの火種が転がっているもんだ。

その後昼までは王都の冒険者ギルド 王城から離れたところにある。さすがに王都では、他国に本部がある冒険者ギルドの扱いがよくない によって簡単な依頼を受けるか、知り合った受付や職員と世間話をする。日常の話でも信頼関係を築くことができるし、俺は今ではCランクの冒険者認定をうけ、ギルド推奨の依頼を受けているのである程度有難がれているだろう。まあ俺の実力はEランクにも満たないが人形がいろいろと集めてきてくれるので。ただ俺の見た目が160cmとこの世界の男性平均より15cmも低く、女性平均と同じくらいなので、同じ冒険者にはどうしてもなめられてまともに会話してくれないか、下卑た視線を向けるだけだ。その場合は灰色ローブを深く被りなおしてさっさと去る。

昼食を食べる 大体ここでパステルとアイリスちゃんと合流
時に午後の予定を話し会う。パステルと依頼にいつてアイリスちゃんを置いていくこともあれば、みんな街の店 王都だから数が

すごい！　をひやかして周ったり、王国一の蔵書量を誇る国営図書館に行ったりだ。やはり紙は羊皮紙くらいしかないらしく、一冊一冊が電話帳のように厚い。また、現代の紙になれている俺には獣くさい臭いが一番つらかった。

禁書は見られないが、そうでなくても王国の様々な場所で書かれた本や、帝国や教国で書かれた本もあった。……重要そうな本を奪ってきてる臭いがプンプンするぜ。

図書館では極東の情報はほとんど見られない。言葉が大陸と違うのと、海を越えた島国であり固有の魔獣である妖怪が跋扈しているらしいことくらいだ。

一番図書館で知りたい情報はこの世界の農業や建築物の知識だ。やはり全体的に効率が悪いが、魔術や恩寵技能のおかげでめちゃくちゃなやり方でなんとかなっていることもあり、これが科学が進歩しない理由かと思う。例えば、王城も地下を走る龍脈　魔粒子が自然に魔力に練られている　の魔力を利用して地属性と金属性の魔術『固定化』によって無理やり支えているらしい。

どうやってこの世界で高さ50mもある城を建てられるのか、疑問だったのだけど、力技かあ。

ドワーフの夢技術か！？　なんて思ってた自分が恥ずかしい。

そして一番の収穫は王国西海岸から海峡を越えた先に無人島があるというのを古い文献で発見したことだ。人が住んでおらず魔獣が跋扈していた上に土地が痩せ、鉱山も発見できなかったために放置されたという記録が200年ほど前にある。土地はいくらでも余っているし、200年前は暗黒大陸を発見した頃だったのですぐに情報が埋もれてしまったのだろう。

そこなら王国も手を出しづらいし出す利点も少ない。

俺とパステルで恩寵技能を十全に行使すれば、最低限の住宅環境をそろえることもできるだろう。農業に関しては「豊穰の女神の加護

「ラウニプロテ」を発動すればいいのだし。そしてゆくゆくは虐げられる人々の逃げ場になれればいいのだが。

ちなみに【豊穡の女神の加護】はアクティブでした。ハリスさんの娘ヘイゼルは常に発動してみたいけど……もしかしてこの世界の住人は、恩寵にアクティブなものとパッシブなものがあるってことに気づいてないのだろうか。恩寵はわかっていないことが多いので、そういうものとして感覚的に捉えてる限り、ありえるかもしれない。

こうして閉館時間まで図書館にいて帰り、夕飯は宿の部屋でとる。得た情報をまとめたり、アイリスちゃんに授業をしているのだ。パステルには地上の科学知識を主に教えているが、アイリスにはまずこの世界レベルの教養を教えている。計算や文字などだ。文字がしっかり読めないと図書館でも絵本や図鑑の絵しか楽しめない。

そして夜9時くらいには蠟燭の火を消して、就寝。二人部屋なのでベッドが二つだが、パステルは大抵夜中も姿を隠しながら【無音】による隠密行動。【犬嗅覚】、【初超音波】と【蝙蝠聴覚】の合わせ技により暗い闇でも人に会わずに動ける。情報収集をしてもらうので、俺とアイリスちゃんですつで足りる。

まあ朝になる前に俺のベッドに忍び込んでくるのだが……夜にうなされることのあるのを知っているので特に咎めることはない。むしろ妹のような歳の少女が信頼を寄せてくれるのだから役得というものだろう。紫のさらさらとしたショートカットに包まれた寝顔は庇護欲を掻き立てられる。この世界には男の朝の生理現象がないようなのでこちらが恥ずかしがることもない。

こうして一日が終わり、次の日が始まる。

ある日、魔獣討伐の依頼をクリアしたあと冒険者ギルドに来ると、冒険者ギルドに所属の魔術師が王都に帰ってきたらしいという話を聞いた。

これはチャンスだろう。

国に仕えていない魔術師がまれで、いても存在を隠して人が来ないところで少数の弟子をとり研究にふけっているのがデフォルトなのに、その魔術師は冒険者ギルドに所属しているという。

人とあまり話さないシャイな性格をしているらしいが、害意を見せなければ話くらいは聞いてくれるだろう。魔術のことも教えてもらえるかもしれない。

住んでいる場所を聞いて向かってみることにした。

王都スウィザードは王国全体と同じように、東西に大きな通り

『王道』というらしい　　が伸びていて、その中央に絢爛華美な修飾がされている城がある。

東西の通りのいくつもの場所から、北と南に大小様々な通りができていて、大きな道路によって円形の王都をブロックに分けている。

まずは王城から北東はハーヴェイ王朝の派閥の貴族が多く住む区画、逆に北西はアークライト王朝の手のものの区画。その他大商人などの裕福な家も『王道』の北側にあり、豪邸が並んでいる。高級娼館も『王道』の北側だ。

『王道』から少し南にいった先には『王道』に面していないながらも立地がよく、大きな店が所せましと密集している。

小さな店や貧困街があるのは南東側で、南西には一般市民の閑静な住宅街が広がっている。

そして今回訪問したギルド所属の魔術師の家は南西の中でも目立た

ない家だった。この世界で一般的な石づくりの家だ。

「ごめんくださーい！」

ドアを叩いても反応がないので声を張り上げる。

と、中からドタドタした音が聞こえ、

「どなたですか？」

と少し警戒した声で尋ねられる。

シャイな性格をしていると言われてたからこの態度にも納得できる。そもそもアポをとっていない見知らぬ人が来た時点で警戒しないほうが珍しいだろう。

「あの、ギルドに所属している魔術師の方ですよ？ 私たち冒険者ギルドの新しいメンバーでして、あいさつをしたいと思ひまして。」

「……………どうぞ。」

覗き穴でこちらの姿を視認した後、少し警戒を解いた様子でドアを開けてくれる。

中に入れてもらいすぐあったリビングにつく。

すぐにお茶を入れてくれようとするが、いきなり悪いのでパステルも手伝った。俺は持ってきていたお茶請けをテーブルに置く。

「初めまして新人さん、私レンっていいます。」
先ほどのドアでの警戒と打って変わって友好的なレンさん。アイボリー色のローブを被っているために顔は見えないが、薄緑の長い髪が前に出てきている。身長は俺と同じくらいだ。年齢はよくわからない。

「私はクロノ。こちらがパステルです。」

「よろしく、お願いしま、す。」

こちらも笑顔で自己紹介。敬語を使うときには口調が戻ってしまうことが多い。

相手は家の中でローブを被ったままだが、俺もそうすることが多いので特段気にならない。視線を狭くするのはある意味安心感がある。

「ご用件は？ あいさつだけではないでしょう？」

ほわほわした雰囲気似合わず、意外と鋭い人なのかもしれない。

「はい。実は魔術の使い方を教えてほしくて……。」

「どうしてです？ 魔術系の恩寵を持っているのですか？」

「いえ、実は私たちは極東の生まれでして、日常魔術すらも習ったことがなく、魔力を練るといのがよくわからないのです。それで専門家に教えて頂きたいと思ひまして。」

その言葉に目を丸くするレンさん。

彼女は魔術系の恩寵をもっていなければ、日常魔術以外は使い物にならないのにどうして知りたいのだろう、という意味で聞いてきたのに、俺たちは日常魔術どころか子供でもできる魔力を練れないというのだから驚くのも無理はないだろう。

一応事情を説明　困ったときの極東押し。なぜか人族と亜人や妖怪の関係やらについて喰いつかれて焦った　するとわかってくれたみたいだ。
軽くいいなら同業のよしみで教えてくれるとのこと。

レンさんは今日は帰ってきたばかりでギルドへの報告や物資の買い替えなど、やることが多いそうなので、早々にお暇させていただく。

また二日後に訪ねることになった。

14話 魔術

二日後の約束の日。

楽しみだったので行く準備を整えたあと、しがみついてくるアイリスちゃんを振り払って一時間ほど早く宿をでた。

レンさんの家の前にたどり着き、ちょっと早すぎたかと反省していると、

『ドガアーン！』

という音が家の中から聞こえた。

何事かと想い、すでに見つけていた鍵が開いた窓から入り、パステルと共に駆けつける。

「けほっ、けほっ。どうしてこんな目に……もうこんなところにいたくないよお。それにこんな実験死ねって言ってるようなもん、じゃないですかあ。」

もくもくと黒い煙と煤で汚れた部屋に踏み入れた俺たちを迎えたのは、俺と同じような頭をすっぽり隠すローブが一部やぶれて肌が露

出したレンさんの姿だった。最初から涙目で、独り言をぶつぶつと言っている。

「え、あ、きやつ!」

何と声をかけていいか迷っていると、レンさんがこちらに気づき短い悲鳴をあげる。

「すみません勝手に入って。なにやら大きな音が聞こえたので無事かと思ひまして……。」

「あ、そうでしたか。はい、えと、一応だいじょぶでしゅ。」
最後に噛んで顔を真っ赤にするレンさん。

「魔力の練り方についてでしたよね。ちょっと待ってくださいね今片付けをしますから。」
そういつて他の部屋に通される俺とパステル。レンさんは部屋の掃除をするようだ。

数分後、急いでくれたのか、息を少し荒げたレンさんがいつもきているローブではなく、その豊満な身体を強調する白いシャツと青いハーフパンツをはいて現れた。

……いくら部屋とはいえ、楽な格好すぎないだろうか。異性もいるというのに。

髪は長めで少し癖が入っている薄い緑色、瞳は濃いめの緑だ。顔は相当整って　パステルほどじゃないが　美人といえる造形をしている。そしてその耳が少し尖っているのを見て理解した。

エルフだから美形なのも当たり前か、と。

この世界のエルフを見たのは初めてなのだが、他のファンタジー世界の例に漏れず美形なのだろうと思っていたので驚きは少なかった。種族的に美女美男子だらけってのには懂れてしまう。

「お待たせしました。魔術の基礎知識はあるんでしたよね？」

ならばまずは魔力に包まれて実際に感じ取ってもらいます。目をつぶって五感を働かせないようにしてリラックスしてください。」

言われた通りに視界をなくし全身の筋肉の緊張をとく。毎日パステルにマッサージしてもらっていても、日々気を張って生活していると凝る筋肉がある。

数分ほど薄い緑に輝く魔力をあててくれていたらしい。

魔力があたっている肌と脳がチリチリする感覚を覚える。脳までチリチリしているのは、肌にあたっているのを感じるのが触覚ではないからだろう。

そのあと、魔粒子を集めて魔力を練ろうとする。

が、やはりだめだった。まず魔粒子というものが存在するといつてもどついうものか近くできないのだから、それを集めて練る感覚などわからない。

結局この日は、専門家のレンさんによって魔術についての講義をおこなってもらうことにした。

本に書いていないこともあるし、より理解すれば使う一助になるはずだ。

『魔術』

曰く、神が哀れで弱い生命に与えた奇跡の技。

曰く、日常生活に欠かせない技術。

曰く、一方的な虐殺を可能とする持つ者が選ばれるべき物。

発祥は世界ができたと同時に生命が生まれた瞬間からあったという。最初は今でいう日常魔術しかおぼつかなかったが、大陸歴1年からの千年単位の積み重ねによって今の殲滅魔法や空間魔法に至った、人類の叡智の結晶。

恩寵技能は神から突然渡される恩恵だが、魔術は最初に神から与えられた点では同じくも、人類の努力によってここまで来たとして、誇りに思う魔術師が多い。

その発展の仕方上、学者の大半は魔術師となっている。

一般に魔術を使うにはいくつかの要素と手順がある。

第一に『魔粒子』。

世界中どこにでも 大気中にも海にも地中にも人体にも 遍く存在し、魔術を使う際に媒介となる世界の最小単位と考えられている粒子。

魔術に使っても消耗されず、形を魔粒子に戻して世界を循環する。魔粒子を放出する特別な樹を『世界樹』と呼び、シークリッド大陸ではアイスル教国の聖地にあるとされる。アイスル教国では『世界樹』を維持するために砂漠での貴重な水を大量に使っている。また、魔粒子を吸収する土地もあり、その周りの土地は枯れ果てるという。

第二に『魔力』。

魔粒子を把握、支配、収束することを『魔力を練る』といい、その状態を自分の『魔力』という。髪と同じく、根源に影響される形で、全ての生物の魔力にはそのもの固有の魔力色が存在する。

第三に『概念』

魔力を使い魔術を発言させるkeyとなるのは、『ある現象が起きるイメージ』であり、イメージを浮かべて魔力にそれを実現させようとすることを『概念を注ぐ』と言う。

以上の三つが最低限必要なものだ。

一般的な魔術の行使の手順は簡単に言えば、
身体の周りに漂う魔粒子を、存在を認識し、支配して自分の魔力

この時点で体外魔力と呼ぶ　とし、概念を注いで魔力を用いて
現象を起こす。

これだけだ。

あとは魔力を練る速さや維持できる距離、そしていかようにして概念を注ぐのを補助するか、だ。

一般人で日常魔術くらいしか習っていないものは、魔力を練れる広さ、つまり魔粒子を支配できる空間が小さい。身体の周りを均等に纏わせると数mmほど、また、たとえば指先からだけだと数cmほどしか魔力として魔粒子を維持できない。

こうなると、攻撃魔術を覚えても接近戦をすることになり、魔術のアドバンテージがだいぶ消えてしまうので、指先数cmでも役に立つ『凝縮』や『光源』、『発火』などの日常魔術だけ覚える。

それも【体外魔力行使】という低階恩寵を持つだけで次元が変わる。このスキルで熟練度を伸ばすと、把握できる魔粒子の量が劇的に変わるために、射程も威力も桁違いのものになる。（【体外魔力行使水】のように後ろに得意な属性がつく。この恩寵をもつ者を殺し

ても自分の生来の属性とあっていないと使えない)

国に仕える魔術師はほぼ全員が【体外魔力行使】をもっていて、自分を中心とした球状に魔粒子を把握、魔力を練ったときに半径が5mはある。その半径5mの球形の中ではどこからでも魔術を行使できるために、相手が入ってきたら後ろから首を断つこともできる。まさに自分の魔力を練った空間内では魔術師は無敵なのだ。ただ、魔粒子をかき集めて支配するまで 把握範囲を広げるのに 是少し時間がかかる。

外に向けて魔術を打つ場合は、手から10mほど魔力を棒状に練ってその先から魔術を行使すれば射程がその分だけ伸びる。ちなみに魔術を発動するときには魔力を消費するので、糸状のようにしてめいっばい伸ばしても魔力が足りないために何もできない。

特に恐ろしいのは、ウクラインで見た魔術の隠密性だ。

魔力色はすべての人にあるが、訓練すれば魔術を行使する直前まで無色にしておけるのだ。これは正確には、魔力を練り切っていない魔粒子を8割ほど支配した状態において、魔術を行使する直前に10割支配することによって、直前まで魔力光を発しない技術だ。

さらに上位互換の恩寵【体外魔力操作】【体外魔力支配】となると効果が増大する。

【体外魔力操作】をもっていると、問答無用で精鋭部隊に入れるほどだ。周囲10mほどの空間を一瞬で支配できるようになり、並大抵の方法では殺せなくなるし、20mほど先の相手に空間から『氷弾』や『風斬』で一方的に攻撃できてしまう。

伝説の魔法使い 熟練した魔術師が自称や他称で魔法使いと呼ぶになると、文献によると周囲40mに入った敵兵を尽く瞬殺し

たという話もでてくる。それほど一方的なのだ恩寵に後押された魔術とは。

倒すには魔力切れを待つしかないだろう。

魔粒子はどこにでもあるが、一度魔力として使うと魔術行使後に行使者の支配から逃れてしまうので、魔力を消費した穴埋めを他の空間から持ってこなければならず、魔粒子を集めて魔力を補填する速度を上回るほど魔力を消費させるか、そのあたりの魔粒子が少なくなれば魔術師は何もできなくなる。

また、魔術系恩寵にはほかに種類がある。【体内魔力行使】系と【魔力性質変換】系、【魔力貯蔵】にそして【結界魔術】、【治癒魔術】だ。

まず【体内魔力行使】 【体内魔力操作】 【体内魔力支配】だが、魔力を体内で使うことに長けるようになるのがこの恩寵技能だ。

【体外魔力行使】のように派手さはないが、魔力によって体内の動きを活性化したり、自分の体限定だから治癒もできる。

最たるところでは若さが保て、寿命が大幅に伸びるところだろうか。【操作】にもなれば、90年ほどは生きるといふ。この世界の人族の寿命が60歳ちょっとであることを考えると相当だ。

体内を把握できるということは、筋力を魔粒子で疑似的に増強や補強をしたり、最適に動かして肉体疲労を極端に減らすことができるため、長い間戦い続けられる。けがをしても止まらないタフネスな戦士の誕生だ。

次に【魔力性質変換】。

これもかなりのレア度を誇る魔術系恩寵で、アイリスがもっている【魔力性質変換 雷】は低階スキルだ。この恩寵の場合は、「雷 雷電 雷神」という順番に階があがっていく。

効果は『魔力に属性が付与される』でパッシブスキルだ。ちなみに魔力を練れる範囲も【体外魔力操作】と同じくらいはある。

アイリスの場合は熟練度を上げれば半径10mほどの範囲では魔粒子を把握しただけで雷が進る空間をつくることができるというわけだ。

また雷属性に限り、【体外魔力操作】により魔力をこねた魔術よりも威力が高い。

長所はその威力の高さと、概念を注ぐ手間が必要ないから魔術発動までのラグ 2、3秒あるのが普通 がないこと。

短所は射程があまり伸びないことだ。【魔力性質変換 雷】と【魔力性質変換 雷神】でもそこまで把握できる空間の量は変わらない。

もちろん雷を帯びた魔力であっても普通の魔力のように魔術は発動できるし、雷属性については大幅に威力が高まるので、遠距離魔術を打てばいいだけの話なのだが。

以上をまとめて比べる。また、火炎属性の基本攻撃魔術『火球』で比べることにする。

『火球』の出力は【魔力性質変換 業火】>>【魔力性質変換 火炎】>>【体外魔力支配】ありで魔術>>【魔力性質変換 火】>>【体外魔力操作】ありで魔術>>【体外魔力行使】ありで魔術。

射程は【体外魔力支配】ありで魔術>>【体外魔力操作】ありで魔術 【魔力性質変換 業火】 【魔力性質変換 火炎】 【魔力性質変換 火炎】 【魔力性質変換 火炎】 【魔力性質変換 火炎】 【魔力性質変換 火炎】

質変換 火】>【体外魔力行使】ありで魔術。

【魔力貯蔵】はそこまでレアじゃなく、魔術師じゃなくとも持つてる人は多い。

効果は『魔力を長時間保存できること』でパステルが所有している。魔術を行使するときには、大気や地中から魔粒子を集めなくて支配していかねばならないが、この恩寵があれば身体の表面や内部に溜めた魔力を使つて魔術を発動できる。【体外魔力行使】系と【魔力貯蔵】の両方をもつていれば、常に周囲5mほどを把握できるために奇襲が通じなくなる。

【結界魔術】はほとんど持っていない恩寵。結界を張るという特殊な魔術を使用できる。

結界とは物理的障壁だけでなく、魔力を通さない障壁を張ることができる。

普通の魔術師の防御は、魔術によって逸らすのが常なので、守りにおいてかなりの有利にたてる。

高階恩寵技能【結界】と違って、人払いや悪意弾きなどの概念的な結界は張れないし、張れても効果は薄い。

【治癒魔術】は魔術師の中にたまに持っている人がいる。魔術で他人を治癒できるのはこの恩寵をもつ者くらいだ。

なぜなら、普通の魔術は行使は一瞬か数秒だけなので、傷を魔術で塞いでもすぐに魔粒子にばらけて元通りになってしまうが、【治癒

【魔術】なら長い期間魔力を固定しておけるので、傷を身体が傷を塞ぐまで魔術で固定しておけるからだ。

次は『概念を注ぐ』ことについて。

魔術を完成させるキーとなるこの操作は、イメージを頭の中で浮かべるだけでもいいが、それを補助すればもつと強固な魔術が行えると考えられるのも不思議じゃないだろう。

そこで2000年近い歴史を持つ魔術の研究の過程で生み出されたのは、『詠唱』『魔法陣』『魔導具』だ。

『詠唱』は言葉によって自分の中にある概念を強化していく。よって詠唱文句は個人で自由だが、大抵は師匠からのをそのまま受け継ぐ。誰だつて近くで見てる人が魔術を使ったときに唱えているのを同時に聞けば自動的にイメージと言葉がくつつくだろう。

『魔法陣』は描くことによって使用者に概念をわからせるもの。自分がどんな現象が起こるのかを知らなくても、その魔法陣を使うことによつて強制的に理解させて概念を注がせる。魔道具の大半に魔法陣が刻まれているのも納得だろう。誰もが使えて汎用性が高いのだ。魔法陣を描くのが大きな手間であるのが弱点だが。計算して上手い魔法陣を考案できる人は滅多にいないので、失われた技術もある。500年ほど前には天才魔法使いが『立体魔法陣』なるものを使い、数キロ先を狙撃したという、この世界の魔術の射程では不可能に近い技術だ。

『魔導具』は『魔道具』のように魔法陣が刻まれているものと、素

材がもつ属性や恩寵を活かすものの二種類がある。

前者は魔法陣を描きこんでおくことで、一つの魔導具に付き二つくらいしか魔術を使えないが、魔法陣を使った魔術をすばやく行使できる。

後者は以前ウクラインの武器屋で見たような、「体外魔力操作」が刻まれていた杖のように魔術系恩寵を宿したものと、魔力を通しやすいミスリルや、火の属性と融和性の高いルビーなどで、魔力を練りやすくしたり、火属性について概念を注ぎやすくするものがある。

これらは組み合わせられるので、その場その場で臨機応変に使い分けるのが重要だ。

最後に属性について。

【体外魔力操作】や【魔力性質変換】には後ろに属性の名がつく。風属性が得意なものは基本的に風系統の恩寵が刻まれていて、違う属性を何等かの方法で手に入れても意味がないために、自分の属性を理解することが重要になる。

属性は全部で11属性。

基本が「火」「水」「風」「地」の4大属性で、その4つの発展とも亜種とも言われるのが「核」「氷」「雷」「金」で、「水」属性を持つ者は「氷」を、「氷」属性をもつものは「水」をある程度使える。補間属性はどちらの方がより得意かという話でしかない。

それに加えて「光」「闇」「無」がある。

対属性として「火（核）」と「水（氷）」、「風（雷）」と「地（金）」、「光」と「闇」という関係になっていて、片方を持つ者はもう片方の属性を最も苦手とする。

「無」属性はこれらのどれにもあてはまらない。

属性としてわかりにくいものを説明すると、「核」はエネルギー関係を扱い、「金」は金属を、「光」は光関係　幻影などを、「闇」は浸蝕性を司る。

また、「無」を除く10種のうち大抵二つ以下が得意属性となる。無属性になる場合は無属性だけだ。

魔術系恩寵をもつものは自分の属性を知るのが最重要となるので、属性を調べられる魔道具で調べてもらうことになる。

魔法や魔導とは、魔術を自称他称で呼ぶという分類。

魔法使いは特に強大なすごいと認識される魔術を使う魔術師で、導師はある魔術の流派の総帥をそうよぶ傾向がある。

つまり分類はあいまいなもので、全部魔術でも問題はない。

以上が魔術講義でした。

「きゃあああああっ！」

属性を調べる魔道具で属性を調べてもらっている 【根源管理】
で見れたけど内緒にしているので と、いきなりレンさんが悲鳴
をあげた。

あ、俺が闇と氷で、パステルが光と風らしい。

「耳っ！ 耳でてるっ！」

ローブを脱いだからエルフの証である尖った耳がでていることに今
更ながら気づいたらしい。

「お願い！ 人には伝えないでっ！ じゃないとじゃないと私」

始末されてしまう

「ちよつと、顔青ざめてますよ？ 大丈夫ですか！？」

その言葉と慌てようにごちらも慌てて声をかける。

「私たちは言いふらしたりしませんよ。落ち着いてください。」

「…………ふう。そう…………よね。あなたたちは、耳を見てもそのまま接

してくれていたんですものね。」「
少しして落ち着いたようだ。」

「でも珍しいですよ？ エルフを見て怯えたり欲望の視線をぶつけてこない人族は。」

「そう……ですかね？ 私的には人族と会話もできますし知的生命体として優劣はないと思っっているんですけど。」

「私も変わり者の魔術師だって言われてるみたいですけど、クロノさんも大概ですね。」

すこし呆れた感情と安堵を包んだ表情をするレンさん。

「いいですか？ この王国の人間は、他の獣人と同じようにエルフも見つけ次第奴隷にしようとするんです。エルフは種族の特性として美美女ですし、ほとんどが魔術系恩寵を身に宿して生まれてくるのですから、良い商売になるみたいですよ。」

最近兎人族が奴隷として売られていたのを思い出して苦い顔になる。たしかにエルフも同じような目にあっていると予想できたはずだ。

そしてふと気付く。

「どうしてレンさんは王都にいるのですか？」

レンさんは一転してまた慌てだし、すぐに真剣な表情に戻った

「……私、潜入工員なのです。」

……えっ？

14話 魔術（後書き）

レンさんは見た目20歳くらいです。

巻いていきたいのにー
王都編いつにおわるのやら。

15話 ハーフエルフ

「……私、潜入工員なのです。」

いきなりな告白に時間が止まる。

ここはファンタジーな世界、だからこんなことを聞いても「厨二病乙」なんて笑い飛ばせないのだけでも。

レンさんが潜入工員で……似合わない過ぎる。
というか適性があってないでしょ。

この人、自分がエルフの証である長耳を出していることを数十分も気づかなかったんだぜ？
俺たち以外に見られてたらどうしてたんだ？
今までバレてなかったほうが驚きだよ！

それに工作員っていうのなら、どうして冒険者所属の魔術師なんていう、レアもレア、いやがおうにも目立つポジションについてんだよ！

よほどエルフってのは人材不足なのか……？

色々とツツコミたいところがあるけど、語ってくれるみたいだから落ち付いて話を聞くことにしようか。

罪を告解・共有して仲間意識や同族意識によって安心感を持つのはよくある精神の動きだろう。

レンさんはポツポツと喋りだした。

「私の母親は元々この王国の北に住んでいるエルフ一族、『白森の一族』と呼ばれている一族の出だったのです。その一族は王都に近いエルフの集落のうちでも『一門』の名を持つ有数な大きさの集落で、王国の中では発言力が大きく、王国の南に住む『青霧の一門』と競っていました。

二十年ほど前に大規模なエルフ狩りをされたときに、王国の人族によって、知らぬ間に洗脳されていたエルフが、集落の場所についての情報を王国に与えたゆえに、エルフの多くの村が大打撃を受けました。

それ以降、エルフも人族のように情報収集にも力を入れねばならないとして、王国に諜報員を送り込もうという話が集落の代表会議でましました。その時にも『白森の一門』と『青霧の一門』はどちらが

より重要な任務、王都に忍び込ませるかで争いあい、結果として、代々光属性魔法を得意とする『白森の一門』の中でも有数の使い手、幻影を使って自らの耳を隠せるほど　幻影を自分の動きに合わせ、しかも掛け続けるなど普通はできません　の実力者であった母を王都に送り込むことになりました。最初は彼女のみで、徐々に姿を隠して人数を増やす予定だったので。」

ここで一旦、一息をつくレンさん。

俺とパステルは無言のままだった。これから重要なところに入るだろうから。

「しかし誤算が起きました。彼女、私の母親はあろうことに王国の人族の騎士に恋をしてしまったのです。その騎士は人族でありながらも優秀な風魔術の使い手で、母とは王宮内で彼がけがをしたのを母が見たのをきっかけで恋に落ちました。

時間間隔に疎いエルフたちがそれを知った時には、彼女と彼は既に深い仲となっていて、私も生まれていました。

エルフのような長命種が短命種と恋愛する場合、寿命が違いすぎて『一緒に老いて添い遂げる』という考え方はありません。大抵が激しく燃えるような恋を20年くらいの短期間　人族にとっては長いかも知れませんが　するのが普通で、もう恋愛に陥った母はエルフの集落に定期連絡もせず、諜報するしなくなっており、そのことに気づいたエルフの集落が文句を言ってきたもどこ吹く風。彼と私だけを愛して、三人だけで世界が完結していました。しかし、終わりは唐突に訪れます。

私の不注意で、母と父の知り合いがパーティをやつてるところに紛れ込んでしまい、私がエルフの耳を持っていることで、母がエルフだということがすぐにバレて、父は国家転覆罪として処刑され、母は私を逃がす途中に捕まり奴隷となったそうです。

私はというと、他に忍び込んでいた小さなエルフの集落の諜報員に拾われ、何とか保護されました。

そして一年が経ち、両親を亡くした悲しみから立ち直れずにいた頃に、一度は故郷に戻ったほうがいいと言われて、『白森の一門』の集落に行きました。

そこで私が目撃したのは、王国によって蹂躪された集落の姿と、どこかに避難していたエルフ　偶然戻ってきていた　が私を見る冷たい視線でした。

曰く、『裏切りの混じり物』『一門の汚れ』『淫売の血』は去れと。同族殺しは禁忌だが、お前の母親を恨む奴はたくさんいると。

おそらく彼らは良いエルフたちだったのでしよう、忠告してくれたのですから。

幼い私には理解できず、母の故郷にあり続けようとし、集落の片隅で生かされていたのですが、3年前に集落の破棄と引っ越しが決まった時に、『次も売られたら困る』と言われて、王都へ送り込まれることとなりました。

自分の耳を隠す手段も持たずに、です。

そして何とか耳をローブで隠し、人と関わり合いにならないようにこの寂れた区画にある家で過ごしてきました。

しかし、一門も他のエルフの集落も私に諜報能力は期待しておらず、冒険者ギルドにはいつて、特定の魔獣を殺害し、とある部位を剥ぎ取れたとか、危険な実験をやって報告しろだとか、完全に使いつぶしの駒。

ハーフエルフであることを知られたら自害して、せめてもの矜持を示せと致死性の毒薬すら渡されています。つまりはそういうことなんです。

死んでもいい、特に必要ないんです私は。」

……ハーフエルフか。エルフはプライドが高い一族だから根が深そうだ。

それにレンさんの母親の行動は褒められるものじゃない。

「エルフからすれば興味の埒外の駒で『混じり物』、人族からすれば『亜人』と言われて狩りの対象。」

そんなこととづくに理解していたはずなんです。この三年間、冒険者ギルド所属であるのを聞いて話しかけてくる人はいましたけど、依頼を終えても労ってくれるような知り合いもいませんし、本当にさびしかったです。

だから、集落の命令で、遠くまで行かされる依頼を終えて帰ってきた必要道具だけ私のカバンから回収をした、私の顔すら見なかったエルフの男が去った後、そのタイミングで訪れたあなたたちの存在がありがたかったです。ギルドや酒場でたまに見る、『久しぶりに帰ってきたんだ？ お疲れ。良いお酒が入ったから飲もうよ。お土産話を肴にさ。』という風な雰囲気、距離感に憧れていた私にはだからつい気が緩んで家の中に入れてしまい、調子にのって他の日の約束までしてしまったのです。

二回目に来た時もうれしかったんですよ？ 約束守ってくれたんだって。集落にいた時も遊んでくれる人すらいませんでしたから……。直前まで、ほんとに危険な、部屋が黒焦げになるところか家が吹っ飛ばかもしれないような調査をさせられていたんですが、案の定失敗して爆発した時もあなたとパステルさんはすぐ心配して駆けつけてくれました。最初は悲鳴をあげてしまいましたけど、掃除して着替える時にはうれしくてうれしくて……。ついローブを置いてきてし

まっただみたいです。」

「それに気づいた時、『ああ、この人達との関係も終わってしまっ
んだ、私は自殺しなければならんだ。』って悲しくなって動転
してしまいました。」

「俺たちはレンさんの秘密を他人に漏らさないから、そんな必要は
ないよ。」

「クロノさんたちはエルフであることに気づいていても普通に接し
てくれていました。そんな人族がいるとは思いませんでしたよ、母
がエルフであるのを父に話したのも恋愛に落ちてしばらくしてから
なのですから。」

私、自分の正体を話し始めた時は、最悪な気持ちだったです。けど
！話してる途中にクロノさんたちなら大丈夫だと、わたしの側に
いてくれると、告白して思考が落ち着いていくうちに確信しました
！

私と、お友達になつて、くれませんか？」

最初の悲壮な表情が嘘のよう。まなじりに水滴が残っているが、目
も口も笑っていた。

「もちろんだ。」

この女性、自分で立ち直れたよ。強いね。
俺は特に彼女に慰めも励ましもしていない。

自分が何か言うまでもない。
自分で話してゐるうちに冷静になり思考を整理して結論を修正する。
カウンセリングは聞くのが仕事というのはそういうことだ。

こうしてハーフェルフの少女、レンは俺たちの魔術の師匠兼最初の友達になった。

目を開けて何も無い空間を凝視、そこに手をかざし、脳がピリピリと震える感覚を思い出しつつ、魔粒子を掌握。
細かすぎて人体すら通り抜ける魔粒子を押しとどめて圧縮。
持っている魔粒子を俺の物だと認識して魔力として支配。
黒く光る魔力を見ながら左手にもつ葉っぱを凍らせるイメージをする。
そして「氷結！」詠唱によって概念を注ぎ込む！

するとパキパキという音がして、葉っぱの氷漬けができた。

上位世界になかった魔術、ほんとに楽しいです。

なぜ魔術を使えるようになってるかって？

それはですね、レンさんが友達になった&お互いの秘密を共有した記念として、【体外魔力行使 氷】と【体外魔力行使 風】の刻まれた恩寵調金武器をくれたからです。

友達になった後、こちらも隠し事はなしということで、俺とパステルについて大体全部話しました。

上位世界からやってきたとか、天階恩寵技能をもっているとか。彼女に低階【電心】を刻んだら信じてくれましたよ。真っ赤な顔をして喜んでくれました。真っ赤になったのは胸を触られたからかもしれないがね。

それで恩寵調金武器をくれたときに、破壊させていただきました。もちろん許可をとって。闇と氷属性の俺は氷の魔術を、光と風のパステルは風の魔術を使えるようになりました。ちなみに光属性と闇属性の恩寵調金武器はめったにでまわらないらしい。そもそも珍しい属性だからだと。

レンさんは光と風でパステルと同じ。光は『白森の一門』の母から、風は緑色の髪をしていた父から。そして薄い緑の髪と魔力光の彼女は光と風。魔力光は魔術の得意属性にも影響するみたいです。

しばらくは夜は少し長めに起きて魔術の練習をすることにしました。
【体外魔力操作】を手に入れたとはいえ、熟練度が最低の今だと魔
粒子を把握できる最高距離は20cmくらいだけです。

夜の光源は、レンさんにもらった【光源】つきの恩寵武器をもらい
ました。パステルの光魔法『光源』を練習させてもいいかもしれない
い。俺も閻属性の反対とはいえ、超基本魔術の『光源』は覚えてお
きたいところ。
いまだに補間属性である水もうまく使えないからそれも練習しなく
てはならない。

あと、パステルが興味があるようで、魔法陣についての本をレンさ
んから借りてました。高そうだから大事にしなれば。

そして早めの夕飯をもらい、宿に帰りました。
お留守番してたアイリスちゃんには露店で甘いものを少し奮発して
買ってきました。予想以上に長々と話し込んだからなあ。

なんとか機嫌を直してもらい、今日あったことを話し、俺たちの正
体についても語っておく。

だからなに？ みたいな反応されたけどね。
魔術についてはアイリスちゃんも先生となってくれると意気込んで
いた。レンさん比べるとかわいそうだから比べない。

それに雷一辺倒のアイリスちゃんじゃあ、雷は風と補間属性といえども、両方の得意属性がかぶっているレンさんとパステルの間には入り込めなさそうだな。

ということであんなに俺がアイリスちゃんに感性的な授業を聞くのだけど。

うん、全然わからん。

説明にいちいち「バチバチ」って雷の効果音を口にするんだけど、

俺は【魔力性質変換】もってないので、魔力に性質が付加される感覚が理解できないしな。

そもそも魔力が雷や炎の性質をもっていたら扱いきれるのかと。

そんなこんなで、魔術の危険性に気づいてだいぶ経ってからだけど、

『クロノはまじゆつをてにいれた！』

15話 ハーフエルフ（後書き）

締まりのない回だったかな。

次がシリアスちよっとはいいり、本格的に準備していきますよー。

意見感想等お待ちしております。

書き溜めがあと5話しかなく、また、リアルが忙しくなりそうなため、一日一話更新となります。

16話 恩龍が刻まれた『もの』の扱い

以前に武器を破壊して恩龍を自分のものにするのができ事件が絶えないといったが、この性質を利用して、王家や貴族などの富裕層は金に飽かせて恩龍技能が刻印された武器や道具や防具を買い漁り、自分で壊して恩龍を吸収したり、自分の傘下に入る報酬として与えたりする。そうすることで王家や貴族の暴力がさらに大きくなり

この時代は特に力が正義だ 集権化にもつながる。

エウルーペ王国では代々二つの王朝が恩龍彫金武器の回収、つまり恩龍技能の収集を競っている。弱い王家など潰されてしまうのだ。今代の王オリヴァー・ハーヴェイ自身は強さも興味がないため珍しい恩龍を集めるのみで、しかも相手から奪うこともしない 確率で吸収されずに失われることもあるからだとか という珍しい王だがハーヴェイ王朝は違う。いつもものようにアークライト王朝との権力争いとして恩龍を集めている。利益を独占するために、強い恩龍が刻まれた物が発見される度に王に徴収されることが多い。重要な神の恩龍遺産なので国が保護する、なんて建前を白々しく通告して。

そして最もこの世界の闇を端的に表しているのが、「恩龍が刻まれた『物』」に『者』も含まれることがあるということだ。これには以前武器屋で恩龍が刻まれた物について考えたときに気づいておく

べきだった。

貴重な恩寵が刻まれた者が弱者としてあるときどうなるか

殺すことを前提として所有されるのだ。その身に宿す『神が与えたもつた恩寵』のせいだ。

王国民で且つある程度の地位があればそう簡単に手を出されることはないが、弱い身分だとさらわれることもあるし、貧しい場合は親が奴隷商に売る場合もある、……殺されるとわかっていてもだ。中世ヨーロッパパレルの文明だと口減らしも当たり前だからそこまで抵抗もないのかもしれないが。

どんな恩寵をもっているのかは【根源看破】で除かれるか、使用しないと本人にもわからないので、レアな恩寵を持つ弱い立場のものは恩寵を隠しとやすことが多い。恩寵など得たくなかった、などと神と親を恨みながら

このような立場にあったハリスさんの娘ヘイゼル 【戦乙女】と【豊穡の女神の加護】の持ち主だった も、父親想いのいい娘だとハリスさんは言っていたが、心の底では何を思っていたのだろうか。もう答えを知る人はいない……。

この世界を想像して創造したやつはここまで考えていたのだろうか。ただきれいなところ、楽しいところ　魔術の設定や恩寵技能について　だけを考えてあとは放置していたのかもしれない。

その結果として神の恵みとしての恩寵技能が逆に得たことを本人が恨む、という皮肉な事態に陥ってしまったっている。考えて書いたなら「迷惑な疫病神め！」と叩き付けたい。考えていなかったなら「この考えなしめ！」と感情にまかせて叫んでしまいたい。

書いた本人は地球の下位世界群で具現化されるなんて思ってもいいから責めるのはお門違いだとわかっている、もつと幸せな世界を創造しようと、叱責したくなる。

おそらく私は下位世界の生物など所詮は玩具だといっていた天使（仮）の態度思想がよぎってしまうから、ここまで熱くなってしまうのだろう。

天使（仮）はなぜ玩具だと30年の間も考え続けられたのか。人と話せばその人が紛れもなく生きてそこに存在していると自明のようにわかるというのに……。

そして、国民でも貧しければ奪われるのであれば況や魔獣や亜人は……。

魔獣と定義されている中には、人間に害を与えないのにも関わらず、身に宿す貴重な恩寵のために敵対動物として狩られる魔獣もいて、一部の魔獣があたりで全滅するというのもそう少なくない。聖なる獣とされるユニコーンなどを狩る組織もあるというのだから人族の欲深さにはある意味平伏する。

亜人は人族からすると狩りの対象　同じかそれ以上の知能を宿すエルフやドワーフ、獣人などであっても　となる。

長命種には優秀な個体も多く、有用なスキルをもつてることが多いからだ。

種族の傾向として見目麗しいエルフは性奴隷や魔術を使わせる奴隷としても使え、また、エルフを孕ませて優秀な恩寵をもつた子を産ませるといふ外道な行いもされている。

ドワーフの長年で培われた技術の一部と恩寵も殺すことで奪うことができる。

長命種は優秀ゆえに世界のバランスとして繁殖率が低いため、個体の能力では人族を圧倒しても物量で追い詰められる。遂には人族が多く住む地域から秘境と呼ばれる場所へ移り住まなくてはならなくなり、最も人族が栄えているシークリッド大陸から各地に集落や村単位を残して居なくなってきたのだ。

もちろん村同士の交流レベルなら人族と亜人がうまく共存している例はいくつもあるのだが。

人族と同じく短命種ではあるものの、獣人も 様々な種族がいるが 大抵どこか人族よりも優れているところがあり、優秀な恩寵の苗床、きれいなものは性奴隷、筋力のあるものが労働奴隷とされる。

体外魔術関係はほぼ全滅だが、【体内魔力行使】をもっている個体は多く、セレブに若さを保つためにと殺害されるのが後を絶たない。

そしてなぜか人族は魔獣や亜人と比べて恩寵の吸収率が高く、それを『やはり人族は神に愛されているのだ』という理論として広まってしまうている。

これが人族による正統なる狩りが横行しているのだ。

生存本能に突き動かされ魔獣が大移動した先が、王国の南の海を越えた先にある暗黒大陸。

エルフなどは新大陸にうつっているのではないかといわれている。

また、帝国の更に東の砂漠を越えた先にエルフやドワーフの国があると言われているが真偽は謎。本来エルフとドワーフは仲が悪いが、それでも近くに国家を作っているというのだから、事態の逼迫さを表しているのだろう。

レンさんの一族『白森の一族』や『青霧の一族』のようにできるだけ故郷から離れたくないとしていまだに王国や帝国に住むエルフも多いようだが。

以上がレンさんとの話と、図書館や、路地裏で情報収集した結果だ。

俺の理想国家建設の草案をレンさんに伝えると協力すると約束してくれた。

元々は人族で虐げられている民の逃げる先を用意する作戦だったが、亜人も含めることにした。ゴブリンなどもこちらとコミュニケーションがとれるなら共存したい。

その結論には何回か見た聖女パレードも原因だ。

外見は16歳くらいのかわいらしい少女で、ベールのようなものを被り、神秘的な雰囲気醸し出しているが、どこか幽鬼的な少女が『風の精霊に遣わされた聖女』だと紹介されているのを、数回は『王の道』で見た。

レンさんによると、彼女はシルフと呼ばれる、風精霊の化身と言われるほど格式の高い生物であり、滅多に生まれず滅多に発見されない種族の子供なのだそうだ。

それがなぜ王国にいて、しかも祭り上げられているかというところうことに首にチョーカーで隠した『隷属の首輪』が嵌められているとのことだ。

王国では亜人は人でないという風潮が蔓延しているといっても、まだ喋れもしないような子供を高階【隷属】で無理やり従わせ利用しているというのは、許されないだろうと俺は思う。

ここで亜人にも人にも貴賤はないだろうと、そんなの認めたくないと思ったのだ。

レンさんはエルフにも人族にも良い印象を持っていないが、それでも亜人と蔑まされている状況は嫌で、俺のことは信用してくれるとのこと。

力強い味方ができた。彼女は3年も王都に暮らしているので情勢にも詳しい。

アイリスは子供だし詳しい人は大歓迎だ。

もう国家をつくる場所は決めた。

必要なものは道具と人手と食糧。

そのためには何はともあれ金が必要だ。

もうレンさんと会ってから三か月。依頼を消化することでお金は溜まってきたが、それでも桁が違うものが必要だ。

そこに以前ウクライン郊外で助けてくれた4人組『境の風』の一人、カルロスさんが俺に接触してきた。

この人は俺と初めて会ったときに動く人形　パステルのことだ
に異常に反応を示していたが、その後ほかに仕事があるといつてどこかにいってしまったので、俺の中でも忘れかけていた。

しかしこの人の提案には渡りに船だった。

カルロスさんには冒険者ギルドのメンバーとしての顔以外に、今代の王、変わり者として有名なオリヴァー・ハーヴェイが各地にはなつた密偵というのがある。密偵といっても後ろ暗いことをするわけではなく、珍しいものを発見しては報告してオリヴァー王の耳を楽し

ませるといふ程度だが。

そこで、俺と会ったあと、一度報告や土産をもって王都に戻ってきて王に伝えると、大層人形に興味をもたれた。

どうにか会えないか、王都に来てもらえないかと思っていたところ、いつのまにか俺が王都に来ているではないか！ 人形が手元にならないようだが、一度王にあつてもらおう、と想い近づいてきたのだそうだ。

今代の王が乱暴な手段をとらないタイプなのに少し安堵し、だがハ―ヴェイ王朝に媚を売る輩が暴走しないと限らない。

なのでこちらから出向くことに決める。

珍しい恩寵に興味津々だという話なので、交渉次第では無人島での国家建設を援助してもらえるかもしれない。

などと心に想い、身なりを整えたあとにパステルとカルロスさんと王城へ向かった。

魔術を使えるようになってから早いもので三か月。

俺は水系はだいぶ練習して【体外魔力行使 氷】の熟練度もあがってきて、球状把握なら半径4m、棒状なら最高8mくらいは魔力を練れるようになった。

他の属性も使えなくないが、氷の魔術の美しさは他と一線を画すと俺は思っている。

氷の彫像って最高だろ！

クリスタルも作れないかなーって思ったたら、地属性の分野らしい…相性悪くはないからいつかきつと……。

いまだに魔獣を氷漬けするほどには魔粒子の把握、魔力の練れる量が足りないが、範囲内で氷の槍を空中からだす『アイスニードル』で大抵の魔獣は狩れるから問題ない。

Eランクの実力だった俺が魔術を手に入れた途端に、Bランクの魔獣を狩れるんだから、魔術とはげにおそろしき。

不満があるとすれば、【魔力性質変換】の展開力には絶対に勝てないところだろう。

アイリスもレンさんにしっかりと魔術を教わって腕をあげているのだが、『概念を注ぐ』という一番大事で繊細な作業をしなくても雷属性の攻撃ができてしまうわけで……。同じ間合いにいたらこちら

がイメージする前に感電します。

まあ詠唱にもロマンがあつていいんだけどね。

いつか『エターナルフォースブリザード』を完成させたいと思ってる。

もちろん効果は『相手は死ぬ』。

大気ごと凍らして相手を殺す魔術はこの世界では見つからない。一子相伝という感じで伝えられてるかもしれないが。

相手を殺すのに周りまで凍らせなくてもいいもんなあ。

でも男のロマンだからやりたい。

魔粒子を支配できる量が少なすぎるとか、低階の【体外魔力行使】ではそもそも無理というのはいいとして　いつか【体外魔力操作】を持つ武器からもらえばよいし　、間合いが問題だ。

相手がこちらの魔力が直接届く範囲にいれば如何様にでもできるが、それより遠い場合、こちらの間合いぎりぎりのところで、遠距離用の魔術を組んで発動しなくてはならない。となると、氷魔術では氷の弾丸を飛ばすくらいしかなくなってしまふのだが……。この世界の魔術は遠距離魔術に乏しいのだ。

弾丸を飛ばすとして、その弾丸にあたつたところから凍っていくような概念を注ぐことができるのだろうか。それに氷弾を飛ばしてそれを当てて氷漬けにしただけでは、大魔法『エターナルフォースブリザード』は名乗れないだろう。

パステルは日に日に人間に近づいている。

王都はやはり良い材料がたくさんあるらしく、ギルドでの依頼の報酬金のパステルの分の大部分を、身体の素材に使っているようだ。

それに既に消化器官 エネルギーを取り出せるようにしたとか

があるのに驚きだ。しかもエネルギー吸収率ほぼ100%。パステル曰く、人間の身体は無駄が多すぎるんだとさ。

レンさんに借りていた魔法陣の本は読み終わり、他にも図書館で読み漁っているらしい。二か月前には魔法陣を描きやすくするための魔道具『魔ペン』を買って実戦に入っている。

パステルは【速読】【思考強化】【集中力強化】も持っているし、学習効率が半端ないのだ。肉体疲労はないし、あってもパーツを換装すれば治る彼女の問題は精神的疲労くらいで、それも【吸血】によって血 特に俺の血が極上らしい を吸えばある程度回復できる彼女は、一週間くらいならずっと起きていられるので、活動時間も俺と比べ物にならないので差が開くのは当然といえよう。

そんなこんなでパステルは中階【体外魔力操作 颯風】にランクアップした。熟練度が満タンになっても次のスキルになるのにはかなりの壁があるって聞いてたのだけど……このメイド 最近地上にいたときの俺がメイドさんの服が好きだったのを覚えていて、侍女服を改造して作ったらしい さんはいとも簡単に……。

【錬金】や【魔獣通じ】の熟練度もあげさせているから活動時間が多いとは言っても忙しいはずなんだがなあ。

あと、光も幻影魔法を覚えられたらしい。まだまだ制御が甘いし範囲も狭いが。アイリスがふたりいたのには驚いたよ！ ちよつとでも動くとすぐ崩れたけど。ドロツて。子供が見たらトラウマになりそうだ。

幻影魔法を覚えてくれたレンさんは、ハーフといえどもさすがエルフで、【体外魔力操作 颯風】と【体外魔力行使 光】をもっている。

この三か月の過ごし方は、俺とレンさんで依頼を受けて、パステルとアイリスを加えて魔獣狩りで金稼ぎが主に。レンさん以外が魔術を使えるのは隠しているので、この4人以外にはメンバーは加えないようにしている。

前に、どこかの冒険者が隠れてついできたのだが、レンさんが発見するやいなや風魔術『風砲』で吹き飛ばした。『風砲』ってのは風の塊を使って相手を吹っ飛ばす魔術だ。殺傷力はほぼないが、面での攻撃なので相手との間合いをとったりバランスを崩させるために用いられる。

吹き飛ばすときに一切の躊躇がなかったのは、一応レンさんも普段から隠匿すべき秘密を守りながら暮らしてきたのだというのを感じさせた。

報酬は戦闘に応じてわける。

俺はほとんど使わないが、アイリスは女の子らしく服や小物を買ひ、パステルはボディの素材、レンさんは実験の道具などを買うのに使っている。

4人で狩るから、殲滅効率もいいが、同時に恩寵回収効率もなかなかだ。といっても最近はダブリばかりとなってしまったのだが。

王都から数日も行けば秘境のような場所も見受けられ、身体が紫で常に帯電していた熊 何体か倒すと【魔力性質変換 雷】を手に入れられたが、元々持つてるアイリス以外うまく使えない や、4mくらいあって足が16本ある蜘蛛ならざる蜘蛛や、人の身体を毛むくじやらにしたような身体に狼の頭の魔獣 獣人族の狼人族に似ているが、別物らしい や、だれが使役してるのかもわからない体長5mもあるゴーレム、翼を広げたら8mもある怪鳥 倒すのに三日かかった など、これだけの戦力があればそこの村って消滅するよね? って言えるような魔獣が出てくる。

王都の壁には魔獣を寄せ付けけない結界みたいなのが塗られてるから大丈夫なんだろうけど。

概念的な結界を張れるということは、大昔に城壁を作った人は魔術『結界』ではなく、恩寵技能の【結界】を使ったのだろう。

そんなこんなで、【威圧】【爪攻撃強化】【牙攻撃強化】【魔術耐性 雷】【鬼蜘蛛系生成】【麻痺毒 強】【捕食者】【狼の王】【夜目】【換装】【自動修復】【魔術耐性 火】【風読み】【軽量化】【怪鳥の翼】、などの新しい恩寵技能を手にいれることができた。人間じゃ使えないのもあるけれど、有用なものも多い。

【鬼蜘蛛系生成】のできる糸は【蜘蛛系生成】の糸よりも太くて頑丈。だが粘性がかなり低い。また、少し作るだけでも多くの材料が必要なので、生身の生物が使うと一気に身体が物理的に削られて死ぬ。よってパステル用だ。

【捕食者】は相手の肉を食らうことによってステータスを奪える。殺した時にも奪えるので二倍お得だ。食べる勇氣のでない魔獣もいるけどね。

【狼の王】は狼たちに指示できるようになる。ただ熟練度が低いと弱い個体だけだ。【魔獣通じ】と併用していきたい。

【換装】。ゴーレムは腕と脚というパーツを入れ替えて間合いを変えてきたことがあった。人間でそれをやるとたぶんやばい。

【自動修復】は【再生】の自動版だ。もちろん生身の人間が使うと死ぬ。

【軽量化】はその名の通り。これは魔粒子が関係していないタイプのスキルだ。怪鳥の巨体はこれがあつて空を飛べていたようだ。

【怪鳥の翼】は翼を作れる。怪鳥と戦つてるとき、翼を壊しても切り落としても生えてきたのはこれの能力だったみたいだ。人間でも一応魔粒子を集めて翼とすることはできる。しかし少し揚力を発生させ、後はグライダーのように風に乗るのが精いっぱいだ。要練習である。

そしてパステルはこれらのスキルを全て使うことができる。身体の一部を材料にされても補充すればいいだけだしな……

俺の天階の恩寵技能2つありきとはいえ、俺は呪いで使えないのに全部使えるとか……真のチートはパステルだったのだ。

アイリスとレンさんはこの世界の人なので、根源量には限界があるから【電心】くらいしかまだ刻んでいない。

【電心】があるところくらい距離なら会話できるのでとても便利だが……。

彼女たちに刻むときはよく考えてからやらないといけないうらう。

以上が、王城へ向かう日まで、3カ月の行動。

16話 恩寵が刻まれた『もの』の扱い（後書き）

前半少しシリアスに世界背景。後半は淡々と。

次回から物語が加速する！ かな…？

建国準備編は21話までになりました。

物語に彩りを添える、厨二な武器や魔導具を、「神器」として無期限で募集します。強いスキルが刻まれているものなどを名前とセツトで。

出てくるのはだいぶ後になるので、気長に読者様が増えるのを待つ所存ではありますが。

もしよろしければ、考えて頂けると幸いです。

17話 交渉と新たな仲間と

「ふむ、クロノ・ツアナーク殿、パステル殿、面を上げよ。」

「はっ。」

俺の正面、段差によって高くなったところにおわしますは、今代の王オリヴァー・ハーヴェイ陛下。

そう、この場所は王城の中にある謁見の間だ。

一応の客人ということで人力エレベーターで運ばれた先の部屋をいくつか通り抜けてたどり着いたのがここだ。

謁見する場ということで、それまでの道のりにも多くの家臣がこちらを警戒するような目で見たり、身だしなみを整え直してくれたりした。

今のこの部屋にも衛兵が王座の段差下横と、部屋に入ってきた入り口にも詰めている。他にも、こちらからは見えない場所から警戒や観察をしているものもいるのかもしれない。

王城の中はどこも華美だったが、この謁見の間はそれらと比べても特に輝きを放っている。富に興味が無い王といえども、歴史ある王

国の王としての見栄が必須なのだろう。【根源管理】で視ると恩寵が調金された武器や道具がそこかしこに、ただ部屋のインテリアとして存在している。

「そう固くならずとも良い。そなたは面白い物を持っていたそうで、我を楽しませてくれるだろう客人だ。」

そういわれても、雲の上の身分の人になど会ったことがない小市民だった俺には難しいことである。上位世界地球の日本にいた時の最も高貴なる身分といえば天皇家のことだろう。彼らとの接点など、祖母が年配に多い皇室ファンだったことと、祖父の祖父がある大学で首席をとったために、昭和天皇から下賜された銀時計を、今は俺が上位世界から持ちこんでいることくらいだ。

正直礼儀作法は全くわからん。とにかく王が許可するまでは発言してはいけないんだったかな。

「今日の謁見は貴殿らが最後だ。存分に語って我を楽しませてくれ。」

そして俺は口を開く。

「我々は天使として上の世界から降りてまいりました。」

最初は「はあ？」と呆ける人や「天使を語るとは神への侮辱！」といきりたつ人が周りにいたのだが、それには取り合わずに間髪入れず上から降りてきた時からの話をした。

といっても、天使（仮）を殺害したことは言っていない。

パステルが人形だったところに動いていたのを説明するには根源量のことから話した。

王国では根源量で人格を持つかがどうかが決まるといのは知らなかったようで、大層驚いていた。

天使であるといったのは、この後にする提案をスムーズに行うためだ。

「であるからにして、上から降りてきました。」

そして、私が神より預かった任務は、貴重な恩寵がこの世界から消えてしまうのを防ぐことです。相手を殺した時に恩寵が手に入られるのは絶対ではありません。この方法だと、確実にこの世界から貴重な恩寵が減ってしまいますので。

よって、私が保護したく思います。」

恩寵を集めるのはこのエウリーペ王国の政策。天使が言ってきたからといって方針をいきなり変えれば混乱は必至で、そもそも二つの王朝がある時点で変えられないでしょうから。」

ここまで言い切り、王の反応を待つ。

「天使を騙るとは！」「よくもずけずけと！」「この神聖なる王国をなんと心得る！」

と外野がうるさいが、王が目で制すとすぐに黙る。

二つの王朝があるといっても、謁見の間にいるのはハーヴェイ王朝の手のものばかりのようだ。

「たしかに、恩寵が失われていくのは我も問題と思っている。」

しかし、貴殿が天使である証と、どのように保護するというのかを示さねば誰も納得せぬ。」

前評判通りからの、この王は珍しい恩寵を集めても壊しも殺しもしないことから、恩寵が消えるのをもつたいなく思っているのだろうという予想が当たったようだ。

意見自体には好意的だ。

「はい、おっしゃる通りでございます。では天使の証ですが……誰か、【根源看破】を持っている人がいらっしやったら、私の根源量を見ていただくとよろしいかと。」

この場にレアな高階【根源看破】を持っている者が一人いるのは確認済みだ。

王が一人の男に指示し、俺に【根源看破】を発動する。

「ぐはっ！」

と同時に頭と胸を押さえながら大理石の床に倒れた。

「はあ……はあ……信じられません……根源量が、多いという、レベルではありません！ 我々の、数億倍です！」

息も絶え絶えに王に向かって叫ぶ男。

それを見ての王の言。

「うむ。天使である、少なくとも我々は違う存在であるということは認めよう。」

してその保護方法とは？ どこでするといふのかね。」

「はい、王国の西の端から北に行ったところにある、無人島ブリトニアに保護区を作りたく存じます。強いてはその援助をお願いしたく……」

「ふうむ。あそこは確か土地も王国より荒れ果て魔獣や亜人の巣窟だったはずだが？」

「私の天使の力を使ってある程度は改善しましょう。王国内でやる
と迷惑でしょうし、表向きは私が勝手にやったということでもいいの
で、援助をしていただけないとも黙認をお願いします。」

「はっはっは、正直なやつよのう。よかろう。援助をしてやろう。
もちろん裏だからあまり出せぬがな。いやなに、それで貴重な恩
寵を見られる機会が増えるのならば、今やっている道楽と変わらん
よ。その分を貴殿にやる予算にまわそう。」

「はっ、ありがたき幸せ。隠れながらですが、貴重な恩寵を持った
ものを王都に連れて、王に見ていただくのを数か月に一度ほど、や
らせていただきます。」

一応、成功なのかな？

今夜のパーティーにも出て行けと言われたが固辞させてもらった。アークライト王朝の手の者には「天使」であることを知られないほうがいいだろうから。

その代りに支度金を大目にいただいた。見てみると金貨200枚。これだけの量を簡単に出すとはさすが王というべきなのか。

個人的にはあの王は嫌いじゃないが、国にとって良い王じゃないことは確かだろう。

自ら戦争を起こしはしないが、他の者がやる分には見逃していて、恩寵を保護する方針であつても、恩寵狩りをする輩を潰さない。

もちろん王朝同士の間係でやろうにもできていないというのはあるだろうが、王なのだ、責任は重い。

援助してもらつ以上、ぐちぐちと言つても仕方ないだろう。俺のほうが遥かに力がないのだから。

それに、人族同士や人族と亜人の確執を聞いて、自分が解決しようと思つたのもただのエゴかもしれないし。

上位世界の人間としての責任。

自分だつて絶望的な世界を生み出してきたかもしれないのだからせめてもの償い。

単純にそんな不幸があることが許せない。

っていう思い込みなのかもしれないのだ。

あとはちよっかいにも気を付けなければならぬ。

ハーヴェイ側の偵察ならまだかわいい方で、アークライト側から暗殺者が来る可能性もあるのだから。

まずは支度金で大量の食糧と、居住区を作るための資材や道具、そして下見に行ったパステル 空を【怪鳥の翼】で飛べる によると、王国とブリトニア島の海峡は荒れ狂うことが多く、普段から潮も早いとのことなので、ある程度丈夫な船も用意しなくてはならない。

俺たち4人ならパステルによって運んでもらえばいいが、これから人や亜人を受け入れるつもりなのだ。船がないと輸送なんてやってられない。

宿に帰り、【電心】で呼んでいたレンさんとアイリスに王城でのことを話し、今後の計画を立てる。

船は中古で買うのが一番安いらしいが、『固定化』の魔術をかけてもらうと一気に費用があがる。新品を買うよりはましなのだが……。俺たちには地属性魔術を使える人がいないのは、身近な生活環境をやりにくいということ、のちのちにも困るだろう。

まず、レンさんにはエルフ関係の中でも小さく潰れそうな集落から、移りたいと思っっている子をスカウトしてもらおう。

パステルは先にブリトニア島にまた行ってもらって、資材の運び込みを少しと、島の測量を任せ、最初どこに拠点を築くかを選んでもらう。

島の南に入った後も、居住区を広げるために北進していく過程で魔獣や亜人と接触する可能性が高いので、そのことについても調べてもらう予定だ。彼女の【魔獣通じ】により共存できるものもいるかもしれない。

アイリスはローブで顔を隠しつつの情報収集くらいだろうか。あと魔術の練習。

「もつとお兄さんの役に立ちたいです！」って言うてくれるのはうれしいのだが…。

そして俺は、余った金で少しずつ奴隷を解放しようと思う。いきなりたくさんは無理だけど。

あと無人島に来てくれない人もダメだ。

できれば買ってそのまま好きなのところに行きたいという子は路銀を渡してあげる、というところまでしたいのだが、正直そこまで余裕はない。

それに加えて、オリヴァー・ハーヴェイ王にも「貴重な恩寵を保護」という名目で援助されているのだから、最初はできるだけ良い恩寵を持ち、かつ無人島ブリトニアに来てくれる子を優先させてもらう。それが一番多くを救えるのだ、と自分の心に言い聞かせて。

それと亜人はエルフ以外も手に入れたところだ。他の亜人を勧誘する時にやりやすいだろう。

宿に戻ってきて新たに部屋を一つとなりに取る。
ぶるぶると震える住人が3人増えたからだ。

この三か月、奴隷市場の相場も調べているので、足元を見られること
となく商談をすることができる。
大抵、それなりの恩寵もちの奴隷は金貨5枚はする。もちろん恩寵
の種類で大きく変わるが。

今回買ったのは、青髪の兎人族の少女フラン、と赤髪の猫人族の少
女ミア、茶髪の人族の少女ステラ。

フランは【魅了】を、ミアは【魔獣使い】、ステラは【体内魔力
行使】を主に所有していた。【根源管理】で視ながらだったので、
さぞ高いかと思っただら、これらの恩寵をもっていることを奴隷商人
に知られていないようで、美しい少女の相場である金貨3〜5枚で
買うことができた。やはり亜人のほうが珍しいから高いようだ。

よほど奴隷にされたのが怖かったのか、名前を聞き出すのにも苦勞
した。

身体が汚された形跡もないのだが。

ちなみに奴隷の首輪や手錠はすでに破壊した。恩寵もちだっと思われてなかったから、【隷属】【従属】【屈従】のどれも刻まれていなかった。まあ高価だろうしね。

そのうえで優しく話しかけているのだが、返事は一応返してくれてもなかなか怯えは消えないようだ。

結局アイリスを呼んで、3人と話してもらったことにした。元奴隷という同じ立場な上に、同性でほぼ同年齢なのだから馴染みやすいだろう。

俺は食糧を買うルートで信頼できるところを探していくことにする。無人島ですぐに自給自足ができるようになるなんて思っていないからね。

夜になる。

今日はレンさんも宿に来て朝までいるようだ。

男と一緒の部屋はどうかと思うが、他の女の子もいるし今更だな。

それに俺は興奮しても身体が反応しにくいタイプなので大丈夫だろう。

今日はお酒をもつてきてくれていたようだ。

友達と飲み明かすのが夢だったらしい。なんてさびしくて健気な夢……こつというのは遠慮なく叶えてあげたいと思う。

だが、完全に酔いきるわけにはいかない。

無人島の開発をどのようにやるかについて、話しても話したりないからだ。

以前パステルにいつてもらった調査では、無人島といってもかなり大きいので人数が増える分には気にしなくていいと言われた。

だがそれも、土地が余っているという話で、その人数分の食糧生産をしなくてはならない。

また、奴隷として捕まっているのを買うために、何かあの島の特産品 食物でも鉱石でもいいので を見つけて、輸入だけでなく輸出もしなくてはならないだろう。

奴隷商人を襲うというのをやりたい気持ちはあるが、奴隷の売買自体は合法。違法なのは無理やり奴隷に落とすことだけだ。だからその場を押さえられなかった場合はどうしようもない。

武力もなにもない島では、あまり大きく王国にたてつくわけにはいかないのだ。

そして農業をやるにも漁業をやるにも鉱山を開くにも人手が足りない。

その人手を増やすにも、先立つ物、お金がない。

そこで一つ浮かんだことがある。
労働力がないなら、作ればいいのではないか？
地属性や金属性の魔術である『ゴレム』。あれは術者が魔力で操っている、生命ともいえないものだが、大目に魔力を込めて命令しておけば、その通りに動くという話だ。

前提条件として地属性の魔術師がいなくてはならないが、今日買ったステラは髪色からもおそらくそのどちらかの属性だろう。となると、明日の朝には【体外魔力行使 地】の刻まれた武器を買うことにするか。おそらく金貨15枚くらいで買えるはずだ。

これくらいは、地属性の魔術が俺たちにもたらす恩恵に比べたら安いものだろう。

それに一度手に入れて俺が壊せば100%吸収できるし、他に地属性に適性のある子が現れたときに、自由に刻むことができるのだから。

あともう一つ。数百年前にとある大魔術師がやったことに、死体に魂を宿らせるものがあるらしい。

レンさんのエルフの里にそんなことを書いた本があったそうだ。死体をもてあそぶとされて禁術の中の禁術だそうだが、エルフの集落を周るときに見てきてくれるとのこと。

闇属性の魔術だそうなので、闇属性であり【根源管理】で根源を見れる俺には合っているだろう。死んだら終わりだ、と思っっている倫理観なので死体を使うのにそこまで忌避感はない。医者の見学とかもしたことがあるしね。死んだばかりの健康な肉体を使う実験とかさ。殺人囚を殺した後売ってもらった契約を持ちかければ喜んで売って

くれるだろう。埋葬の手間が省けるのだから。
実際には疫病が蔓延しないためにこちらがちゃんと処理したか確認しなくてはならないが、この世界の人にまだそんな知識はないはずだ。

いつのまにか酒にまどろんだまま眠ってしまっ。

そして夜が明けると、レンさんも俺も床に転がって寝てた。

パステルがもう出てるのマッサージしてもらえないから身体が痛いのを治してくれる人がいない。

彼女は夜も休まずに空を飛び続けているのだろう。
ふと最近、彼女とあまり一緒に行動していないのを思い出す。俺たちが休憩しているときも何かしらの仕事をしてきているのだ。

帰ってきたら労いとして抱きしめて頭を撫でてあげよう、あの愛しい娘のような存在を。

それまでにこちらも準備を進めなければ。

17話 交渉と新たな仲間と（後書き）

王さんのことは覚えておいてくださいな。後でもでてきますから。
この王様は、優しいけど有能ではありません。

眠い時に書くと後で大幅に修正しなくてはならなくなる……。

18話 プリトニア島視察

皆さん初めまして、またはこんにちは。パステルと申します。

まずは自己紹介からですよ。

従者が失礼な態度をとってしまつと、ご主人様の評判にまで影響してしまいます。

仕える者としてはそんなこと許されません。

主人の命令は絶対で主人が全て。それが従者というものです。それが存在意義です。

私の名前はパステル。苗字はありませんが、心の中ではタナカを名乗っています。

この「タナカ」という苗字、この世界の共通語は日本語のくせに、人名は英語風ですので「ツアナク」「ツアナーク」「テアナク」なんて呼ばれてしまいます。

誠に遺憾な事態ですが、うまく発音できないように『設定』されているので我慢しています。

なぜ私の一人称で書かれているのか、なぜ私がいつもの舌足らずな調子ではないのか、そう疑問に思われる方もいらっしゃると思うので、この場で説明をさせていただきます。

まず一つ目。これは簡単です。

ご主人様から無人島ブリトニアの視察の命令を拝命したので、今現在、一人で海の上の空を飛んでいるからです。

正直他の雌いん 失礼、もとい女性陣を置いて来たのは不安になります。なぜかご主人様は私やレン様が誘惑しても欲情してくれないので大丈夫でしょう。

図書館でご主人様に内緒で男と女の生態について調べ、性交渉をする器官も、性的に欲情しやすい身体のバランスや普段からのしぐさなども、片端からインプットして、情報を元にバージョンアップしているのですが、いまだに成果が現れません。

何か足りないのでしょうか？ 顔も今はほぼ完全に人間ですし、身体に間接の人形らしい継ぎ目など存在せず、この世界にいる誰よりも肌をきれいにしているつもりなのですが……。

それともご主人様に異常に抵抗があるということでしょうか。

私は生まれてから家では常に一緒にいたので、ご主人様は肉体的な男女経験は一度もなく、思春期相応の興味はあったことを覚えていきます。その分析結果からすると、女性に馴れる時などなかったはずなのですが。実際に誘惑すると目移りはしてまずし。身体が反応するまでいかないだけで。

二つ目。

生まれてたばかりといつても、人格が芽生える段階に最初からあったのですから、流暢に言葉を話せるようになるのに数か月もかかるわけがないじゃないですか。ましてや、人格が芽生えるまでの20年間の記憶もあるのですから。

ではなぜに舌足らずな口調を続けているか、ですけど、簡単に言えば引っ込みがつかなくなったというところでしょうか。

ご主人様はその容姿の良さと身長の高さ　身長を縮める呪いは結果的に良かった気がします　から人に極めて好かれやすく、アイリス様もハーフェルフのレン様も、依存とはいえ、驚くほどの速さでなついてしまいました。その後も依存が好意に変わるのにそこまで時間がかかることもなく。

あの二人をご主人様が見る目は、アイリス様には妹を見る目も含まれています、実質的には女子、女性を見る目です。

その時に私は思ったのです。私だけが違う感じ方をしてきている、と。それが娘を見る目であっても、特別は特別、オンリーワンです。それが妙に優越感を得ることになり、そのまま『娘を見る目』のきっかけとなっている『舌足らず』な口調を続けることにしました。それが今も舌足らずな口調を続けている理由です。

ただ、最近は娘として見られるのは他の雌い、もとい女性陣に比べて不利だと感じてきましたので、どうしようか迷っています。なにかきっかけがあればいいのですが。

ブリトニア島が見えてきました。

ここに来るのは二回目ですが、相変わらず痩せた土地に、魔獣の多さゆえの暗い雰囲気が見えませんが、見ているだけで陰鬱になる人も多いでしょう。黒い樹も気になりますし。

ここからだと言都に【電心】は全くもって届かない距離で、ご主人様の声も指示も聞けないのが残念ですが、私を信頼してくれたのですから応えねばなりません。

それにしても空を飛べるのは便利すぎます。

鳥以外の生物も全て空を飛べるように進化してきたらよかったです、なんて考えが浮かんできます、それくらい飛ぶという行為は気持ちがいいんです。

もちろん風を切って進むのが涼しいというのもあるのですが、それ以上に、下に見える障害物を全て無視して突き切ることができるのが快感です。

ご主人様の行く手を阻む愚かな魔物を一太刀のもとに切り捨てる時の快感に似ています。

図書館で読んだ『従者道』理想の従者になるためには『』という本には、「主人が不快なものを認識した後には排除するのが三流」「主人が不快なものを目にとめる前に排除するのが二流」「主人の不快なもの世界から全て排除するのが一流」とのこと。

私はまだまだということですね。先はとてつもなく厳しいです。

空を飛ぶという話題に戻りましょう。

私が空を飛んでいるのは、背中に翼を模した銀板を付けて、【怪鳥の翼】を発動し銀板を使って翼をととのえ、私は【軽量化】を発動させてから、翼をはためかせて飛びます。

銀を使っているのは適当な安い金属の中では魔力伝導がよかつたため、元々翼を模しているのは【怪鳥の翼】が解けてもそのままバランスを崩さないため、翼に【軽量化】をかけないのは、あまりにも軽いと風に流され過ぎてしまうため、です。

銀板を背中につけるというのも、翼をはためかすというのも、私が人形であるからこそできるのです。普通の人間が同じことをやるうとしても、そもそも翼を背中筋肉で動かすというのも難しいですし、人間の筋肉強度では空に飛んでも背中皮膚がとれるというスプラッタなことになりかねません。だからご主人様たちがやる時は、金属性の翼をしっかりと身体に固定して、【風読み】で風に乗ることだけを意識するのです。

ちなみに魔術でも空を飛ぶことはできません。一応方法はいくつもあるのです。

しかし、元々作られた翼を魔術で無理やりパタパタさせるか、空中に足場を作り続ける魔術を使うか、足の裏など身体の一部からエネルギーを噴出する形で推進力を得るか、どの方法をとっても、人の身体を支えるのは難しいですし、使う魔力も膨大なものとなります。まいます。

そして致命的なのが、どの魔術で再現しても、大抵の魔術師は同時に一つの魔術しか使えないということです。

一つの魔術を発動させ続けている間に、他の魔術の『概念を注ぐ』など、並大抵のことではありません。よって、魔術師は主にその攻撃力で持て囃されているのに、制空権をとっても攻撃できないなどということになるのです。

これでは嫌がられるのもわかりますね。今でも研究は続けられているようですが。

いつのまにか島の南海岸に着きました。

まずは持っていた荷物を降ろします。

持ってきているのは、主に農具と種です。ここは一から開墾しなくてはいけませんから。

私をご主人様より【豊穰の女神の加護 ラウニプロテ】を刻印して頂いているとはいえ、土地を肥沃にすることができても、何も生えてない土のままでは意味がありません。

この島の調査より先に、肉体的疲労がないこの身体でせつせと耕してしましましょう。

精神的疲労はどうなのかと思われる方がいらっしやるかもしれませんが、実は特に問題はありません。

ご主人様に【吸血】して精神的に活力を回復しているのは事実ですが、そもそも精神的疲労自体ほとんどしていないので、アレはスキップ、儀式みたいなものですよ。ご主人様には聞かれてないのと言ってませんが。

いつも身を粉にして働いているのですから、役得があってもいいは

ずです。

「風よ、三十の弾丸となりて、土を返しなさい、範囲指定前方正方形^{エアフレット}20m、風弾！」
魔粒子を収束、支配し、練った魔力を前に出した右手の先30cmほどに大きく纏め、詠唱を鍵として概念を注ぎ、最後の魔術名とともに魔術を解き放ちます。

風が唸るゴウツという音の後に

『ドンツ！ドンツ！ドン！』

と風の弾丸が前方の地に突き刺さります。

砂煙が舞い上がり、視界が閉ざされます。もうちょっと遠くに向けてやるべきでした、少しの間何も見えません。戦闘でやったら最悪だったでしょう。少し気が緩んでいたのかもしれませんが。

砂煙が消えた地面はといいますと、

ある程度は土を掘り返し柔らかくできたようです。

土や金属といった、質量をもつものと相性がものすごく悪い風属性の魔術にはうまくやれたほうだと思えます。地属性の魔法は、風と光を得意とする私にはほとんど使えないのがつらいです。

このまま魔術の練習ついでに『^{エアカッター}風斬』や『風弾』で地道に耕しても

いいのですが、時間はかからないならその方がいいでしょう。

よって【錬金】によって無理やり土を掘り上げてしましましょう。手を両手の平でパチンツと合わせて、地面に触れ【錬金】を発動させ、前方5mくらいの土を上に向かってほぐします。

ちなみに合掌してから【錬金】するのがご主人様によると『浪漫』らしく、私もそれになっています。

あとですね、『風弾』の詠唱は完全にオリジナルです。

レン様には風情がない、伝統がどうのこうのと不評でしたが、『概念を注ぐ』にはより強固なイメージが必要とのこと。でしたら効果範囲や実際に起こす現象を詠唱した方が合理的だと思いませんか？レン様によると、一般的な『風弾』の詠唱は『風よ、精霊の風よ、その身を貫くものとして顕現せよ、エアブレット！』だそうです。こんな詠唱だから、同じ『風弾』といっても、個人個人で形が変わってしまうのです。『貫くもの』では個人のイメージで、針や槍、刺殺剣のような形状まで幅広く、効率の悪い形になってしまいます。

私とご主人様は『弾丸』の形をしていますから、『弾丸として』という詠唱で銃に使われる弾丸 スパイラル回転をするようにライフリングが刻まれた物 を思い浮かべることができますが、他の人が使ってもできません。まずは効率のいい形状を知ってもらわなくては。

私の『風弾』はレン様が驚き、信じられないと眩くほどの威力をしているのも、全てご主人様から得た上位世界の知識のおかげです。最初この世界に来たときは、よく泣き言を仰られていて、聞き役に

徹していた私には、元素記号や兵器についての知識を頂けたのです。これは他の女性陣に対する圧倒的なメリットと言えましょう。この世界の常識に染まっていると新しく理解するのは難しいでしょうから。

ちなみに、ご主人様は非合理的な詠唱も「これも嗜みだよ。」といい笑顔で仰ってました。できる男は劣った方法であっても受け入れてあげる度量があるんですね。感服です。

『中二病』がどうこうと言っていたのには首をかしげましたが。

さてさて、単純作業で耕すのが終わりました。

【錬金】で土をひっくり返したあとは、農具でせっせと耕しました。いつのまにか日が暮れていましたが、【夜目】を持つ私にはあまり関係ありません。

朝、海の近くですので東の日の出がよく見えます。

長方形に横2km縦3kmの畑ができました。邪魔な木は『風刃』でなぎ倒し、【錬金】で根っこごと掘り出して処分しました。

速度重視でやったので粗いですが、私の恩寵技能で後は十分でしょう。

【豊穡の女神の加護】を発動。

私が畑を歩き、見るだけで土が歓喜の声をあげ植物が貪欲に育ち始めるのが見えます。
いまから種まきです。

これは力技をやるわけにはいかないので時間がかかります。

ここに来てちょうど一日が経った夕方。大方第一陣の農作業が終了したころ、【鬼蜘蛛糸生成】と板で作った鳴子にひっかかる音が聞こえてきました。

【鬼蜘蛛糸生成】は弾性が低いので罨をつくりやすいです。

【犬嗅覚】と【蝙蝠聴覚】を発動させ、索敵を開始。

……すぐ見つかりました。背の高さから考えて四足歩行の動物が8体。

雑魚ですが、せっかく作った畑に入られるのも業腹なので、早めに狩りにいくとしましょう。

ちよつと離れているので【電心】【魔獣通じ】でメッセージを送りますが無反応。持っていないのが普通なのですが、やはり相手の魔獣は【電心】をもっていないようです。

次にある程度近づいてから「その獣、ここから先は通しません。引き返しなさい！」と声を出しながら【魔獣通じ】を使います。これによって相手が人語を介さなくても意味は伝わります。

『エサ。腹減った。喰う。』
どうやらコミュニケーションする気はなさそうなので一瞬で葬ってあげることになりました。飼うにしても今はエサがありませんし。

何で殺そうか、などと考えていると8匹のハイウルフが陣形も何もなく闇雲に飛びかかってきました。

私の魔力支配空間は全方位だと6mほど。間合いに入ってくるのを待っていると撃ち漏らしの攻撃を食らって、服が汚されるのもいやですね。

【戦乙女 ヴァルキュリエ】 【換装】 発動

普段使う仕込みナイフではなく、身体の内部に入れている鋼鉄製のソードを【換装】で右手の先と入れ替えます。これで剣をもったことにより【剣捌き】が発動。【戦乙女】の効果で身体が血を求めて興奮します。

相手との距離は最短で10m、向上した身体能力でバネのように蹴りだしソードで頭を突き刺し、そのまま空中を飛ぶ数瞬に『風壁』を目の前に発動、足で空中の『風壁』に着地し、身体をひねって次の目標に向かって弾丸のように飛ぶ。今度は三匹ほど固まっていたので目にもとまらぬ速度で剣閃が光り首を落とす。

後も同じ。血が流れるほどに身体能力があがる【戦乙女】により本気で逃げようとするハイウルフに追いつき首を刎ねる。

わずか15秒。少し開けた広場には転がる物言わぬ亡骸8つと、中央にてソードを死んだハイウルフに突き刺しながら持ち上げて血を浴びている、純白の髪が紅く染まった妖しい美少女。そんな光景を残すのみとなった。

「ふふ、ふふふ、あははははっ！ 素晴らしい！ この身体は！
Gがかかっても気持ち悪くならず、切り裂かれても痛みでひるむこ
となく、足がちぎれたならその辺の石を足にすればいい！ 劣等な
人種や亜人など比較にならない！ あははははっ！」

ご主人様は別ですけど。

「【戦乙女】は使いすぎるとまずいかもしれませんが……気分が高揚
しすぎてしまいます。ご主人様にはこんな戦闘狂のような姿を見せ
るわけにはいきません。制御できるようにならなくては。」

つい独り言がでてしまいました。

まあこの場はもういいでしょう。

即刻、農場に侵入されないように柵、いや壁を作ることにしましょ
う。

私のご主人様の元に戻ってる時も荒らされたら嫌ですもの。

既にブリトニア島にきて二週間が経ちます。

それなりに開拓できました。空から見ると6分の1くらいは切り開けたと思います。

森は極力そのままにしたので、やりにくい作業が多かったです。

まずは南の海岸　　上陸したところです。王国に一番近い場所の港。

とはいうものの、発着場が伸びているだけです。最初に大きな船で来ることもないでしょうから、海が深いところにまで伸ばしていません。

森の木をあまり使えなかったので、落ちてる葉っぱや枝などを【錬金】して木材に変えて補いました。後は石や大量にある砂を【錬金】で岩にして補強しました。【錬金】で原子配列を変えるのには時間がかかりかかってしまいましたが、上位世界では不可能なことなので我慢します。

失敗してもすぐに直せるので突貫工事です。この世界では魔術や恩寵で気軽にできるから、細かい科学技術が進まなかったのでしょうね。このアンダーワールドに来てからご主人様も物ぐさになっ
てきている気がします。

海から砂浜を越えると高い壁があります。

薄いので防御力はありませんが、風で砂が飛んでくるのが嫌だったので作りました。木を砂浜の近くにもつと残しておけばよかったです……失敗でした、さすがの【豊穡の女神の加護】で木の苗を見ても、数週間では大人の木にはなりません。

木でできた門をあけると、そこには広場があり、左手には居住区用の空き地、右手には公共施設を置くための空き地があり、奥には広大な農場が広まっています。家畜用の放牧地帯なんかも、柵で囲んで作ってありますが、ご主人様たちが来てからの完成になるでしょう。

広場には、魔獣から剥ぎ取った様々な腐りにくい部位と、探索中に見つけた石なんかを置いています。【ルートマスター根源管理】をもつご主人様ならば、恩寵が刻まれているものや、貴重な鉱石がすぐにわかりますから。私の熟練度の低い【鑑定 鉱石】ではそんなに貴重なものはなかったと思います。

そして農場の奥には、切り開かれていない森との境に、厚い壁が横に長くそびえ立っています。

これが森からやってくる不逞の輩、魔獣対策です。あれから二週間、魔獣が沸いてくることこの上ないです。一匹見たら10匹はいましたよ。恩寵をもっていない魔獣が多かったので瞬殺でしたが。あまりステータスも上がらなかつたです。

ちなみにこの壁は研究中の魔法陣を使いました。立体魔法陣は自分で作るには5年ほどかかりそうですが、平面魔法陣は大体理解し、オリジナルを作れるようになりました。これでご主人様に教えて差し上げることができません、手取り足取り密着して。

魔法陣のしくみは、描くことによつて、詠唱による言葉よりもより強固なイメージを浮かべて『概念を注ぐ』ことができるようにする、というのは当たっていたのですが、ある現象を知らない人が魔法陣を使えばその現象を起こすことができるのはなぜか、その解析に時間がかかってしまいました。

答えはなんのことはない、現象が細かく魔法陣内で説明されていたということです。不思議なのは、魔法陣を使って未知の現象を起こす時に、魔術を発動する時には術者は知らないのだからもちろんその現象をイメージしていないのに発動していることです。つまり現象の知識が魔法陣から術者にフィードバックしないのです。それなのに『概念を注い』だことになっているのです……世界を誤認させるということでしょうか？ 魔術には私もご主人様もたどり着けていない裏がある気がひしひしとします。

私達はイメージをするのが、イコール『概念を注ぐ』ことだと思つてましたが、おそらく一つの手段に過ぎないということでしょう。

詠唱の例でもわかると思いますが、魔法陣に弾丸をイメージしろと書かれていても、弾丸を知らない人は弾丸を生成できない。しかし魔法陣に弾丸の形状を説明してあれば使えるようになります。この点で詠唱よりも優秀ですね。

デメリットは応用性のなさでしょう。直前に書き換えることなどで

きませんから。詠唱や無詠唱なら、発動直前に効果範囲を変えることもイメージを上書きすればいいので可能ですが、魔法陣は書くのに時間がかかってしまうので。よって魔法陣は大魔術向きといえるでしょう。

あとですね、魔法陣を描ければ人の体内に描くこともできるみたいです。ご主人様のように強く根源に刻むことは無理ですが、ご主人様が気づいておられるかはわかりませんが、ご主人様に刻まれた呪いもおそらく魔法陣みたいなものです。天使（仮）だったので根源に直接刻まれてしまったようですが。

まだ魔法陣を物に描くくらいしか一般にやられていないようですが、奴隷化の魔法陣 命令に従えないなど が人に魔法陣を描ける事実と共に広まったら大変なことになるかもしれません。

横一面に広がる壁を作った魔法陣は基本的に詠唱と同じで、属性、性質、現象、結果、範囲を合理的に入れこんだものです。小さい文字を並べて線と見立てて、その線で図形を描きます。この図形は一般的な六芒星を円で囲んだもの。何でも魔力同士が反発せず、むしろ力を増幅しあう書き方もあるのだとか。要研究でしょう。増幅を高めるのが立体だと細かい計算が必要になるから、立体魔法陣は作るのが難しいのだそうです。

他にも、壁に近づかれないように、森の中に大量の獣避けトラップを張り巡らしています。

これはご主人様たちと本格的に移住してきた時には注意してもらわねばなりません。

以上を終えて、今は帰路も終盤にさしかかっています。
早く帰ってご主人様に報告しなくては。

そして二週間の間、考えました。舌足らずな口調を続けるべきか否か。

結論。止めます。やはり娘と認識されている間は一步負けているでしょう。私も一応ご主人様と同じ二十歳、子供でないのですから。

こうして王都の近くの森に降り立ち、逸る気持ちを何とか押さえつけ、優雅さを失わないようにご主人様がいる宿へ向かいました。

なぜか胸騒ぎがしたので、走り出します。ご主人様に危機が迫っているのかもしれない。

……果たしてその予想は当たることになったのです。悪い方に。

18話 プリトニア島視察（後書き）

パステル視点楽しかったです。

パステルの現時点での保有恩寵技能を手に入れた順に列挙。

【傳く者 サーヴァント】 【紅茶淹れ】 【短剣使い】 【魔力貯蔵】
【体外魔力操作 颯風】 【人形師】 【速読】 【ひとり狼】 【犬嗅覚】
【目利き 果実】 【鑑定】 【熱波】 【衝撃】 【無音】 【蜘蛛糸作成】
【糸繰り】 【麻痺毒 弱】 【再生】 【強酸生成】 【打撃耐性】 【発
超音波】 【蝙蝠聴覚】 【風属性耐性】 【吸血】 【雑食】 【森林闊歩】
【疲労軽減】 【剣裁き】 【戦乙女 ヴアルキュリエ】 【豊穰の女
神の加護 ラウニプロテ】 【電心】 【錬金】 【料理】 【率いる者】
【媚薬生成】 【棍棒使い】 【魔獣通じ】 【思考強化】 【集中力強化】
【魚鱗生成】 【水泳】 【水中呼吸】 【槍使い】 【鑑定 鉱石】 【鑑
定 宝石】 【鉱脈探索】 【屈従】 【体外魔力行使 氷】 【体外魔
力行使 風】 【体外魔力操作 颯風】 【魔力性質変換 雷】 【威圧】
【爪攻撃強化】 【牙攻撃強化】 【魔術耐性 雷】 【鬼蜘蛛糸生成】
【麻痺毒 強】 【捕食者】 【狼の王】 【夜目】 【換装】 【自動修復】
【魔術耐性 火】 【風読み】 【軽量化】 【怪鳥の翼】

19話 王都での最終準備とミリア（前書き）

王都での準備編が3話ほど

19話 王都での最終準備とミア

今日は王都最終日の予定。

パステルが出てから二週間だ。

すでにブリトニア島への陸路で食糧を手配してあるし、船は中古のものを【固定化】して使うことにし、ブリトニアから一番近い港街パリスで着水している。俺たちが乗る馬車はレンタルしており、気性の荒い馬型魔獣ケンタウルスを捕まえてきて、ミアナの【魔獣使い】で引いてもらうことにしている。

もうそろそろパリスに、一緒に先行してくれるエルフ族十数人や、フランの兎人族の村のもの、他にはミアの猫人族の集落のもの、ステラの村の人族が30人ほど集まってきたはず。

準備は万端。

あとはパステルを待ってから、王城に着ているカルロスさんに挨拶をして出発だ。

というのだが……

「クロノ様あ、今日は私と一緒に魔術の練習しましょうね？」
「だめよ！ クロノとはあたしが昨日から約束してたもの！」
「あわわ、二人ともご主人様がつぶれてますよ」

どうしてこうなった。

発言はステラ、ミア、フランの順だ。

いま俺はベッドから降りようとしたところをステラとミアにのしかから「えいつ」ってフランも増えたよ！

俺の身体は160cm…ミアとステラのが大きいのに上に乗られると身動きできない……
体重は決して重くないんだろうが、俺が筋力なさすぎて状況を覆せない。

この二週間前に買った奴隷三人娘に異様なほどに懐かれましたが……
頼られることは嬉しいが、こんなにベタベタしてくると、奴隷にされたときの影響が残ってるんじゃないかとか、そんなことを気にしてしまう。

ドアを叩いて「クロノさんー？ 入りますよー」と言って部屋に入ってくるのはスタイル抜群ハーフェルフのレンさん。一応4歳年上なのだが、全然そんなふうには見えない、しぐさが子供っぽい人だ。

「……セルヴィ、あの三人をどかしなさい。」

レンさんはこちらを見て、いつもの無邪気な様子からは想像できない底冷えした声で、傍らに立つ黒髪の少女に指示を出す。

侍女服を着たその少女は表情を変えずにトコトコと近寄ってきて、遠慮容赦なく三人を俺の上から取り払った。

「ありがとう、セルヴィ。」

いきなりの行動に悲鳴を上げて抗議する三人娘を横目に、俺を救ってくれた少女の黒い頭を撫でる。

そうすると少女は少しうれしそうな表情をした後に、礼をして後ろに身を引いた。

「クロノさん。私は家から魔道具を持ってきてあげたといいますが、随分と良いご身分ではなくて？」

何やら口調がかわっているレンさん。俺の目はその腕組みして強調された胸に行ってしまう。

「ちょっとちょっと！ クロノは悪くないわ！」

そこで般若を背負っているレンさんに、啖呵を切るミアの姿が！

しかし口調ははつきりしていても猫耳は萎れて尻尾は丸まっているので迫力が半減だ。

「それに若くない人はお呼びじゃないです。」

びきっ。

空間が凍りつく音が聞こえる。

「誰が年増ですってー!?!」

余計なことを言ったのは。三人娘の中でもっとも積極的なステラだ。そのきれいな茶眼を細くして言い切ったのだ。

そしてそれに言われてもいないことを幻聴していかるレンさん。

レンさんは26歳だから確かにここにいる誰よりも年齢は高いけど、エルフは20歳くらいには成長がしばらく止まるといっし、ハーフェルフも同じようなものだろうから、気にしなくてもいいと思うのだが。

「レンさんは若々しいし、きれいだから大丈夫だって。」
パステルの次にスタイルが良くて、パステルは自分で自由にできるのである意味反則だが、胸に関しては一番大きいのだ。身長は156cmで、三人組で一番低い14歳のフランと同じくらいの身長であるにも関わらず。

しかし年齢を気にしてしまうのが女性の性なのだろう。

「実際に若いです！ それにナチュラルに口説かないでください！」

顔を真っ赤にしながら未だに肩をいからせるレンさん。

落ち着いて話を聞くと、そろそろパステルも帰ってくるだろうから、渡しきつてなかった魔道具を持ってきてくれたとのこと。

あの王都の家は撤去してしまうと言っていた。元々思い入れがあったわけでもなく、むしろ悪い思い出ばかりなので、のちにブリトニア島から王都に来る時には新しく家を買うか作るかしようだとき。

それと、この二週間で15人ほどのエルフは誘えたそうだ。王国に残っていたのは、二つの名門である『白森の一門』『青霧の一門』の下で肩身の狭い集落が多かったそうで、様子見も多く、島がうまくいけばすぐ来てくれるだろうとのこと。

持ってきた魔道具のうち、便利な恩寵が刻まれたものは壊して吸収させてもらった。

得たのは【農業】【拡声】【光源】【鍛冶師】だ。

とくに【鍛冶師】は重宝しそうな気がする。

さて、二週間で変わりすぎた状況について説明しよう。
侍女服少女セルヴィは後で説明するとして、

奴隸三人娘については手っ取り早く記憶をひっぱりだすことにする。

最初の日は隣の部屋でアイリスと共に三人は疲れたのかぐっすり眠ってしまった。

次の日の朝、いまだに恐怖しているようだったので時間が必要かと思い、またもアイリスに話し相手になるように頼んで、俺は【体外魔力行使 地】の刻まれた恩寵武器を買いに行くことにする。

王都一番の武器屋で金貨28枚で目当ての品と【体外魔力行使 闇】を買ったあと、東西に走る大通り『王の道』で露店市をやっていることに気づく。

普段は邪魔になるから露店はないのだが、今日は特別の日らしい。

こういう場には、恩寵が刻まれていることを知られていない掘り出し物が安くでていることがあるので、覗いてみることにした。

……やはり【根源管理】で恩寵が見れるというのは圧倒的アドバンテージだ。【根源看破】をもった人間の給料が大商人を超えるというのも頷ける。その物についている恩寵技能に気づくかどうかで価値が大きく変わるのだから。

手に入れたのは【固定化】がついた銀の腕輪と、【体外魔力行使火】だ。さすがにこれだけレアな恩寵が刻まれているとなると物自体もいいものでできていて、それなりに値が張ったが、武器屋で買うより全然安かった。

普段めつたに出回らない【体外魔力行使】を三つも手に入れることができた。運を一か月分くらいつかってしまったかもしれない。

【体外魔力行使 闇】は火や地よりもはるかにレアであるし。実際に金貨19枚もした。

その後、三人娘に似合いそうな小物を探してあげることにした、あとでプレゼントしよう。

昼に、5人分の昼食を買って、【軽量化】を自分ごと発動して持って帰る。

男と女が逆かもしれないが、まずは胃袋をつかむのが重要かと思っただのだ。

「アイリス、フラン、ミア、ステラ、おとなしくしてたか？ 昼ごはん買ってきたから一緒に食べよう。」

「お兄さんっ、子供扱いはやめてくださいって言ってるじゃないですか。」

アイリスが返事。他は無言だが身体が震えている様子はないな。

そしてみんなで卓を囲んで昼食 肉まんのようなものを食べる。無言で。

ある時ミアが口を開いた、猫耳をピコピコさせて。

「ご主人様……買う時に言ってたことは本当なんですか？」

「俺の呼び方は好きな呼び方でいいよ。そしてその質問の答えはYESだ。」

「でも、ほんとにできるんですか？」

次に発言したのは茶髪の人族ステラだ。

「そのために動いているよ。そして今は移住する島の視察に行かせている。俺の従者パステルが帰ってきたら俺たちも全員ブリトニア島に行くつもりだ。」

「あの……それって、私の知り合いも誘っていいですか？」
今度は14歳で最年少の兎人族の青髪少女フラン。

「ああ、もちろんだよ。俺が構想する国家は最初は小さいけれど、貧しい人や虐げられた人を受け入れる。でも最初の方はあまり派手に動くわけにはいかないから、信用できる人にだけ話してね。」

この子たちも俺が奴隷を買った時にした話は気になってたみたいだ。そりゃそうだかもな、こんな世界で弱者を救おうとするなんて、よほどの善人かバカくらいだろう。

俺の場合はおそらく後者だ。それもエゴでの救済。

昼食の後、少し休憩した後、買ってきた彼女たちの新しい服を着てもらい、まだ説明していなかったことを説明する。根源なんかについて也十分知ってる子と知ってない子がいるからね。

なぜこんな酔狂なことをするかは、俺が天使みたいな存在だからということにしといた。違う世界からやってきたから正義感に駆られました、よりはまだ納得できるんじゃないかなろうか。

そして俺特有の恩寵技能の説明の後、今日買ってきた【体外魔力行使】などの刻まれた道具を壊して吸収するところを見せ、次は彼女たちに刻印することを伝える。

ちよっと怖がる三人娘。それも胸を触られないとダメだというのだ

から思春期の女の子には厳しいだろう。しかしここは我慢してもらうことにする。

誰からやると聞いたらステラが手をあげたので、地属性のステラには【体外魔力行使 地】と【電心】を刻むことを伝え、右手を伸ばす。

相手もこちらも妙に緊張しているのを感じ取る。
平常心平常心。

そう呟きながらステラの三人娘では最も大きい胸に手を伸ばす。

「んっ。」

即座に平常心が崩れ去った、ステラの不意打ちの喘ぎ声によって。いままでは意識せずに触れて怒られるパターンだったが、今回は最初に説明しているために無駄に意識してしまっただけでやりにくい。眼をつぶり、ステラの根源と自分の根源を見ようとすると、緊張のせいか霞がかかる。

なんとか集中しようとして、

「あんっ！」

いつのまにかぎゅーっと強く掴んでしまっていた。

アイリスは静かに怒りを放っているし、他の二人は目をちらっちらつと向けながら顔を赤くしている。

もう勘弁してください。

俺は土下座した。

お互いに馴れるまで【恩寵刻印】はやらないことにした。

この日はきまらずいまままで一日が終わってしまった。

次の日の朝、早い時間にミアが着替えて宿の外にでていくのを感じた。いつもは遅いのだが今日は昨日の影響か、眠りが浅かったのだった。

逃げられるなんて思っていないが、一応見に行くことにする。猫人族らしいバネの強さでどんどん距離を離されていくが、追いかけることができた。王都の外に出て、森の方に向かっている。そこには魔獣がいるかもしれないのに。

案の定、ハイウルフがでてくる。ミアも剣をさげているが、弱いとはいえ魔物に18歳の女の子が勝てるのだろうか。

と想い、俺も逃がす時間稼ぎくらいはできるように、パステルが生成した麻痺毒を塗った投げナイフを右手に持つ。

しかし最初は唸っていたハイウルフが、ミアが近づくとつれておとなしくなり、触られてしばらくすると、ミアと会話をしだしたのだ。ハイウルフは声をだしていないが、ミアの言葉に対して反応しているようにみえる。

そこでミアのもっていた中階恩寵【魔獣使い】の存在を思い出した。【魔獣通じ】の上位技能で、魔獣と意思を交わすだけでなく、命令を利かすことができるスキル。それがあからここまで大した武器を持たずに来たのか。

その後、ミアが何かを囁き、ハイウルフがうなづいて、お互い数m離れて向かい合い、どちらかともなく襲いかかった。

どうやら模擬戦をしているように見える。
やはりミアはそのしなやかな筋肉とバネの強さを活かして縦横無尽に飛び回り翻弄する。ハイウルフは殴られても大きなダメージはうけてはいないが、ミアにあてられないでいる。

次に剣をもつて挑むミア。素手と違ってなれていないようで、剣の重心に振り回され、ハイウルフの腕がしなると簡単に地面に沈んだ。手加減はしてあるようだが、もう戦闘が行えないだろう。

ここまで、と想いミアの元へ向かう。

ミアはぎょっと驚いた。

「ど、どうしてクロノ、様、がここに!？」

「クロノ、でいいよ。つい起きちゃってね。ところでなぜ剣を？」

「はい……元々獣人族は素手で戦う人が多いのですが、他の武器も使えたほうがいいかと思ひまして。特にブリトニアって魔獣がたくさんいるところに行くって話ですし。でもあだし、剣は才能全然な

「いみたいです……。」

たしかに俺よりも剣の扱いに関しては下手だったかもしれない。

しかし俺には、決められた才能を覆す型外れの札ジョーカーがある。

「強くなりたい？ それが他人に与えられた物を元にしたとしても、

」

「はい……強くないと奴隷にされたって殺されたって文句言えないんです。下手なプライドなんてあつたつて意味がない……。」「
そこまで言った彼女の眼を至近距離で合わせながら、確認をとる。
昨日俺の【恩寵刻印】についても根源量についても説明したから、
何をやるのかはわかっているはず。」

これからするのを才能を得るかわりに、他の才能を得られる機会を捨てるということ。

人の内包する根源量に限界があるがゆえに。ここでもらった才能が不必要になつて他のが欲しくなつても、その時には容量がなくて手に入れられないのかもしれない。二度と戻れないのだ。

だから昨日、ステラにすっかり意思を確認せずにやろうとしたのは失敗してよかつたのだろう。

同じ身長なのでまっすぐ目があう。その目には迷いはなかった。

そのことに感服し、目を合わせたまま、右手をミアの胸にあてて、
【恩寵刻印】を発動した。

「……うん……」

すこしだけ反射反応してしまうミア。俺はただ只管ある恩寵をイ

メージし、ミアの赤い根源の海面に具現化する。

「これで終わり。ミア、君の根源には中階恩寵【剣捌き】が刻まれた。すでに君の才能となったよ。後は磨くだけだ。他にも【体外魔力行使 火】と【電心】を刻んでほしいけど、それは後で考えて答えを出そう。」

そう言って、頭を撫でながら、昨日露店市でかった、炎を模した髪留めを猫耳の手前につけてあげる。

そうして、恩寵を得た時の一時的な高揚感ゆえか、顔を赤くして拳動不審なミアを連れて宿に戻った。

20話 王都での最終準備とフランクとステラ

宿に帰ってくると、ちょうど朝食が運ばれた直後だったようだ。湯気のでる料理を眺める。小麦の白いパンに肉と野菜が入ったスープだ。

以前にこの世界では朝食は貴族くらいしか食べないといったが、今となっては俺は三食食べるようにしている。まともに明かりを持てなかったから、早くねて5時前に起きて活動していたときは、朝食の時間などなかったのであつて、光の低位魔術『光源』や『発火』など、日常魔術を一通り覚えた時から、上位世界にいたときのような生活に逆戻りしていき、いまは7時に起きて1時に寝るといふ生活となっている。

今朝の朝食が少し豪華なのは、三人娘の歓迎という意思を表わして、だ。普段は食事の質には気を使っていないのだが、奴隷から解放されたばかりで少しやせている彼女たちには、良いものを食べて健康に戻ってほしいと思う。

やはり女性は健康的な美しさが一番だと俺は思うのだよ。No瘦せすぎ。

朝食中、茶髪のロングストレートをいじりながら、ミアアの方に意味ありげな視線を送っていたステラを横目に見つつも、わざわざ聞く必要もないかと思いい、スルーした。

そして朝食後、ミアアがちょっと俯きつつ話しかけてきた。

「残りの恩寵、あたしに刻んでください。欲しい、です。」

会話の内容をちゃんと聞けば何のことだかわかるとは思うが、勘違いされそうなことをいう奴だ。

「いいよ、すぐやろうか。」

ミアアのやせ気味の胸に手を当てる。彼女はスレンダーという感じだ。最も今は栄養状態がよくなかったためか、痩せすぎだが。

こうして【体外魔力行使 火】と【電心】を刻んだ。

恩寵を得た直後の甘い痺れに身をもたえ、尻尾をすごい勢いで動かしているミアアを抱き上げて、部屋を移る。まずは刻んだ恩寵の説明と、熟練度をあげることの指示、魔術の指導をしなくてはならない。

本格的な指導は三人全員に刻んだ後にするつもりだが。

……そのつもりだったのだが、こちらの話を聞いているかわからない朦朧とした状態のまま、寝入ってしまった。

恩寵を刻む負担をもう少し考えたほうがよかったか……。いつも刻

印する対象がパステルだからつい手軽にやってしまった。

仕方ないのでもたれかかっているミアをベッドの上に寝かしてあげることにする。と、その時に非力故か身体のバランスが崩れ、ミアをベッドの上に放り出してしまっただけで自分も倒れこんでしまった。幸いミアは起きなかつたようだ。疲れて寝ている子を無理やり起こすのはよくないだろう。

『ガタッ』

どうやら最悪のタイミングで出歯亀がいたようである

果たして少し開いた扉からは兎の白い耳は見える。青髪をツインテールにしている兎人族の少女フランのようだ。

「フラン、どうしたんだ？」

「え、えと……私の村の人たちのところにいつ行っていいか聞こうと思ひましてご主人様のところに来たんです。」
なるほど、昨日言っていたな。しかし村か……距離にもよるが、女の子をただ送り出すには危険だな。また奴隷に逆戻りなんてことになりかねないが、どうにかいい方法がないだろうか。

「だめですか……？」

フランの頼みなら仕方ないな。

「でも一人旅は危険だよ。ということで恩寵技能をたくさん刻んであげるよ。」

そういつて近づく俺。フランの青い目が魅力的だ。

「えと、少な目をお願いしたいです。」

「むう、仕方ないな。フランがそういうならば。ではベッドに横になつてごらん。恩寵刻印はする方もされる方も大変な労力を使つてしまふからね。ミアがいい例だろう？」

そしてためらうフランをお姫様抱っこしてミアがいるのとは違うベッドに降ろし、そのまま青色の髪を指で梳く。サラサラとしていて素敵だ。

そのまま手が白くのびる耳にたどり着く。人も獣人もエルフも耳はけっこう弱かつたりする、といいなあという願望。

いつのまにか甘噛みしてしまっていた。そのままペロリとなめる。「ひゃあっ」という声上がるがその声も俺の興奮を増長されるものでしかない。今のフランは俺には極上のフルコース料理にしか見えない。好んで着ている兎人族の民族衣装がふと目に入る。ふむ、これを脱がすまでは前菜か。変な納得の仕方をしたところで、早速着物のような構造の民族衣装の腰にある紐に手をかけはずした。あとは布をはだけてしまえば、ブラジャーなどないこの世界では女性の胸が直で見れる。愛しいフランの柔肌は今までに感じたほどもないくらい靈感的だ。こんな気持ちパステルにもレンさんにも抱くことがなかったのに。下にいるフランは涙目で何か言っているようだが、その涙の輝きすら幻想的で耽美だ。もつと泣かしたくなる、この少女はどんな声で鳴いて泣いてくれるのだろう。征服したい蹂躪したい手に入りたいこの魅力的な少女を。そして俺はフランの民族衣装を一気に

「クロノさん何をやってるんです！」

……誰だ、邪魔するのは。

「レンさんどうしたんです？ 顔を真っ赤にして。落ち着いてください。」

「そちらが落ち着いて正気に戻ってください！」

正気……？

ふと、フランの方を見て、
涙を流して震えるフランに気づき、

現実に戻った。

1時間後。

俺は宿を出ている。

しばらくフランはレンさんが見てくれるそうだ。

今回の俺の暴走の原因はフランの【魅了】の無意識での発動。
熟練度が引くかったがために自分の魅力だけ高めてしまい、本来の
効果である、相手を自由自在に操るほうが出なかったということだ
ろう。

それが原因とはいえ、自制できなかった自分には嫌悪が先立つ。

俺にあんな願望があるとは思わなかった。もちろん男としての欲望
はあるが、年端のいかぬ少女であるフランに対して、無理やり征服
しようという気持ちがあるとは。サディストな傾向はなかったと思

うのだが。

あれだけ強力な恩寵だ、今までも異性相手に発動してしまっただけのように大変なことになったこともあっただろう。そのトラウマを決ってしまったのだ。彼女との関係は修復不可能になるのかもしれない。

しかし、陰鬱な気分で適当に時間を潰し、宿にもどってきた俺を迎えたのは頭を下げたフランだった。

「迷惑かけてごめんなさい。」

俺は一瞬ポカンと呆けるも、即座に謝り返す。

「こっちがごめん！ フランには責任なんてないよ。」

「あー、クロノくん？ フランちゃんの話聞いてあげてくれる？ クロノくん、勘違いしてると思うから。」

何のことかわからなかったが、ひとまずフランちゃんと先ほどの部屋に入った。ミアはまだ寝ている。

「実はですね、【魅了】でご主人様を操ってしまっていたようなんです。」

恥ずかしがりながら彼女が言うには、【魅了】をいつのまにか発動してしまい、彼女の願望というか妄想をそのまま俺に反映させてしまい、操ってしまったとのこと。

つまりだ、彼女は元々妄想癖をもつ少女で、直前にミアをベッドの運び、不慮の事故とはいえ覆いかぶさってしまった俺を見た時から、妄想が広がってしまい、俺がミアを招き入れた時に無意識に【魅了】を発動し、俺の意識を彼女の妄想まで誘導していった。

ちなみに最後に涙を流して震えていたのは、自分がやったこと奴隷が主人を操った　　が許されないだろうという恐怖と、操ってしまったことへの後悔、もう捨てられるんじゃないかという恐れの結果らしい。

まあ……思春期なのだから妄想もいいけど、恩寵の制御だけはしっかりと教えないとだめだな。
もしくは魔眼殺してみたいなメガネでも作るかね。

精神に作用する恩寵技能はほんとに強力だから気を付けないといけないなあ。
最強の肉体をもっているだけでも精神を掌握されたらどうしようもないのだし。

いつか問題になるかもしれないし、対策を考えたほうがいいかも。

この後、仲直りした俺らは昼食を仲良くとり、宿に帰ってきてから恩寵技能を刻印するかどうか、根源には総量があるから、ひとつ才能を刻むということはひとつの才能をあきらめることになる、というのを確認し、フランに【体外魔力行使 氷】と【電心】を刻むことになる。

フ란の属性は水らしいが、氷は補完属性なので問題なく扱えるだろう。

ちなみに、フ란には珍しい真珠を使ったブレスレットを贈った。

残りはステラのみだ。

ステラだったが、こちらから何もアクションすることなく解決した。

ミアとフ란が次々と陥落したのを見た後、元々魔術に興味があった体内魔術行使を持っているのに気付いていないステラは恩寵を刻印してもらうことを決意してくれた。

ステラの魔術属性は地属性で、生活改善に有用なので助かった。二週間だけで習熟してもらいたいと思う。

夕飯の後、ステラの胸に手を当て意識を身体内部の心臓のあたりに集め根源を見、【体外魔力行使 地】を刻印した。

恩寵を刻印された余韻でへたり込んでしまったステラを尻目に、ミアとフランを呼んで、魔術についてレクチャーする。

彼女たちもこの世界の常識として日常魔術は使えるので、魔力を練る過程までは問題なく、魔力を練れる範囲が練習することに増えていくのに驚いていた。スキルなしでは周囲50cmほどが限界だったそう。やはり恩寵のあるなしは大きすぎるなあとしみじみ。

あとは魔術の使い方だ。日常魔術は詠唱も短かったり詠唱破棄が当たり前で、効果にもほとんど違いがないのでそのままにするとして、中規模以上の魔術は俺とパステル式を教えてしまう。

レンさんがいると古き良き魔術を教えられてしまうので……いや、悪くはないんだけどね、どうしても効率が違う。

俺とパステルの詠唱の基本は、まず属性を呼び、使う魔術の属性を認識させ、次にどのような形状となるか、そしてどのような結果を起すか、最後に範囲指定、という順番だ。ちなみに一番最後の魔術名は詠唱の中には入っておらず、『概念を注ぐ』スイッチみたいなもの、それを叫ぶまでは魔術は発動しないので、いくらでもイメージを変えることができる。

詠唱の例としては、

アイススレリア

『氷よ、十の槍となりて、中空より降り、指定目線、氷槍！』

モールド

『地よ、金よ、媒介となりて、変形させよ、前方3m、形成！』
などなど。

どれかを省略することもできるし、逆に何十語という単語で説明しつくしてもいい。それで、イメージがより強固になるのなら、だが。高速戦闘中は詠唱破棄どころか無詠唱で打つのが普通だ。

範囲指定も細かく指定してもいいし、目線の先という指定でもいい。とにかく詠唱してる本人の問題だ。

俺はできるだけ言葉でイメージできるようになれば、他の魔術に応用するときも、詠唱の単語を入れ替えるなどして臨機応変に使えるようになると思っっている。

よって、『媒介となりて』や『中空より降り』という言葉と、現象を関連させて覚えさせるのが目的だ。

レンさんと違って、この世界の一般的な詠唱を知らない彼女たちは、素直に俺ら式の詠唱を覚えてくれて、今は練習中だ。

小さい魔術であれば宿の中で壊さないようにやり、効果が大きい魔術を練習するときは王都の外にでて、他人に見つからないようにやる。

もし発見されて、野良の魔術師だとバレたら報告されてめんどろなことになるだろう。その時はレンさんのように冒険者ギルドに魔術師として登録してしまえば、手を出されることはなくなると思うが、どちらにしろ変に目立ってしまうのは否めないし、奴隷商人も売った奴隷が魔術を使っていれば、俺は怪しまれるかもしれない。魔術が使えるかどうか、つまり【体外魔術行使】をもっているかどうかは、捕まえる前に確かめるからだ。というよりは魔術師だと捕まえられるわけがないからというべきか。もし捕まえても【屈従】などが調金された首輪がないと抑えれないわけだし。

ステラの地属性もミアの火属性も、パステルと俺、そしてレンさんとアイリスにとっても、苦手な属性　対属性　なために教えられないことが多い。よって本の絵や、もしくはは地面に絵を描き、口で説明して現象を教える。

俺は上位世界で暇な時間に少し嗜んでいたオタク文化が浅いとはいえあるし、オタクでなくてもファンタジーな魔術は飽きるほど見ているために、さまざまな魔術が思い浮かぶのだが、普通に村で生活していたものにとっては、空中や地面から槍が飛び出したり、何も無い空間が氷漬けになるのは非現実な光景　元の世界での俺にとってもそうだが　で、なかなか現実に起こせるものとしてイメージできない。

だから俺やアイリスが手本を見せあっていたのだが、お互い魔術を使いあうのが楽しくて、ついヒートアップして調子に乗ってしまった。

「行くぞ！　氷の17矢！」
アイスアロー

「こつちも！　雷の17矢！」
サンダーアロー

「氷盾！」
アイスシールド

ちなみに戦いあってるわけじゃなく、森の中で木に向かって放っている。

「雷よ来れ、巨神を滅ぼす燃え立つ雷霆。百重千重と重なりて、走れ稲妻、千の雷　！」

「氷の女王よ来れ、とこしえの間、えいえんのひょうが！　そして

おわるせかい！」
大技として、某子供魔法先生の漫画の超上級魔法を叫ぶ俺たち。

ズガン！と木々は簡単に倒れるが、もちろん未熟な俺たちでは大した威力も射程もない。

俺なんて範囲内にあつた、8m先の木を周りの大気を凍らせて氷漬けにしただけだ。木自身は凍っていない。よつて『おわるせかい』でも周りについていた氷が飛び散っただけという湿気たもの。

アイリスは俺よりもだいぶみしたが、それでも雷に変換された魔力を、無属性魔術『魔弾』でたくさん前に飛ばしているだけ。『魔弾』は【魔力性質変換】をもっている、かなりの威力を誇るようになる。

ちなみにアイリスには俺が教えました。

深いオタクになる時間がなかったので詠唱もうる覚えだが……。

えいえんのひょうがとおわるせかいは、エターナルロリ吸血鬼と同じ属性と知ってからは、いつかやってみたいと思つてたんだよね。

範囲も威力も足りな過ぎるけど。

魔力が練れる範囲なら割かし思い通りに魔術を使えるんだが、遠距離広範囲となると魔力が足りな過ぎる。何等かの方法を使つて魔力が届く場所を何倍にも伸ばすか、いまパステルが研究している魔法陣でしっかりと術式を組むかしないといけないだろう。

魔力を練る範囲を増やす方法としては、王都の精鋭たちが相性のいい者同士で魔力を練つてつなげて、全員で全員の魔力を使えるというのがあつたから、魔術を使う範囲を並んで囲えば魔力量的にも射程的にもできるかもしれない。

魔術を自分の肉体に取り込んで、肉体にその魔術の性質を負荷はたぶん無理……そんなことしたら身体が先にバラバラになりそうです

し。

それにこの世界では、熟練した魔術師なら接近戦でも戦士を瞬殺できちゃうから、肉体を強くする意味がなんですよ。固定砲台とはいえ、近距離となったら術式も簡易なもので攻撃できちゃうので。固定砲台といったのは、その場にある魔粒子をいちいち支配しないといけないので、動きながら魔術を使う場合は、その場その場で魔力の練り直しとなるので強くないです。そうでなければ魔術師が強くなりすぎてしまう。魔術師が騎馬に乗りながら迫ってきて、半径10mにはいった瞬間に首を刎ねられるなんてされたら、どんな無双だよって話になりますよ。

よって固定砲台。魔術師との戦いの鉄則は、近づくな、相手が魔力を練れる範囲を見極めろ、全方位から遠距離攻撃して魔力を消費させろ、といったところ。間合いの中に入ってなくても遠距離魔術が飛んでくるのでそう簡単には倒せませんが。もし近距離戦士しかいなければ、剣や装備を間合い外から投げて気をそらして誰かが一瞬の隙をつく、くらいしか勝機がありません。魔術師一人を倒すために戦士20人くらいは必要でしょうが。

そんなこんなで、俺たちがやる見た目が良い魔術や、彼女たちにとってはかつこよく聞こえる魔術名　基本的に英語で、この世界での英語は魔術発祥とされる極東の言葉　に黄色い歓声をあげて、年ごろの少女らしく騒いでいたミア、ステラ、フランの三人娘。

特にステラが魔術について積極的で、どんどん上達していた。逆にフランとミアは、日常魔術も覚束ない獣人族なのでかなり苦労していた。

それでも精いっぱいとりくんでくれて、この日は森がひどい惨状に
なっているのを、やってきたレンさんに叱られるまで続いたのだっ
た。

こうして、仲良くなり、この後も二週間、三人娘の起きているとき
は魔術の練習をすることとなった。

20話 王都での最終準備とフリオンとステラ（後書き）

次回がセルヴィ生誕の話。

主要登場人物紹介（簡易）

人物名／種族／髪色／瞳色
年齢／身長／魔術属性

（大陸歴1843年時点）

田中黒乃／人族／黒／黒
20歳／160／闇氷

パステル／人形／白／赤
20歳／170／光風

アイリス／人族／紫／藍
14歳／151／雷

レン／ハーフエルフ／薄緑／濃緑
26歳／156／光風

フラン／兔人族／青／青
14歳／155／水

ミア／猫人族／赤／茶

18歳 / 160 / 火

ステラ / 人族 / 茶 / 茶
16歳 / 163 / 地

セルヴィ / ホムンクルス / 黒 / 水色
0歳 (16歳相当) / 155 / 闇水

トウル / ホムンクルス / 黒 / 紅
0歳 (16歳相当) / 150 / 闇核

キヨウ / 銀時計 & 守護霊 / 銀 / 銀
約100歳 / 180 / 雷水

21話 王都での最終準備とセルヴィ（前書き）

この辺りから【根源管理】チートの片鱗が。

21話 王都での最終準備とセルヴィ

フラン、ミア、ステラの三人娘とアイリスが外へ魔術の練習行っている間、俺とレンさんはやることがあった。今は久しぶりにこちらからレンさんの家にやってきている。もうだいたい物がなくなってきた。

今日ここに来たのは、エルフの集落から闇属性魔術の禁書をもらったからだった。本当は持ち出し禁止だが、その集落でブリトニアに行ってくれる人とグルになり、必要だからという名目でもらってきたのだ。

一応置手紙はしてきたとのこと。埃の山に埋もれていたので多分誰も見ることがないだろうが、とも言っていたが。

持ってきた方、依頼した方としては文句は言っていられない。すぐに読んで解析に入らせてもらおう。

これからやるのは、魔術によるアンデッド作成、特にゾンビとスケルトンの作成だ。

そのためにこの家の一部屋に、死刑囚の殺したばかりの死体をいくつか買い受け、腐らないように部屋の壁を凍らせている。もうすぐ廃棄するのだから部屋をボロボロにしてもかまわない、とのお墨付

きをレンさん本人にもらえたので。

闇の禁書は、一見何の魔獣の皮だかわからない、光沢のない黒色の分厚い皮をしていて、これまた黒いベルトでぐるぐる巻きに本が閉じられている。本全体に魔法陣が刻まれていて、闇属性の持ち主じゃないと開けられないようになっていて。

本の最初の方には注意書きが書いてある。

『根源を魔術で扱おうとするゆえに禁術とされた。生者を用いるために、使う時は見られないように気をつける。』といったことがずらずらと書かれているが飛ばす。

それよりも『根源を魔術で扱う』という部分が気になる。【恩寵刻印】【根源管理】によってこの世界の誰よりも根源に身近な俺には相性が抜群の魔術なんじゃないだろうか。

……果たしてそれは正解だった。

ゾンビ作成とは、死体が持つ根源　人だったのでそこらにある物よりも多い　に必要な情報を刻むことによつてできる。

人格がなく、命令を聞くだけのゾンビを作りたければ、闇属性の浸蝕性をもってして、人格がない人間の根源の情報をうつし、血によつて創造主を認識させるだけでいい。動くためのエネルギーは死体に残っているエネルギーや、生命力が詰まっている血を吸うことで補つて動き続けることができる。

禁術となつた主な理由は、傀儡となるゾンビをつくるために、人格がほばない赤ん坊が薬などで精神的に壊した人間が必要で、根源を切り取つて移植するとき殺すことになってしまふからだ。根源の

内部の細かい状況がわからないがゆえに、大雑把に根源を切り取って移してしまうために死んでしまうし、うまくいかないときも多々ある。

大昔に大魔法使いがアンデッド千人の疲れ知らずの軍勢を使ったという表記が残っていたが、一体いくつの亡骸と生者を犠牲にしたのか想像もつかない。

根源を移すなどと簡単にいったが、実際には超上級魔術、魔法でも大魔法と呼ばれるほどの難易度のものだ。天階の恩寵でなくてはできないことを魔術で再現するのだから。よってただ根源を移す作業以外にもさまざま　根源を身体から遊離しやすしたり、定着しやすくしたり　なことを闇魔術でサポートする必要がある、大きく細かい魔法陣を作成しなくてはならない。

しかしこれらの条件は、闇属性に親和性を持ち、極めつけの【根源管理】と【恩寵刻印】をもつ俺には、比較的楽にできそうだ。

第一に、俺は人の根源の状況を誰よりも詳しく見れ、見てきたのでどこにその人物の人格が入っているかも、人間を人間足らしめる要素がどれなのかもわかっている。よって無駄なところを切り取ってしまう心配もないし、そもそもどんな形状をしているのかがわかっている。なので人から切り取る必要などない。観察させてもらえば十分だ。

第二に、根源を移すなどしなくても、【恩寵刻印】によって恩寵を刻むのと同様に、情報を書き込むことができる。……おそらく生きている者にやろうとすると、人格が二つできて壊れるなんてことになるのだろうが。

以上より、ほぼノーリスクだ。

高度な闇魔術による補助と、血液を渡すのと、恩寵を入れ込むのと

は比べものにならないほど繊細な作業が必要になるだろうが、相応の根拠量を持った物質があれば付喪神化もできてしまうし、パステルのように人形に人格を入れることもできる。

一番の問題は、人格を受け居られる根拠量を持った物を用意しなくてはならない。上位世界から持ち込んだものはいけるだろうけど、ところだ。これは実験してみるしかないだろう。

自我が目覚める前の赤ん坊の根拠は見たことがないので、後日【根拠管理】で覗かしてもらうことにして、今日は死体に俺の根拠を真似て情報を入れることにする。

まず一人の男の死体の根拠を見て、足りない物を探す。

生命の停止、ほぼ全器官の停止、そして記憶や知識の記録や、性格、人格もない。

しかし、死体の根拠には、死体が二足歩行であること、人型であることについての情報は残っていた。

死体の根拠に【恩寵刻印】と【根拠管理】を同時発動して覗き込み、人格などの人間であるための情報が入るべき場所を探す。

のっけからつまづく。人格や記憶をいれる場所。普通の人間だと直方体の箱状。が壊れていたのだ。

仕方ないので、自分の根拠にあるその場所を視て頭の中でコピーし、死体の根拠にその箱を模写するように形作る。そして俺の根拠と同じ黒色の箱ができあがると、そこに俺の、人であるための情報のうち人格を除いた情報を、真似て刻みこむ。魔法陣を描き、魔術を発動。そして指を持っていたペーパーナイフで薄く切り、血を落とす。

きづけばいつのまにか二時間もたっていて、身体がフラフラし、レンさんに支えられていた。

繊細な作業故に集中して時間の感覚が遅くなっていたようだ。

人格を刻んだ死体は起き上がった状態で待っている。これが待機状態なのだろうか。

「手を上げる。」

命令しても動かない。

失敗かという想いがよぎったが、心当たりに気づく。

「右手を上げる。」

ゾンビは右手を上げた。

やはり、命令をちゃんと指示しないために誤作動を起こしたのだろう。

ちなみにゾンビは言語を理解しているわけではない。

血のつながりを闇魔術によって強くしたので、俺とのラインがつかがり、俺の命令を理解できるのだ。だから言葉を出す必要は本来ない。

これで人格がないゾンビは成功といえるだろう。

あとは人格があるゾンビを作れるのだろうか、それは一つの知的生命体を自らの手で作り出してしまうということで、上位世界の倫理観により拒絶してしまった。

パステルも同じような存在なのだが、彼女は落ちてきて自然と人格が目覚めたので、話は別だ。

上位世界での、もしもロボットに人格が備わったら、というSFの多くでは、ロボットは苦しんでいて、人間と敵対するに至っていた。地球にいたときはそんなことありえないと、創作として楽しめたが、実際に自分ができるとなると、生み出された命が自分を恨むようになるのではないか、という恐怖を夢想してしまふ。

新しく生命を作り出す禁忌感はこの世界ではあまりないのか、レンさんはしきりに「やりましようよー。」と言っている。実験大好きっ子だからマッドサイエンティストの気があるだけかもしれないが、ゴーレムを使役したり、魔獣からキメラを作り出すことができるこの世界では、生命への冒涇という考え方はないのかもしれない。レンさんも、「生きている人を犠牲にしてやるんじゃないから良いと思いますけど」という感じだ。

とりあえずこの日は、骨だけのスケルトンを一体作って終わった。

スケルトンは、肉をはがすのに一番手間取うことになった。火で燃やすと骨まで燃えてしまうことがあるし、臭いが大変なことになる。結局氷魔術『氷刀』で削っていった。レンさんはさすがに触りたがらなかった。

心臓や脳もそうだが、頭蓋骨や脊椎などにも大きく根源量が偏っていることがわかった。

ちなみにゾンビは腐らないように『氷棺』で氷漬けにしてある。

俺は直接宿に帰ったが、レンさんはまた死刑囚を殺した直後の死体を買いに行った。

前はエルフに無理やり危険な実験をさせられて嫌だったが、今では好きな、しかも目的がある研究ができるので楽しいのだとか。

美人、しかもハーフェルフでロリ巨乳なレンさんの笑顔は素敵だが、このままではブリトニア島にいったら実験室を作って、ゆくゆくはマッドサイエンティストになってしまうのではないかと、一抹の不安がある。

三日後、レンさんと赤ん坊を見せてもらってまわることにした。俺とレンさんで新婚夫婦を演じ、「かわいい赤ちゃんですね！ 私たちもこんな子がほしいなあ」という感じで、レンさんが赤ん坊の母親と話している間に俺が【根源管理】で見るといふ作戦だ。

ステラやミアも行きたいと言ってきたが、妹にしては雰囲気も種族も違うので断り、いつも通り王都の外の森で魔術の練習をさせる。最近はいリスに頼らずとも魔獣を狩れるようになってきたらしい。ミアは【魔獣使い】で機動力のある魔獣に乗れるので、4人の中でもトップクラスの討伐数だ。

火属性の魔術は、他と違って、ただそこに存在しているだけで熱量により攻撃を加えられるので、ダメージディーラーとしては随一だろう。

さて、果たして作戦は成功した。
それはもう恙なく終わってしまった。

レンさんもほとんど顔を動かさないようにすれば、耳に駆けた幻影を見破られることもない。近づくときに耳に幻影をかけながら、口を外して笑顔になれば、特に怪しまれなかった。

これであとはレンさんの言うままにアンデッド作りだ。

俺も知的生命を作るのを、宿で他の子たちに聞くと問題ないと言われたのもあって決意したのだが、やはり死刑囚の身体のままではかわいそうだと思った。

放っておけば腐っていくのだし、闇魔術を使った部分が表にでていると、太陽の下にでたときに動きが鈍くなってしまう。

よって、根源量が多い頭蓋骨と脊髄をそのまま、そして全身の骨を砕いて使うことにした。

人形の素体を作り　人形といってもパステルが研究して自らなつた、人間的な機能もあり、外見は人間　、その中に骨をいれ、骨の中に人格を刻むことにする。こうすることによって、骨が直接日光に触れないので、昼にも活動ができるようになるし、外見もパステルにならって好きなように変えられるだろう。

人格を持たすだけで、根源はほぼいっぱいになつてしまつが、肉体部分に根源量が多い素材を使うことで、恩寵も刻めるようになる。もちろんパステルの容量と比べたら数億倍以上少ないわけだが。改造についてはパステルに指導してもらつことにしよう。

刻む人格については、俺やレンさん、アイリスなどの人格部分を見た後に、赤ん坊の人格部分を見ることによって成長していくとどの部分が増えているかを大まかに知ることができたので、16歳くらいの女子の人格を元にするに決めた。記憶は入れず、性格はまっさらな状態にするので、生まれてからの環境でさまざまな個性を得てくれると思う。

こうして準備をして、作業には5時間ほどかけて初めての人造知的生命体が完成した。以後ホームンクルスと呼ぶことにする。

できた少女は人格部分は16歳なので泣き出すことはなかったが、すぐに俺の方に来た。俺の血での繋がりに感じているのだろう。

頭で左手をあげてと念じると彼女は左手を上げた。
言葉についても常識についても一から教えていかななくてはならない
だろう。俺と血で直接つながっているために、教えやすいとは思
うが。

「名前は どうします？ クロノさん。」
レンさんが問いかける。人間にしか見えない生命の誕生にまだ興奮
しているようだ。

うーん、どうするか：仕えてくれる者だから「サーヴァント」だけ
ど、もじるのが難しいな。
フランス語の セルヴィットール *serviteur* からとることにするか。

「セルヴィ。お前の名前はセルヴィだ。俺の名前はクロノ・タナカ。
これから宜しく頼む。」

主人らしい態度で挨拶をした。

余談だが、残った死刑囚は肉を剥ぎ取って骨だけ 肉はどうして
も腐るので にし、その骨も洗って消毒、保存することにした。

次のホムンクルスを作るとしたら、セルヴィが致命的な欠陥をもつことなく、普通に人間らしく思考できるようになってからだ。その時には上位世界から持ち込んだ扇子や銀時計にも人格を与えようかと思う。

ホムンクルスを作らない場合や余った場合は、夜間作業用のスケルトンとして使う予定となっている。

22話 新天地へ(前書き)

新章です

22話 新天地へ

「死にたい恥ずかしいもうだめですキャラが崩れた終わりです」

とぶつぶつ呟いているパステル。

小さい声で言っているが、周りがもつと静かなので聞こえてしまっているよ……？

今はパリスに到着するちょっと前。

東西にのびる大通りを外れて、少し狭くなっていた道が港町パリスに近づくにつれて広くなっていく。

俺とパステルとレンさんとアイリスが乗る馬車の前には、ミアがケンタウロス二頭を指示して馬車を引いている。後ろには、セルヴィ、フラン、ステラを載せた馬車が連結していて、更に後ろには食

糧などや個々の荷物 レンさんの実験道具が多い を載せた馬車。

なぜこんな無茶ができるかというところ、ケンタウロスの並外れた体力が一つ。もう一つは【軽量化】のおかげだ。

他人の馬車を勝手に軽くしているのか？ 多分したら喜ばれるだろうけど、噂が広まるのもいやなので、【軽量化】を刻んで、運んでもらい、定着する24時間以内に吸収して、また刻印し直している。これによって効果がありつつも馬車の重量は借りた時と変わらない状態で返せる。

数日前に王都でカルロスさんと会い、その時に暇だったということ、なぜか王にも謁見できてしまい、3カ月後に珍しい恩寵を持た人を連れてくるという約束をしっかりとさせられる。

この日は昼に聖女のパレード シルフの子供が【隷属】の首輪で無理やり担がれているやつ が王城前であるということ、立食しながら王城の中から見せてもらった。……正直どこともしれない人間である俺を簡単に招き入れていいのだろうかと思う。

その後は王都から馬車で出発し、いくつかの街を経由しつつ、パリスの直前の街で食糧と、既にパリス入りしている人が多いという情報を受け取って、少し急ぎ気味に走っているのが現在だ。

なぜ数日経ってもパステルが壊れているかというところ、一旦収まったのに、今朝にまたもやセルヴィに『口撃』されて落ち込んでしまったのだ。

あの時のパステルの壊れぶりを、無駄にうまい口真似で再現することとで……。

パステルが忘れようとした黒歴史を掘り返してしまったということだ。

さすがにキレかけたよ、パステルも。しかし事実だから口を慎むしかない。

俺が、子供の言うことに気にするな、とセルヴィを擁護したのもパステルには衝撃だったらしい。一の従者が云々で争っているし、アイデンティティの崩壊をしていないか心配。

「クロノ、あまり気にしないほうが良いですよ。子供じゃないんだから自力で復活できるでしょう。」

胸のあたりから声が聞こえる。

以前少し触れた、上位世界から持ち込んだ銀時計に人格を目覚めさせたキヨウさんだ。

セルヴィのように人格をいれようかと思って根源をいじろうとしたらその拍子に人格が目覚めた人（？）。たしかにパステルほどではないにせよ、上位世界の物なんだから根源量的に、人格目覚めても

おかしくなかったね。

ネーミングは、銀杏の「杏」という漢字を音読みして「キヨウ」である。

突然だがこの銀時計キヨウさんは、年齢的に大先輩である。

祖父の祖父が天皇陛下より下賜されたのが100年ほど前だといふのだから驚きだ。100歳ってお姉さんってレベルじゃない……でもおばさん扱いしたら怒られそうだからやめておく。

実際にキヨウさんから見たら俺が孫の孫みたいな存在なはずで……既に亡くなった祖父も、祖父の父も子供時代を見ていたのだから、不思議な感覚だ。人間にとっての100年とはいかに長い時間かわかる。

祖父の死を乗り越えられていない、心の弱い自分は少し感傷に浸ってしまったようだ。

時の天皇陛下の御手から下賜された由緒正しい銀時計であり、幾度もの戦火を耐えきった100年の時を越えて現存するキヨウさんには、この世界ではキヨウさんしかもっていないだろう、貴重な恩寵も刻印されているのが発覚した。

天階恩寵として、【現人神の祝詞】 【明治天皇の加護】 【帝国の英霊の想い】

高階として【守護霊】 【火属性無効化】 【体外魔力支配 雷神】 【体外魔力支配 水瀑】 【大器晩成】 【水属性無効化】

中階として【危険察知】 【不可壊】。

最初の三つが天階となっているのは、上位世界に強く関わっているからだろうね。アンダーワールドから見るとまさに天上なんだから。

【現人神の祝詞】 【明治天皇の加護】 【帝国の英霊の想い】は全部日本人だと大幅な補正がかかるもの。しかし、こちらの世界と上の世界の関連性が薄いために、少し幸運になる程度。【帝国の英霊の

想い】はデメリットとして黒髪以外に好戦的になるので、オフにしてもらう。

現人神とはおそらく今上天皇のことを言っているのだろうな。人間だけど、ある意味神みたいなものか？

【守護霊】 【不可壊】 【火属性無効化】 【危険察知】 は、戦争を乗り切ったからついたと思われる。かなり便利だ。【守護霊】を發動すると、身長180cmくらいの長身の女性がでてきた。キョウさんが自由に姿を変えられるとのこと。いざという時に助かりそうだ。【火属性無効化】も相当便利。焼夷弾とかから逃れきった経緯が見える。

【体外魔力支配 雷神】 【体外魔力支配 水瀑】 【大器晩成】 【水属性無効化】 は銀杏関係だと思われる。雷属性と水属性なのは大学のイメージカラーが黄と淡青の銀杏だからで、【大器晩成】は銀杏が長寿でかなり大きくなることに由来、【水属性無効化】は銀杏を使った木材の水はけがいいことからついたのだろう。

キョウさんレベルの品でこれなら、上位世界での神器と呼ばれる物がこの世界に降りてきたら大変なことになりそうだ。由緒や逸話がありすぎて。

ちなみにほかに上位世界から持ち込んだライターと扇子とパスポートとペーパーカッターと万年筆はまだ人格を芽生えさせていない。そのうちパスポート以外はするかもしれない。自分の写真が貼つてあるパスポートが人格をもつのはちょっと嫌だ。

キョウさんの根源量も俺やパステルほどではないが、この世界全体と同じか少し少ないくらいなので【怪鳥の翼】 【風読み】 【再生】

を刻印させてもらった。

なぜかというと、空を飛ぶため。今まで、【怪鳥の翼】が人間にあつても身体が思いつきり損傷してしまい、かつ自由に動かせないので意味がなかったのだが、キョウさんが翼になって飛んでくれればいいことに気づいた。【再生】で簡単に元の姿に戻れるし、【不可壊】があるから損傷して壊れる心配もない。

それでもうまく飛べない分は、キョウさん自身が魔術を使えるのだから、風魔術なんかで調整してもらうことにする。

これなら飛んでいる間も俺は両手も思考も空く。

なんでこんなことを突然言ったかというと、落ち込んでるパステルを慰めようと、抱えて馬車から空へ飛び出したからだ。

「……………ぐすん。」

無言で瞳を伏せるパステル。

相変わらず人形のように整った顔に白い肌、白い透き通るような髪。妖しく光る赤い目。身体はモデルや美の感じ方を計算された上で作られた完璧なスタイル。俺が飛ぶとわかった瞬間に自分に【軽量化】を発動させるほどの気遣い。

これだけ最高の従者を堕ち込ませておくのは許されないだろう。

主としても、男としても。

空は気持ちがいい。

青というキャンパスに白い絵具で描かれる絵の群れ。遠くに見える海からは潮風の匂い、きらきらと輝く透明の水。巨大な山でも森でも全体を見渡すことができる。

大空を支配した鳥は何を考えて飛んでいるのだろうか。当たり前になりすぎて何も感じないのだろうか。それなら勿体ないことだ。

ほんの少しの空の旅。久しぶりの二人きり　正確にはキョウさんもいるけど　だが、何も話すことなく終わってしまった。そろそろ街からも見えるので堂々と空を飛ぶわけにはいかないだろう。

馬車の上に着地した時にはパステルの顔も戻っていたような気がする。俺よりも何十倍も強い従者なのだ、大丈夫だろう。

「……………がとう……………います。」

王国北西部の港町パリス。

100年くらい前に建設された街で比較的新しく、主に王国東部から西部へ荷物を運ぶ時の中継地点として用いられるため、人はあまり多くなく、寂れたとも人気があるともいえない街だ。

こんなところを攻める人などいないためか、街には簡単な魔獣よけの壁しかなく、開きっぱなしになっている門から街に入る。

家は石造りが基本で、煉瓦の家も多い。コンクリートに煉瓦を張り付けた似非煉瓦の家じゃなくて、全部煉瓦の家なんて初めてみた。地震が多い日本じゃ不可能だからね。となるとここは地震が起きないのかな。地上の世界地図で言えばフランス北部なわけだけど、ヨーロッパは震度3くらいでびっくりするくらい耐性ないんだっかな、地理は高校二年からやっていないのでほとんど覚えてない。

「クロノ・テアナーク様ですね？ 初めましてわたくしは王国の南部にいたエルフ族代表のトミーと申します。このたびはどうも。お世話になる集落の代表として挨拶に参りました。」

馬車を置き、待ち合わせに指定していた宿に行くと、その外にエルフ耳をした長身の優男が経っていた。おそらくこの外見でも相当年上なんだろう。

宿の一階の酒場は貸し切られていて、明日ブリトニア島に行くための待ち合わせ場所になっているのだ。店の女将に上の宿に泊まる代金まで先払いしたら、喜んで貸切にしてくれた。

「初めまして、トミーさん。丁寧にどうも。今回の試みが良い方向に向かうことを祈りましょう。まだ来ていない人はいますか？」

無闇にへりくだりすぎないように気をつける。一応代表となっているのだから。トップが揺らぐとダメだ。

「ええ、来た人からチェックしてはいますが、全員既にきているようです。最も、今は自由時間としてますので夕方まで帰ってこないでしょう。」

これだけ誠実な人がエルフ族のリーダーなら、人族や他の住人との折り合いも何とかつけられるかもしれない。最初は居住区をくっつけすぎないようにするけども。

交流が大事といってもそれはゆっくりでいい。最初のガタついている時に問題を起こされるとたまらないからね。

「では我々も夕方まで休憩させていただくとしましょう。明日からは暫し、宴会とはお別れでしょうからね。」

最後に微笑みあうと、トミーさんはエルフ族が固まっている方へ、俺はみんなの方へそれぞれ戻る。

「本日は夕方まで自由だ。夕方からは宴会があるので極力参加すること。以上だ。」

そういうとフランもステラもミーアもアイリスも、自分の村や集落のメンバーのところへ駆けて行った。久しぶりに親戚や家族に会うのだから楽しみにしていたのだろう。

これからは同じところで、奴隷にされる心配なく暮らせるのだ。いや、暮らさせてみせる。

そして時間は進み、宴会で豪華な料理が出され、明日動けなくなっ
てしまわない程度に酒が振る舞われる。

みんなも今日はできるだけ着飾っているので色とりどりで美しい。
ささやかな祝宴にも明日の門出への期待、幸せの予感に満ち溢れて
いる。もちろん不安はいくらでもあるだろう。でも前を向いてくれ
ているのだ。

「レンさん、楽しめてる？」

一人で端で飲んでいるレンさんに声をかける。

「あゝクロニヨさんですかあ。楽しいですよあ。」

……完全に酔っているよこの人。
ハーフエルフという立場はここでも重くのしかかってきたのだろう、
酒に逃げたくなるほどに。

ここにいるエルフたちは、レンさん自らが周って説明して集めてき
たにもかかわらず、必要以上に関わり合いにならないのだ、他の
エルフにどんな扱いをされて20年を過ごしてきたのか。心の闇は
想像もできないほど深いのかもしれない。

その闇を埋めようとするか、忘却の彼方にやってしまおうとするか
はレンさんの問題なので、下手に口を挟むのはやめておこう。

その後も他愛のない話をして、酔い潰れかけたレンさんを担ぎ、二
階の適当な部屋に連れて行った。

……寝顔を見ても26歳とは到底思えない。エルフは神秘だ。

子が母にしがみつくようにまわされている腕を外して部屋から出る。

「ご主人様。」

廊下に立っていたのはパステル。

「明日の朝までには戻ってまいります。」

「頼んだ、パステル。」

こちらが命令しようとしていたことを先に察してくれる。
言うべきか迷う命令は俺が言うより先に行ってくれ。

主に少しでも不快な思いをさせないように振る舞ってくれるパステル。

『バサッ』

という音がしてパステルの背中から大きな銀色の翼が生え、窓から飛び去って行った。

一番の従者は彼女以外いないだろう。

「いよいよ今日はブリトニア島に入る！　ブリトニア島に私が建設する国家は、弱者が虐げられない国家だ！　共存の精神を持つ者にはいつでも門戸を開く！　国家といえないほど小さな国家なれど、国の理念は大国にも劣らない大きなものだ！　この世界で初の種族混合国家となつて歴史に名を刻もう！　国家の名はレスト　翼休む刻　と名付ける！」

代表者としての慣れない演説を終え、順番に船に乗り込む。3つの船でぎりぎりだ。すべて【固定化】をかけたから大丈夫だとは思つが……。

何はともあれ、あのハリスさんの約束から早数か月、国家を立ち上げるには異例の速さだろうが、俺自身の印象としては『やっと』だ。

見ていてくれ。

身分の低さや種族の違いで差別されることのない場所を、日々
危機を感じることなく幸せに生きられる地を、作ってみせるから。

22話 新天地へ（後書き）

そろそろ更新が遅くなる…かも。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1107x/>

純白の従者と漆黒の恩寵管理者

2011年10月10日04時28分発行